本庄市埋蔵文化財調査報告第５集 １分冊

埼玉県本庄市

二本松遺跡発掘調査報告書

―県道本庄・鬼石線道路改良事業に伴う発掘調査報告Ⅰ―

本庄市教育委員会

本庄市埋蔵文化財調査報告第５集　１分冊

埼玉県本庄市

二本松遺跡発掘調査報告書

―県道本庄・鬼石線道路改良事業に伴う発掘調査報告Ⅰ―

本庄市教育委員会

序

埋蔵文化財の宝庫、本庄市においては、「温故知新」を旨として鋭意研究調査を推進しております。

昭和５５年、文化財保護係を設置し、県指定文化財の旧本庄警察署を復元して、郷土の出土品を展示するなどの事業を実施しております。

昭和５７年には藤田公民館（旧藤田村役場）の移転にともない、埋蔵文化財センターを開設して、出土品の整理、復原、収蔵にあたっております。

現在、県道本庄・鬼石線の発掘調査が進行中ですが、ここに、今までの経過を記録し、報告書を作成いたしました。

調査、報告書の刊行にあたったのは、教育委員会職員の他、茂木秀敏、石橋桂一、大束今日子、関根典子の諸氏の献身的な協力をいただきました。

いつもながら、県教育局文化財保護課の先生方をはじめ、地元関係者のみなさんの、心温まるご指導をいただき、心からお礼申しあげます。

おわりに、将来、本庄市を中心に、県北の埋蔵文化財の蒐集、保存機関として、公立のより充実、整備された埋蔵文化財センターが創設され、貴重な出土品が、後世に伝えられることを切望して、序といたします。

昭和５８年３月１０日

本庄市教育委員会

教育長　　飯　島　　彰

例　　言

1、本報告書は、埼玉県の委託を受け、本庄市教育委員会が調査主体となって実施した、県道本庄・鬼石線道路改良事業に伴う発掘調査報告書の第一冊である。

2、本報告書は第一分冊を二本松遺跡、第二分冊を社具路遺跡、第三分冊を夏目遺跡と刊行予定で、全分冊が揃って一冊の報告書の体裁をとるよう編集した。従って調査のまとめ、考察は第三分冊に予定している。

3、発掘調査は、昭和５５、５６年度の２ケ年にわたって、長谷川勇、増田一裕が担当し反町光弘、石橋桂一、大東今日子の補佐を得た。調査組織は別に掲げてある。

4、発掘調査は、テストピットで耕土を確認した後、重機により耕土除去を行い、遺構を確認しつつ検出した。実測は座標に合わせたグリット打杭を中央航業株式会社に委託し、更に担当者がトランシット（測機舎、ＴＭ２０Ｄ）を使用、６ｍ毎に打杭し１～２ｍグリット（５寸釘利用）を設定し垂球を利用して行った。レベルは中央航業の設定したベンチマークからレベル（測機舎自動レベルＢ２）を使用して測定した。

5、住居址番号は既に調査されているものと後日、混乱を避けるため１０号から番号を付した。

6、出土品の整理作業は長谷川、石橋、大東を中心として、関根典子、笠本節子、久保田かづ子、井上富美子、津久井八重子が、土器復原、実測、トレース、版組などを行い、長谷川が総括した。

7、本書の執筆は、長谷川、石橋、大東が分担して行い、それぞれ文末に記したが、長谷川が文体を整えるために加除筆を加え、編集を行った。

8、発掘調査を実施するにあたり、次の諸氏からの協力があった。（順不同、敬称略）

竹並栄一郎　桑原　弘　中沢　章　恩田米保　大塚豊三郎　岡芹鶴五郎　小谷野一郎
大塚千代次　浅見勘之助

特に竹並建設株式会社には、長期間にわたって、プレハブ事務所用地を提供していただいた。

9、発掘調査及び出土品の整理、報告書の作成にあたっては、次の諸氏から御指導と御教示を、いただいた。（順不同、敬称略）

野村鍋一　早川智明　栗原文蔵　塩野　博　柿沼幹夫　駒宮史朗　井上尚明
宮崎朝雄　杉崎茂樹　横川好富　小川良祐　金子真土　菅谷浩之　梅沢太久夫
増田逸郎　石岡憲雄　浅野晴樹　高橋一夫　中村倉司　佐藤忠雄　坂野和信
小久保徹　福島興厳　水島治平　柴崎起三雄　坂本和俊　高橋一彦　高田儀三郎
外尾常人　三上元一　鈴木徳雄　岡本幸男　田村　誠　丸山　修　長滝歳康

特に水島、柴崎、外尾の諸氏には、細部にわたるまで指導、助言を得た。

10、本報告書に使用した実測図及び観察表は次の凡例による。

1）　遺構（竪穴住居址、土壙、井戸）は６０分の１、カマドは３０分の１としたが、各図にスケールは付さなかった。

2）　遺構掲載図の、斜線は主として遺跡の基盤であるローム層、網目は焼土を表現している。

3）　遺物は４分の１に統一したが、各図にスケールは付さなかった。

4）　遺物実測図で中心線の一点破線は、適宜回転して実測したもの、口径の一点破線は口径円周が½以下の遺物である。従って相方が一点破線の遺物は参考程度に掲げたものである。

5）　遺物実測図の器壁に直交するヒゲはヨコナデの範囲を示し、方向の判明するものは→印で示してある。

6）　遺物の観察表は、1法量、2胎土、3成形、4整形、5形態、6焼成、7色調、8使用痕9出土状況、10接合関係、11備考の順に記述、それぞれ頭文字で略した。

1、単位はcm（　　）は推定である。

2、「黒色粒子」「黒色微石」は角閃石と考えられる。「褐鉄粒」とは径1～4mmの褐鉄鉱様の粒子で、取り出して磁石をあてると付着するもの。「練込み」とは練りが不充分で異質の粘土が流水状となったもので、人意的ではないと考えられるが表記した。

3、製作されたと考えられる順に記述した。「上り底」とは、製作時に土器自体を回転するとできる、一見上げ底風の底で（『本庄市史・資料編』）改めて実験し確証を得て便宜的に使用した。「弧状ヘラ」（『本庄市史・資料編』）とは製作時に使用されたと考えられ、明瞭に痕跡の認められるものにこの語を用いている。

4、用語の使用については、各種報告書で一般的に使用されている語句を踏襲した。

5、実測図で表現しにくい部分のみ記述した。

6、良、普、悪で表現した。（但し現状観察である）

7、赤褐色、橙褐色、黄褐色、灰褐色の4色調を全遺物中から選び、基調とした。個体が同一色調でないものは付記してある。

8、放棄後の風化等の痕跡も記述した。

9、本報告書では遺構実測図との関係は概略を記すのみにとどめた。

10、広範に分散したもののみ概略を記述した。

11、大束今日子の観察により製作が丁寧なものを「精」粗雑なものを「粗」とした。不可抗力による復原の不出来は「復原不良」と記した。

○　発掘調査の組織は下記のとおりである。

昭和55年度

調査主体者　本庄市教育委員会

教育長	飯島　彰
社会教育課長	島田徳三
指導主事	塩原正美
課長補佐兼文化財保護係長	金井善一
庶務	伴　瑞江
文化財保護係	長谷川勇
〃	岸　隆雄
〃	反町光弘

昭和56年度

調査主体者　本庄市教育委員会

教育長	飯島　彰
社会教育課長	島田徳三
指導主事	矢崎昭夫
課長補佐兼文化財保護係長	長谷川道夫
社会教育係長	高田節子
文化財保護係	長谷川勇
〃	反町光弘
〃	増田一裕

調査担当者	長谷川勇	調査担当者	長谷川勇
調査補助員	石橋桂一		増田一裕
作業員	茂木秀敏他	調査補助員	反町光弘
			石橋桂一
		作業員	茂木秀敏他

○　本報告書作成の組織は下記のとおりである。

昭和５７年度

主　体　者　本庄市教育委員会

教育長	飯島　彰
社会教育課	
課　　長	戸塚克男
指導主事	矢崎昭夫
課長補佐兼文化財保護係長	長谷川道夫
社会教育係長	高田節子
文化財保護係	長谷川勇
〃	増田一裕
〃	春山康寿

担　当　者	長谷川勇
担当者補助	石橋桂一
〃	大東今日子
作業従事者	関根典子他

目　　次

序
例　言
目　次

Ⅰ　発掘調査の契機と経過
　１、発掘調査に至る経過……１
　２、発掘調査の経過……２
Ⅱ　遺跡をとりまく環境
　１、本庄発掘調査略史　―歴史的環境にかえて―　……５
Ⅲ　二本松遺跡
　１、遺跡の概要……１３
　２、遺構と遺物……１４
　３、小　結……６５

挿　図　目　次

第　１図　遺跡の位置図１……１１
第　２図　遺跡の位置図２……１２
第　３図　二本松遺跡全測図……折り込み
第　４図　二本松遺跡１０号住居址・４号土壙……１４
第　５図　二本松遺跡１０号住居址出土遺物……１５
第　６図　二本松遺跡１１号住居址……１７
第　７図　二本松遺跡１１号住居址出土遺物 (1) ……１８
第　８図　二本松遺跡１１号住居址出土遺物 (2) ……２０
第　９図　二本松遺跡１１号住居址出土遺物 (3) ……２１
第１０図　二本松遺跡１２号住居址……２５
第１１図　二本松遺跡１２号住居址出土遺物 (1) ……２６
第１２図　二本松遺跡１２号住居址出土遺物 (2) ……２７
第１３図　二本松遺跡１３号住居址……２９
第１４図　二本松遺跡１３号住居址・カマド……３０
第１５図　二本松遺跡１３号住居址出土遺物……３１
第１６図　二本松遺跡１４号住居址……３２

第１７図　二本松遺跡１４号住居址・カマド…… ３３
第１８図　二本松遺跡１４号住居址出土遺物 (1) …… ３４
第１９図　二本松遺跡１４号住居址出土遺物 (2) …… ３５
第２０図　二本松遺跡１５号住居址…… ３９
第２１図　二本松遺跡１５号住居址・カマド…… ４０
第２２図　二本松遺跡１５号住居址出土遺物 (1) …… ４１
第２３図　二本松遺跡１５号住居址出土遺物 (2) …… ４２
第２４図　二本松遺跡１６号住居址…… ４７
第２５図　二本松遺跡１６号住居址出土遺物…… ４８
第２６図　二本松遺跡１７号住居址…… ５０
第２７図　二本松遺跡１７号住居址・カマド…… ５１
第２８図　二本松遺跡１７号住居址出土遺物 (1) …… ５３
第２９図　二本松遺跡１７号住居址出土遺物 (2) …… ５４
第３０図　二本松遺跡１７号住居址出土遺物 (3) …… ５６
第３１図　二本松遺跡１８号住居址…… ５９
第３２図　二本松遺跡１８号住居址・１９号址出土遺物…… ６０
第３３図　二本松遺跡１９号址・井戸・土壙出土遺物…… ６１
第３４図　二本松遺跡土壙 (1) …… ６２
第３５図　二本松遺跡土壙 (2) …… ６３
第３６図　二本松遺跡土壙 (3) …… ６４

写真図版目次

写真図版１　二本松遺跡空中写真　二本松遺跡調査風景
写真図版２　二本松遺跡１３号・１４号住居址　二本松遺跡１３号住居址カマド
写真図版３　二本松遺跡１４号住居址カマド　二本松遺跡１５号住居址
写真図版４　二本松遺跡１５号住居址カマド　二本松遺跡１７号住居址
写真図版５　二本松遺跡１７号住居址遺物出土状況（カマド周辺）
　　二本松遺跡１７号住居址カマド
写真図版６　二本松遺跡１８号住居址　二本松遺跡１９号址

Ⅰ　発掘調査の契機と経過

1．発掘調査に至る経過

当本庄市では、御手長山古墳の破損事故以後埋蔵文化財に対する対応策が強化され、市教育委員会直営で調査ができるようになり、開発に伴う事前協議、緊急調査を実施してきた。

この中にあって県道本庄・鬼石線道路改良事業は、昭和４３年３月３０日に計画決定し、既に本庄市発行の都市計画図等に盛り込まれて、事前の発掘調査が予測されて久しかった。

埼玉県土木部道路建設課長は、昭和５３年８月７日付け道建第７１２号で、埼玉県教育局文化財保護課長宛に、当該道路予定地域の埋蔵文化財の所在と取扱いについて照会がなされた。

これを受けて文化財保護課は柿沼幹夫主事を現地に派遣し、市教育委員会から長谷川が同道して、予定地内全域をくまなく踏査して、全面にわたって遺物の散布がみられることを確認した。

更に周辺地域は、昭和３０年代より発掘調査が実施され、カマドの発生について多くの問題を投げかけた二本松遺跡、西富田新田遺跡、西富田遺跡などが広く知られ、これらの遺跡を縦断する形の開発であるため、周知の遺跡以外の地域をも含めて調査の必要性が認識されたのである。

現地踏査とこのような状況下にあることから文化財保護課長は、昭和５３年１０月９日付け教文第５３７号で、道路建設課長宛に、当該道路予定地域の埋蔵文化財の所在及び取扱いについて、次のように回答し、同日、同号付をもって本庄市教育委員会へも通知がなされた。

１、本庄市№８８、８９、９１、９３、１５７号遺跡（古墳～平安時代集落跡）が所在し、路線全域が埋蔵文化財包蔵地である。

２、上記埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、やむを得ず現状変更する場合には、文化財保護法第５７条の３の規定により、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること。

３、発掘調査は長期間を要すると判断されるので、文化財保護課、本庄市教育委員会との事前協議を徹底されたい。

昭和５４年８月１５日付け、道建第６９８号で、道路建設課長は文化財保護課長宛、道路予定地域内の文化財の取り扱いについて協議がなされた。

本庄市教育委員会では既に女堀区画整理事業予定地に所在する笠ケ谷戸遺跡、雌濠遺跡の発掘調査が継続中であり、計画に組み入れ難い状況下にあったが、市長部局、埼玉県土木部の強い要請と文化財保護課の指導により本庄市教育委員会では調査主体となることを了承し、発掘調査は昭和５５･５６年度の２ケ年で実施することとなり、この旨、昭和５５年７月２１日付け、教文第４１５号で、文化財保護課長から、道路建設課長宛回答がなされた。この回答は同日、同号をもって埼玉県教育委員会教育長から本庄市教育委員会教育長宛通知がなされ、その間本庄市教育委員会では経費を６月補正予算に計上するとともに発掘準備に入り、埼玉県知事、畑和、本庄市長、織茂良平による「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」が８月１日付で締結、取り交わされた。更に５６年度については同様委託契約が４月６日付で取り交わされ、引きつづき発掘調査が実施された。　（長谷川）

2．発掘調査の経過

昭和５５年度

８月

７月の下旬より調査の準備を整え、９日から作業員によるプレハブ事務所周辺整備、発掘区下刈り、桑切り、抜根等の作業が開始され、実働１２日後の２５日より重機による耕土除去作業に入った。調査区域外に排土置場が確保できずに、調査区域を二分して便宜的に市道で区画して実施した。今年度調査予定地を社具路遺跡とする。

９月

６日までに一期分約３５００㎡の耕土除去を終わる。一期調査対象地は、今年度予定地のほぼ中央にもとめたが大半が粘土質土の堆積が著しく、ローム台地は南端の一部にみられたのみであった。中世富田氏居住地とされている地域にあたり、直角に検出された溝は館址の一部と考えられたが、調査が進むにつれて単なる溝であることが判明する。粘土質土は非常にかたく、検出に苦慮する。

１０月

溝、井戸、土壙など遺構の検出を行い、グリット杭から１～２ｍピッチに釘落としを行い、１４日より順次実測に入る。粘土質土とローム台地を画する溝のみが、ローム台地上に検出された和泉期住居址と同時期と考えられる他は、全て中・近世であることが推察された。

１１月

前月に引きつづき、実測とローム台地上の住居址の検出に努める。二期調査地区の下刈り開始。撮影を終了したものから遺物取り上げ、２０日に航空撮影を行う。その間二期調査地区にトレンチを数本入れるが、土器片の出土多く密集した遺構が予測される。１７日より重機による耕土除去を北方から行う。重複した遺構が次々に検出される。調査完了地域へ排土運搬。二期調査地域は大半がローム台地であり、検出は容易であった。南端ローム台地上の遺構細部調査を行う。特に３号住居址のカマドは初現期のものと考えられ、十二分に留意する。

１２月

耕土除去は１６日までに終了、二期調査地は北部と南部に分断され、順次重複のない遺構から調査を開始する。確認面における状況把握のため、ジョレンによる清掃と小トレンチで前後関係を予測しつつ検出を行う。

南部地域は五領期、和泉期の集落である可能性が強く、やはりローム台地と粘土質土の堆積地を区画する溝が存在し、耕土除去前、溝状凹地が認められていた。それ以南には、水田遺構らしきものも認められなかったので調査対象から外した。

耕土除去最終日に台付甕、Ｓ字状口縁を伴う土壙を検出したことによって、貫板による遣り方を組み調査に備える。年末年始の長期休業に備え、この土壙のみ調査を終える。

１月

６日より調査を開始し、南部調査区に主力を注ぐ。井戸址は礫層で危険なため完掘できなかった。寒さにより霜に悩まされるが、ほぼこの地区の調査を終了し作業員を北部地区に投入する。

２月

北部地区でも霜に悩まされながら順次、検出、実測、撮影を行う。耕土のみを除去したプラン確認に手間取り、更に重複多く苦慮する。その間５６年度調査予定地の桑枝切除、テストピットによる試掘を実施する。河川跡や密集した遺構の存在が予測された。降雪多く調査日数少ない。

３月

１４日までに大まかな遺構の検出が終了し、実測、撮影及び遺物取り上げを行う。住居址については、複合関係むずかしく、独断的判断という問題を残しながら続行する。併せてカマド等細部の調査も行う。５５年度は予定に合せて尽力したが、予想を上まわる遺構が検出されたため、若干５６年度に持ち越すことにして、月末の２７日航空撮影を実施し、今年度分調査を一応終了する。

昭和５６年度

４月

前年度調査予定地の実測と、カマド等細部の調査を行うが実測に手間取る。２７日より５６年度調査予定地に重機を入れて抜根作業を開始する。

５月

６日より一期分耕土除去を重機によって開始する。５６年度調査予定延長６００ｍのうち、南から約３００ｍの区域をプレハブ事務所下を残して北進する。当初より推測されていたとおり、河川跡と密集した集落が検出された。前年度調査地域相かわらず手間取る。１９日市教委職員、資料館職員により、検出されたカマドを復原して炊飯実験を実施する。

６月

カマドの構築土に遺物が含まれていないか検出するため、カマドの取りくずし、フルイかけ、水洗作業を実施するとともに、実測を終了させ、最終撮影を行う。

当初調査できなかった市道部分、新区長の尽力により耕土除去を行い調査に取りかかる。

７月

市道下の調査（新たに４軒）と５６年度予定区域の調査に着手する。河川跡以北は夏目遺跡とする。

夏目遺跡も重複が著しくプラン確認に苦慮する。更に周辺は新興住宅地で、地域住民からの要望事項や苦情多く作業に支障をきたすこと多し。

８月

プレハブ事務所移転。社具路、夏目遺跡の検出に尽力する。実測作業が追いつかず増員する。社具路遺跡で中世土壙墓２０基余検出される。実測の終了した遺構から撮影と遺物の取り上げを行う。

夏目遺跡の大溝の調査を開始する。

９月

プレハブ事務所下の耕土除去、２軒を新たに確認し、社具路遺跡では８４軒となる。夏目遺跡では複雑な重複をもちながら６１軒となる。１０日より二期調査区域の耕土除去に入り、区域外に排土置場が確保できたことにより調査日程に余裕ができて安心する。二期調査区は、南部に近代土壙群と北部に住居址９軒確認される。

１０月

夏目、社具路両遺跡の検出と細部の調査を主として行う。一期調査区大まかに目途がついたことにより２５日航空撮影行う。

１１月

遺溝に残されたセクションベルト外し、未実測部分の検討など行う。若干調査の遅れが目立ったため、実測、撮影、遺物取り上げ等、補助員、作業員を鼓舞する。１２日社具路遺跡中世土壙墓群内より土師質蔵骨器検出される。一期調査区極力作業の進捗を強め、中旬より二期調査区南端から遺構の検出を始める。

１２月

夏目遺跡のカマド構築土の取りくずし、補足実測、周辺土器片採集など行い、８日までに一期分調査地の調査を全て終了させる。主力を二期調査地域、二本松遺跡に投入する。二本松遺跡では遺構も少なく作業員もすでに縮少しており、能率的に実施し大半の調査は月末までに終了する。

１月

数名の補助員、作業員による細部の実測と検討を主として行う。補足実測を経て二期調査区域航空撮影を実施、カマド構築土の切りくずし、標準土層の調査を終え、全ての現地調査を終了する。

２月

５５年度の調査開始当初から実施してきた整理作業のみ行う。

３月

１１日に二本松１１号住居址の立合調査を実施する。結果的に遺物取り上げのみの調査であった。先月に引き続き整理作業のみ実施し、５７年度以降に予定されている整理報告書作成に備える。

（その後）

５７年度の８月４日から１０日までの延６日間に、５６年度一期調査分の夏目遺跡を縦断していた幅４ｍ、延長１００ｍの市道部分について、工事に伴う立合調査を実施する。すでに得られている実測図を略測にて補いつつ、遺物取りあげを主として行い、銅製品等の資料が得られた。

なお文化庁長官に提出した「埋蔵文化財発掘通知」の概要は下記の通りである。　（長谷川）

昭和５５年度

遺跡名	所　在　地	面積	通　知　番　号	文化庁受理番号	備　考
本庄93号	本庄市大字西富田 字西裏645番他	9000㎡	本教社発第 197号 昭55．８．１	55委保記第33－1788号 昭和55年11月14日	社具路遺跡

昭和５６年度

遺跡名	所　在　地	面積	通　知　番　号	文化庁受理番号	備　考
本庄91号	同　　同 字新田東354番他	6000㎡	本教社発第 109号 昭56．５．６	56委保記第２－1363号 昭和56年７月７日	社具路遺跡 夏目遺跡
本庄89号	同　　同 字北原336番他	3000㎡	本教社発第 219号 昭56．８．28	56委保記第２－3292号 昭和56年12月26日	夏目遺跡
本庄88号	同　　同 字弥藤次270番他	6000㎡	本教社発第 220号 昭56．８．28	56委保記第２－3293号 昭和56年12月26日	二本松遺跡

Ⅱ　遺跡をとりまく環境

1．本庄発掘調査略史

—歴史的環境にかえて—

本庄市域に於いて発掘調査は比較的早くから実施され、種々の問題提起がなされてきた。

市域を扱った考古学的記述は、「埼玉県史　第一巻　先史原史時代」や「児玉郡誌」などに若干みられるが、本格的な発掘調査は、昭和２９年１２月、本庄市大字西富田字二本松１５３番地（現栄２丁目７番）で地主である木村金作氏が、土師器を発見したことに端を発している。

その後昭和５７年までの発掘調査を市域に限り列記すると以下のようになる。

遺跡名	所在地	調査期間	調査主体者	担当者	備考
二本松	西富田二本松	30. 3.12～ 3.15	柳田孝司	三友国五郎 小沢国平 大護八郎	文献 1.2.3
稲荷塚	東五十子城跡	31. 4. 1～ 4.30	建設省熊谷国道工事事務所	武笠春雄	
二本松	西富田二本松	31.11. 2～11. 4	本庄市教育委員会	小沢国平	文献 4. 5
公卿塚古墳	北堀久下塚	32. 2.15～ 3.31	本庄市		
二本松	西富田弥藤次	32. 4. 2～ 4. 4	本庄市教育委員会	小沢国平	文献 6. 7
二本松	西富田弥藤次	32.12.23～12.30	滝口　宏	滝口　宏 玉口時雄 小林　茂	文献 11
二本松	西富田弥藤次	33. 4. 3～ 4. 5	本庄市教育委員会	小沢国平	文献 8. 9
薬師	西富田薬師	33. 8.10～ 8.15	本庄市教育委員会	小沢国平	文献 10
西富田	西富田夏目	35. 3.28～ 4. 6	早稲田大学考古学研究室	玉口時雄 小林　茂	文献 11
西富田	西富田夏目	38. 8.28～ 9. 3	早稲田大学考古学研究室	玉口時雄 小林　茂	文献 13
二本松	西富田二本松	39. 7.22～ 7.26	本庄市教育委員会	小沢国平 柳田孝司	
塚合古墳群	塚合	42. 3.25～ 4. 1	本庄市教育委員会	菅谷浩之	文献 16
二本松	西富田弥藤次	43. 7. 3～ 7. 7	本庄市教育委員会	柳田敏司 菅谷浩之	文献 24
台	西五十子台	44. 3.26～ 3.29	本庄市教育委員会	菅谷浩之	文献 24
西富田新田	西富田新田	46. 3.20～ 5.16	本庄市教育委員会	菅谷浩之	文献 19～21
前山二号墳	北堀字前山	49. 2. 4～ 3.27	埼玉県教育委員会	小川良祐	文献 25

				柿沼幹夫	
古川端	栗崎古川端		埼玉県教育委員会	小川良祐	文献 25
				柿沼幹夫	
東谷	栗崎東谷	49. 2. 4～ 3.27	埼玉県教育委員会	小川良祐	文献 25
				柿沼幹夫	
下田	東富田下田	49. 6.17～ 8.16	埼玉県教育委員会	小川良祐	文献 22
				柿沼幹夫	文献 29
下野堂古墳	下野堂	49. 7 ～50. 3	埼玉県遺跡調査会	菅谷浩之	文献 23
女堀条里	四方田	50. 3.22～ 5.30	関越自動車道共和	田中一郎	
			地区総合調査団	柿沼幹夫	
				大和　修	
久城前	今井久城前	50. 5.22～ 7.11	埼玉県教育委員会	横川好富	文献 26
				宮崎朝雄	
諏訪	今井字諏訪	50. 8.26～10.30	埼玉県教育委員会	増田逸朗	文献 29
				柿沼幹夫	
早大本庄高	栗崎西谷	51. 4.18～12.18	早稲田大学	滝口　宏	文献 30
地Ｂ２					
御手長山	小島上前原	52. 6.16～12.30	同　調査会	小川良祐	文献 27
女堀遺跡群	北堀、他	52.11.14～	本庄市遺跡調査会	早川智明	一次
		53.3.31		菅谷浩之	
宥勝寺北裏	北堀前山	53. 5.29～12.31	滝口　宏	桜井清彦	文献 31
女堀遺跡群	北堀、他	53.11.27～	本庄市教育委員会	長谷川勇	文献 28 二次
		54.3.31			
女堀遺跡群	北堀、他	54. 6.11～	本庄市教育委員会	長谷川勇	三次
		55.3.31		岸　隆雄	
三杢山	小島三杢山	54. 9.25～11.10	本庄市教育委員会	長谷川勇	古墳址
本庄 139号	小島	54.11.12～11.17	本庄市教育委員会	長谷川勇	古墳周堀
石神境	小島	54.12.17～ 2.16	本庄市教育委員会	長谷川勇	
天神林	本庄	55. 3.21～ 4.20	本庄市教育委員会	長谷川勇	一次
				岸　隆雄	
児玉工業団	今井一丁田	55. 6. 8～ 6.30	埼玉県埋蔵文化財	今井　宏	
地No.２			調査事業団	曽根原裕明	
雌濠	東富田中道	55. 6.30～	本庄市教育委員会	長谷川勇	四次
	他	56.3.31		岸　隆雄	
天神林	本庄	55. 6.30～ 8. 8	本庄市教育委員会	長谷川勇	二次
				岸　隆雄	

社具路	西富田西裏	55. 8. 1～ 56.3.25	本庄市教育委員会	長谷川勇	文献 32
八幡山古墳	小島林	55.11. 7～11.28	本庄市教育委員会	長谷川勇 岸　隆雄	
一丁田	今井一丁田	55.12.15～ 56.6.30	埼玉県埋蔵文化財 調査事業団	今井　宏 曽根原裕明	
大久保山	栗崎東谷他	55. 5.10～ 56.3.31	早稲田大学	滝口　宏 西村正衛 桜井清彦	
雌濠	東富田中道他	56. 4		長谷川勇	五次
社具路	西富田新田東	56. 5.18～10.31	本庄市教育委員会	長谷川勇 増田一裕	文献 32
夏目	西富田北原	56.12. 1～ 57.3.31	本庄市教育委員会	長谷川勇 増田一裕	文献 32
二本松	西富田弥藤次	57. 1. 7～ 3.31	本庄市教育委員会	長谷川勇 増田一裕	文献 32 本書

以上は、調査届が提出されたもののみであるが、この他に土木工事等により遺構や遺物が確認され報告がなされたものが以下である。（文献２４）

遺跡名	所在地	確認期日	確認者	備考
諏訪新田	寿	昭和30.9	水島治平	遺物のみ
御堂坂	御堂坂	昭和30.12	水島治平　内山欣三	遺物のみ
夏目	西富田夏目	昭和31.3	水島治平　柴崎起三雄	1軒
東五十子城跡	東五十子城跡	昭和31.4	新井哲夫　小池　久 水島治平　柴崎起三雄	4軒
小島本伝	小島本伝	昭和32.11	内山欣三　水島治平	1軒
西富田本郷	西富田本郷	昭和33.3	水島治平　柴崎起三雄	1軒と遺物のみ
東五十子城跡	東五十子城跡	昭和36.10	水島治平　柴崎起三雄 長谷川勇	2軒
諏訪新田	寿	昭和37.8	水島治平　柴崎起三雄 長谷川勇	2軒と遺物のみ
薬師堂	日の出	昭和41.4	卜部義典　水島治平 長谷川勇　柴崎起三雄	2軒

これらの調査を概観すると、いろいろな意味で、大きく４期に大別することができよう。

１期　昭和３０年から３９年にかけて、二本松遺跡を中心に行なわれた学術調査は９回におよび、本庄市教育委員会が６回、早稲田大学によって３回実施され、当時、古墳の調査が主流であったなかで県内各地から研究者が参加して、土師器、カマド等について活発な議論がくりかえされていた。

２期　昭和４０年代に入ると当地方にも開発の波がおし寄せ、記録保存のための調査が始められるのである。國學院大學で考古学を専攻し、本庄高校に赴任した菅谷浩之氏は、これら開発に伴う破壊に立ち向い、多くの記録保存のため緊急調査を実施し、当地域に埋蔵文化財の重要性を浸透させたのである。

３期　昭和４０年代も終りに近づくと、開発は大型化し、次第に埼玉県教育委員会の直営による調査が増加し、上越新幹線、関越自動車道の計画とともに、当地域に北上してくるのである。

４期　これら大型開発が誘発して更に開発が計画されるという相乗的開発が続出し、各市町村教育委員会による記録保存のための調査が増加してくるのである。これは昭和５０年の文化財保護法の改正以後、各市町村の行政的欲求によって、競って調査員を採用し、一方では開発の先兵との批判を受けながらも、驚異的な面積の調査が悪条件のもとに、行政発掘を実施するのである。

本庄市でも区画整理、圃場整備、道路改良などの公共事業、民間開発などに伴う記録保存のための調査が急激に増加してくるのである。

このような、いろいろな体制下で実施された調査によって得られた資料の集積は著しいものがあり当地方をフィールドとした研究も多くなってきているが、各市町村教育委員会で調査主体として実施した調査の整理は、やっと緒につき、報告書の刊行が始まりつつある現状で、地域に根ざした報告書の刊行に期待がもたれている。

ここで本報告書の対象である西富田地区の発掘調査の成果及びその概要について触れてみたい。

先述のとおり昭和３０年代の二本松を中心とした９回の調査と、水島、柴崎氏らによる遺構の確認は、カマドの発生を裏付けるものとして重要な意義をもっている。木村金作氏によって発見された土師器は、柳田孝司氏によって発掘調査が推進され、小沢国平、三友国五郎、大護八郎氏が担当者となって二本松一号住居址が調査された。この報告書は（文献１）「カマドの崩れたものと思われる。煙道は注意したがそれらしいものは見当らぬ。或は煙道のないカマドかとも思はれる。」と述べ、時期について「壺については何れも口縁は立ち気味で、胴部もその最径が中央でなく」「縦長となっている。」「坏は口縁が立っていることが著しい。」と述べている。

当時これらの土器群は鬼高式ではないかとの見解が多く、これは当時カマドの存在＝鬼高式と意識したものであると考えられるが、３４年の段階では（文献２）「主として和泉式で、これに鬼高式を交えたものである」と報告している。そして斎藤忠氏をして「埼玉県本庄市二本松遺跡．埼玉県秩父市上宮地遺跡等が注意される。」と言わしめたのである。

次いで翌３１年３月の二号住居址発掘調査では溝状地域に破壊され残存は½以下であったが、出土した土器は「古式を示すと云えよう」として「和泉式であろうことを知ることが出来た。」と結んだ。（文献４、５）

翌３２年４月に、第３号住居址が小沢国平氏によって調査され「溝のために斜に削られているが、ほゞ原型が推定し得られる」カマドが検出され「カマドは壁穴を掘ってから後に築いたものではないだろうか。」と報告された。形状は「カマドとして完全なものではなく粗雑な構築で煙道を作るに至っていない。即ち、炉からカマドへの過渡を示すという。本遺跡のカマドも煙道をもたず然かも壁から切り放して築いたことは、中期のカマドへの移行期の一つの方法かとも考えられないだろうか。」と考察している。（文献６）

そして３３年４月に実施された四号住居址発掘調査でもカマドが検出され、鬼高式に近いとはしながらも「和泉期に極めて近いものとするべきであろう」（文献８）「古式に属するものが多い」（文献９）と報告している。同年８月には小沢国平氏により薬師遺跡が調査され、重複した４軒が検出されたが、これは鬼高期以降の住居址であった。（文献１０）

その間、早稲田大学の滝口宏氏を調査主体とし、玉口時雄、小林茂両氏が担当者となって昭和３２年１２月に発掘調査が実施された。これは土師器の地域的研究の一環として実施した秩父地域の研究をさらに発展させるためとのことであるが小沢氏らによる二本松遺跡の重要性に着目したもので、その後３５年３月から早稲田大学考古学研究室を主体として二次調査が行なわれ、３７年にその中間報告の形で報告がなされた。（文献１１）

これによると４軒の住居址が調査され、１軒から炉、２軒から不明瞭ながらカマド、１軒はカマドが検出され、これらの土器を検討した玉口氏は「本遺跡の占める時期は出土した土師器はすべて古式土師器に属し、南関東における土師器の編年より広義の和泉式―前期―に属するものである。近年和泉式はⅠ、Ⅱの二式に分けられており、出土土器のもつ特徴から和泉Ⅰ式に属するものと思われる」とし更に「和泉Ⅰ式にカマドが見られたことはカマド出現の時期への新しい問題を提示し」としている。これを普遍性をもつものか、地域的特殊性かについては今後の問題として結んでいる。

発表後の３８年８月にも調査を実施した玉口氏らは、その後当地域に係る報告をいくつか発表したのみで（文献１３、１４、１５）本報告がなされないまま現在に至っている。

現在これらの報告内容を、現時点にあてはめることは非常に危険であると思われるのであるが、小沢国平氏、早稲田大学関係者による調査の原動力となっていた水島治平、柴崎起三雄氏は、工事等による遺構確認例などをも盛り込んだ『本庄市史、資料編』考古資料を編んで市域の土師器集成を行い補正した。これは、あくまでも地域に根ざして、長年、住居址とカマドと土師器について追求した結果なし得たものであると考えられる。

このように昭和３０年代頭初から登場した西富田地区の遺跡群は、後半から開発の波にもまれる結果となり、菅谷浩之氏による西富田新田遺跡発掘調査が行なわれたにすぎない。（文献１９、２０、２１）菅谷氏によるこの調査はその対象が約２５００㎡という、今までにない規模の開発に伴うもので１４軒の住居址と多くの土師器を検出し、一挙に資料の増加をみ、その後の和泉期の土器について多くの示唆を与えると考えられるのであるが、この本報告は未刊である。

そして西富田地区に於いては学術的注目を集め、県選定重要遺跡として指定されたにもかかわらず小規模開発（個人住宅等）が進行し、１期、２期以降の乱開発に手をほどこすまでもなく現在に至っている。

埼玉県域に埋蔵文化財の重要性を問い、その浸透に意を注いだ柳田敏司氏、当地域へその意を浸透させた菅谷浩之氏、児玉郡市域に市町村教育委員会主体による発掘調査を導入した早川智明氏、更には当地域にあって、土師器とカマドに異常なほどの追求心をもっていた水島治平、柴崎起三雄氏らの御労苦を思うとき、行政内にあって調査にたずさわる者として、発掘調査そのものを顧みることも、必要にして最低限の義務であると考え、市域を中心に概観したものである。　（長谷川）

（※発掘調査一覧、文献目録は大東が作成した）

本庄市域　発掘調査関係文献目録

文献　1　小沢国平『本庄市二本松住居址発掘調査報告書』　昭３０　本庄市教育委員会

2　小沢国平「埼玉県本庄市二本松遺跡」『日本考古学年報８』　昭３４　誠文堂新光社

3　柳田孝司「土師の住居跡―本庄市二本松第一号住居跡について―」『埼玉研究２』　昭３３　埼玉三学会

4　小沢国平『本庄市二本松第二号住居跡発掘調査報告書』　昭３２　本庄市教育委員会

5　小沢国平「本庄市二本松第２号住居跡」『日本考古学年報９』　昭３６　誠文堂新光社

6　小沢国平『本庄市二本松第三号住居跡発掘調査報告』　昭３２　本庄市教育委員会

7　小沢国平「埼玉県本庄市二本松第３号住居跡」『日本考古学年報１０』　昭３８　誠文堂新光社

8　小沢国平『本庄市二本松第四号住居跡発掘調査報告』　昭３３　本庄市教育委員会

9　小沢国平「埼玉県本庄市弥藤次住居址」『日本考古学年報１１』　昭３７　誠文堂新光社

１０　小沢国平『本庄市西富田薬師遺跡発掘調査報告書』　昭３３　本庄市教育委員会

１１　玉口時雄「埼玉県本庄市西富田遺跡調査報告」『史観６５、６、７合冊』　昭３７　早稲田大学史学会

１２　柳田敏司「本庄市公卿塚と石製模造品」『埼玉考古復刊１』　昭３８　埼玉考古学会

１３　玉口時雄「埼玉県本庄市西富田遺跡」『日本考古学年報１３』　昭４０　誠文堂新光社

１４　玉口時雄「土器に描かれた線描絵画」『古代　４７』　昭４１　早稲田大学考古学会

１５　玉口時雄「埼玉県本庄市西富田出土の土師器」『台地研究１７』　昭４３　台地研究会

１６　菅谷浩之『本庄市塚合古墳調査報告書』　昭４４　本庄市教育委員会

１７　菅谷浩之「壺形土器を出土した公卿塚について」『埼玉研究１９』　昭４５　埼玉三学会

１８　玉口時雄「西富田遺跡出土の土器」『土師式土器集成　本編１』　昭４６　東京堂出版

１９　菅谷浩之「本庄市西富田新田遺跡調査概要」『第５回　遺跡発掘調査報告会　発表要旨』　昭４７　埼玉考古学会他

２０　菅谷浩之『西富田新田遺跡発掘調査概報』　昭４７　本庄市教育委員会

２１　菅谷浩之「西富田新田遺跡」『日本考古学年報２４』　昭４８　日本考古学協会

２２　小川良祐「本庄市下田遺跡」『第８回遺跡発掘調査報告会　発表要旨』　昭５０　埼玉考古学会他

２３　並木隆「本庄市下野堂古墳群の調査」『第９回遺跡発掘調査報告会　発表要旨』　昭５１　埼玉考古学会他

２４　本庄市史編集室『本庄市史　資料編』　昭５１　本庄市

２５　柿沼幹夫他『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ　東谷・前山２号墳・古川端』　昭５３　埼玉県教育委員会

２６　宮崎朝雄　『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　中堀・耕安地・久城前』　昭５３　埼玉県教育委員会

２７　長谷川勇『御手長山古墳発掘調査報告書』　昭５３　本庄市教育委員会

２８　長谷川勇他『女堀遺跡群発掘調査概報』　昭５４　本庄市教育委員会

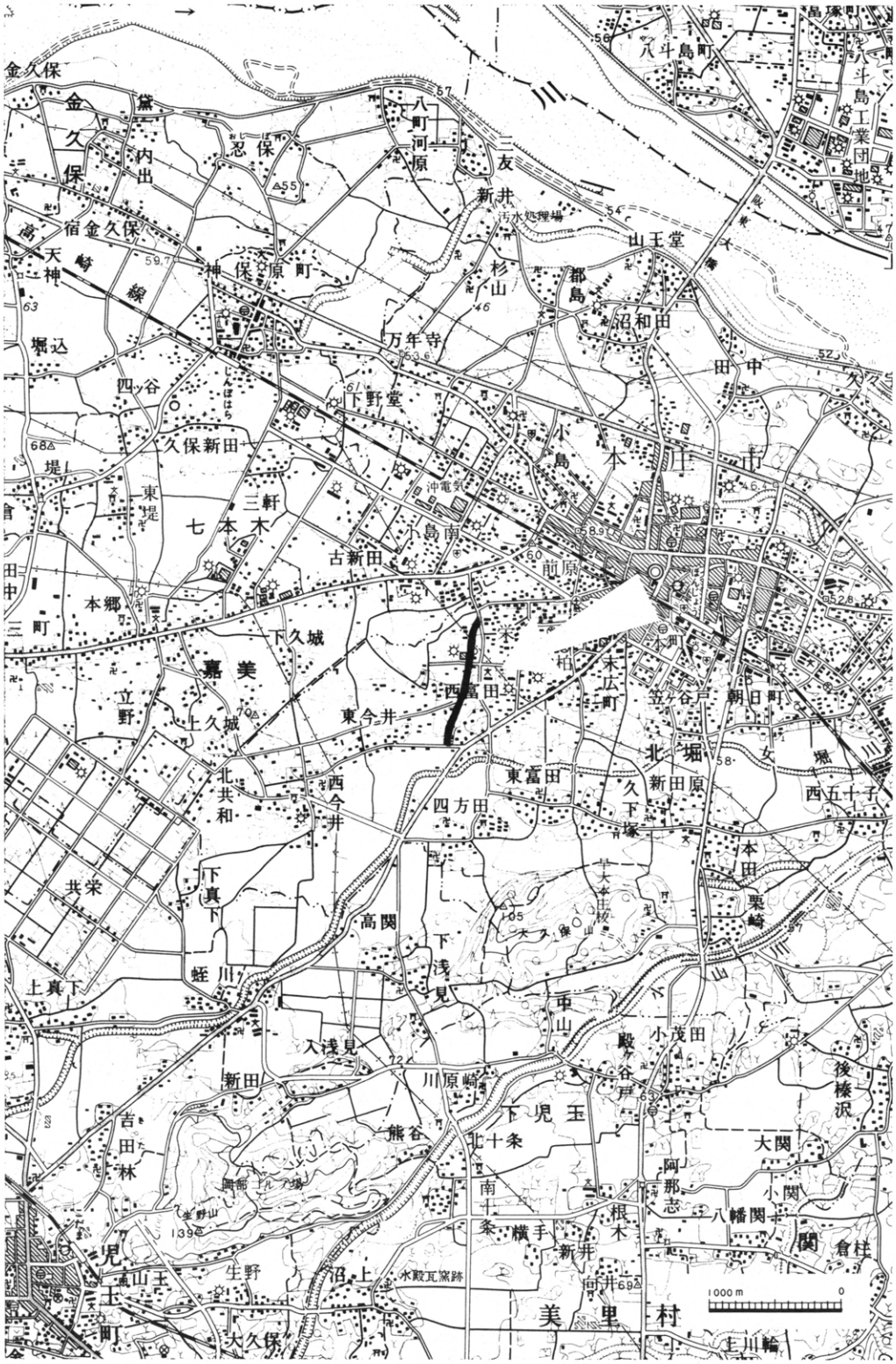
２９　小久保徹他『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ　下田・諏訪』　昭５４　埼玉県教育委員会

３０　菊地徹夫他『大久保山Ⅰ』　昭５５　早稲田大学出版部

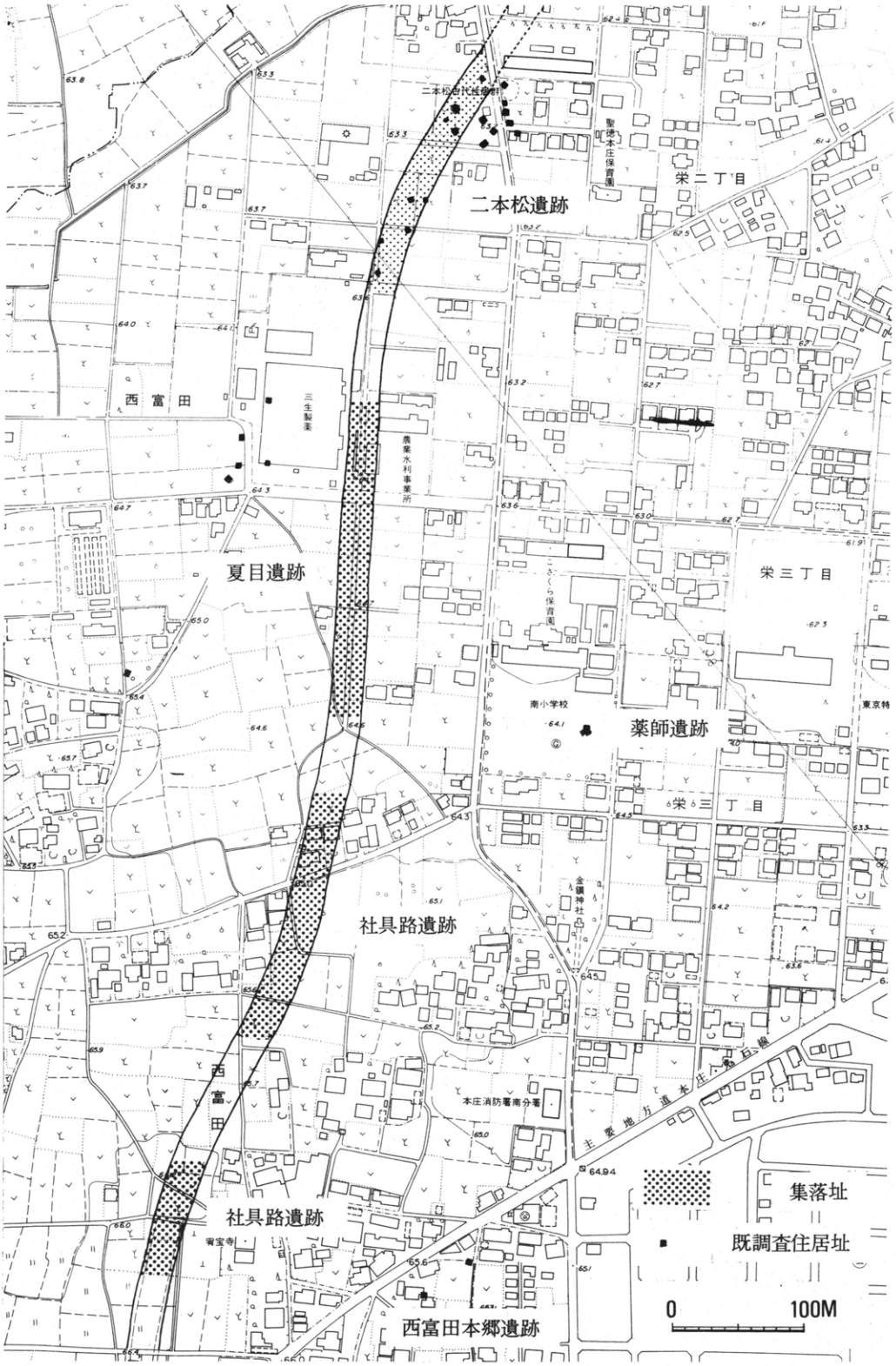
３１　守茂和他『宥勝寺北裏遺跡』　昭５５　宥勝寺北裏遺跡調査会

３２　長谷川勇「本庄市西富田遺跡群の調査」『第１５回遺跡発掘調査報告会　発表要旨』　昭５７　埼玉考古学会他

（主として市域の調査報告書、資料紹介等を掲げ、論文中にその一部を触れたものも少なくないが、今回は除外した）


金久保
金久保
黛
内出
忍保
八町河原
三友
新井
八斗島町
八斗島工業団地
宿金久保
天神
高崎線
神保原町
杉山
都島
山王堂
沼和田
万年寺
堀込
四ッ谷
下野堂
田中
久保新田
小島
本庄市
東堤
三軒
七本木
小島南
古新田
前原
本郷
下久城
嘉美
立野
上久城
東今井
西富田
末広町
笠ヶ谷戸
朝日町
北堀
東富田
西今井
北共和
四方田
新田原
久下塚
西五十子
本田
共栄
下真下
高関
栗崎
蛭川
上真下
下浅見
亀山
小茂田
入浅見
新田
川原崎
殿ヶ谷戸
後榛沢
下児玉
吉田林
熊谷
北十条
大関
阿那志
小関
南十条
横手
八幡関
根木新井
倉柱
関
生野山
生野
沼上
水殿瓦窯跡
向井
児玉町
大久保
美里村
上川輪
1000m
0

第１図　　遺跡の位置図１


二本松遺跡
栄二丁目
西富田
三生製薬
農業水利事業所
夏目遺跡
栄三丁目
南小学校
薬師遺跡
栄三丁目
社具路遺跡
西富田
本庄消防署南分署
主要地方道本庄上尾線
集落址
既調査住居址
社具路遺跡
0
100M
西富田本郷遺跡

第２図　　遺跡の位置図２

二本松遺跡

第 3図　　二本松遺跡全測図

Ⅲ　二本松遺跡

1　遺跡の概要

二本松遺跡は昭和２９年１２月下旬、当地居住の木村金作氏が採土のため自己所有の畑を掘りかえし多数の土師器破片を発見したことに端を発して世に知られることとなった。この発見は木村氏の子息洪一氏から当時通学していた本庄市立北泉中学校長柳田孝司氏にもたらされ、翌３０年３月１２日から１５日にわたって調査主体者　柳田孝司、調査担当者　三友国五郎、小沢国平、大護八郎の諸氏によって調査が実施され、その後小沢国平氏により３回の調査が実施されている。

この他に二本松遺跡調査の原動力になるとともに当地域の土師器について異常なほどの熱意をもっていた水島治平、柴崎起三雄氏によって３軒の住居址と１ケ所の出土地が確認され、二本松遺跡及び周辺地域の地形的観察と詳細な分布調査など、細かな分析がなされた。（『本庄市史・資料編』）

今回の調査も、これらの成果を生かして耕土除去、遺構の検出方法等細部に至るまで留意し、９軒の住居址と土壙３９、溝２、井戸１、遺物出土地１ケ所が検出された。既調査は７軒の住居址と１ケ所の遺物出土地で今調査の東に当っている。幅２０ｍ、長さ約１７０ｍのトレンチ状の調査区であるため遺跡の全体をうかがうことはできないが、埋没した河川跡や長期間の降雨時に流下する溝状凹地が東北方向へ流下するという本庄台地特有の様相が確認され、それらと集落とのかかわりについて、示唆を得ることができた。

住居址は切り合い関係もなく散在した状態で検出され、ほぼ和泉期にかぎられた集落である。これまで調査された住居址はローム台地上にあったが、今回の調査で全測図に示したように基盤、覆土とも粘質をもった部分と、ローム台地上に存在するものとがある。また１３号住居址、１４号住居址の北に存在する溝状凹地も粘質の強い黒色土に覆われて、調査前の現状観察でも、これらを推定するに至る程の変化は見られなかったものであるが、集落の営まれていた当時は谷津状であり、住居址の所在した部分は微高地であったと推察される。住居址の壁高は非常に浅く集落廃絶後の風蝕作用によって平坦となったものと考えられる。

耕土除去の段階から注意したにもかかわらず壁高が少なかったことから壁外周を詳細に観察しても遺構等は全く認められなかった。

土壙３９のうち溝状凹地付近以南は、その覆土に天明３年、浅間山降下の火山灰を含んでいるものが多いいことから近世以降の遺構と考えられ、北方の土壙は現代のイモ穴であると考えられる。

溝状遺構については時期が不明であるが、井戸は旧地主や、地域住民の証言により昭和２０年のものである。これは仙台市及びその周辺出身者を中心として組織された「青葉隊」が本庄周辺に駐屯し、その訓練用地を遺跡周辺に求め、飲料用に掘ったとのことであり、事実覆土上位より防弾ガラス破片も検出されている。なお今回調査で二本松遺跡としたのは約３０００㎡で一部未掘部分を残している。溝状凹地の北の未掘部分は砂利採集のために既に掘り下げられた部分であるが、当時住居等遺構はなかった。（長谷川）

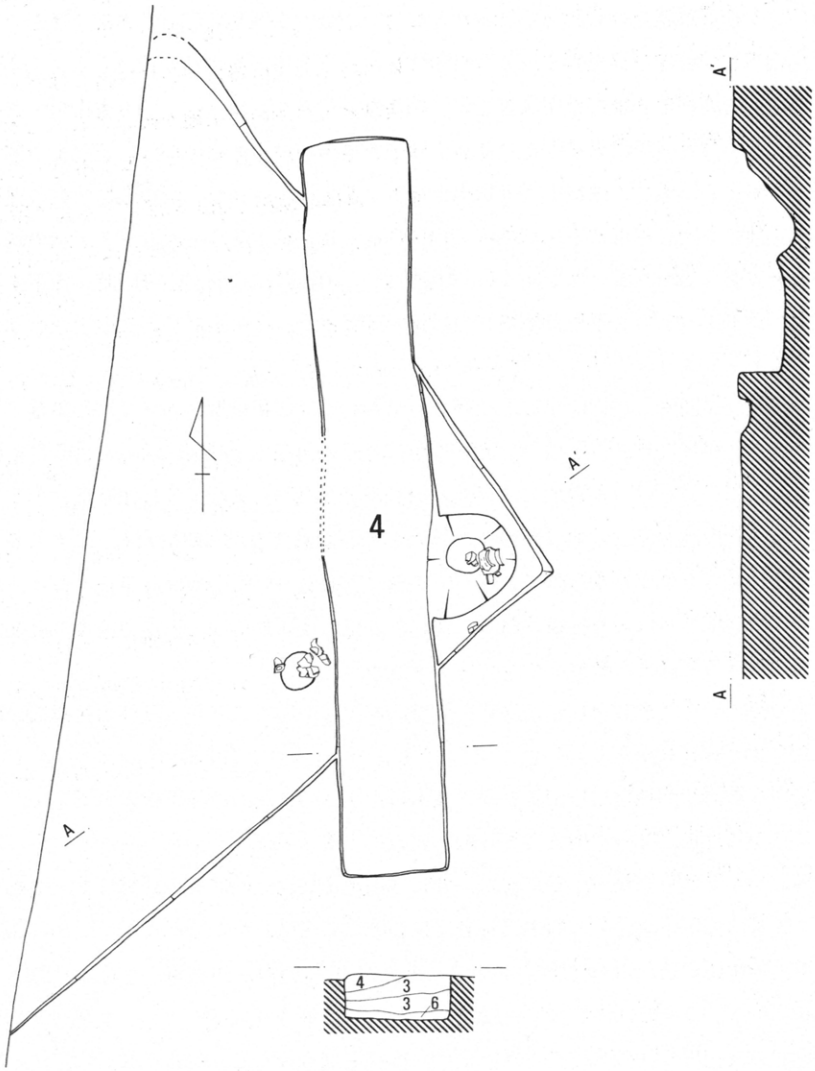
2　遺構と遺物

１０号住居址

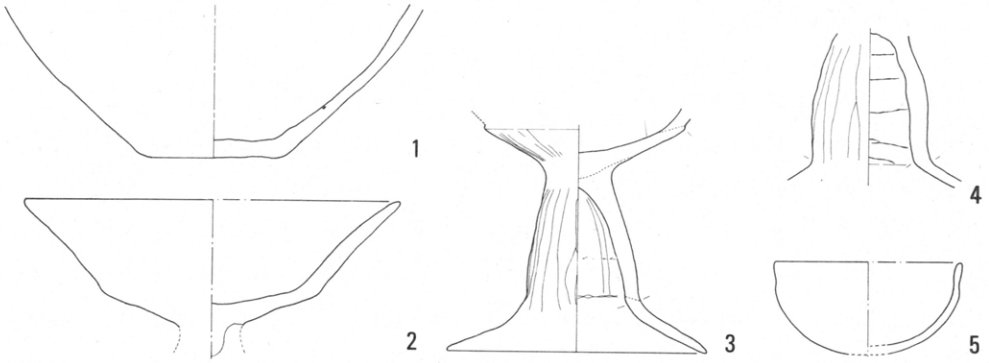
遺　構（第４図）

西側半分が道路下にあり全体の規模、形態は不明であるが、北に僅かながら壁コーナーが確認されたため長方形を呈すると考えられる。耕土層、暗褐色土層、その下のローム層ともに粘質が強く遺構の検出は非常に困難であった。壁高は５～１０㎝前後で残存状況は悪く、覆土、床面とも非常に硬くしまって床面を判断するのに苦慮した。

柱穴は確認されず、東南壁から５０㎝離れピットが認められたが床面からの掘り込みが８㎝と非常



第４図　　二本松遺跡１０号住居址、４号土坑



第５図　　二本松遺跡１０号住居址出土遺物

に浅く、位置からも柱穴として機能していたとは考え難い。貯蔵穴は東コーナーに位置し径８０cm、深さ４０cm、底面は平坦でなく、壁はゆるやかに立ちあがる。カマドは不明、壁溝は存在しない。

遺物は貯蔵穴内とピット上に認められたのみで、それ以外には見られなかった。貯蔵穴から甕、高坏脚部、ピット上からは甕、高坏脚部が検出された。

当住居の埋没状況は確認面からの残りが悪く不明である。また東側を0.8×5.8ｍの長方形の第４土壙が切っている。　（石橋）

出土遺物（第５図）

器種	番号	法量（cm）	特　　徴
甕	1		胎・微石多　0.2～0.4褐鉄粒多　成・胴部粘土帯積上げ　整・外面　ヘラケズリ　内面　ヘラケズリ後ナデ　焼・普　外面　黒斑有　色・外　橙褐色　内　灰褐色　使・内面底部剝離　出・ピット上　残・胴部下半
高坏	2		胎・微石　成・脚部と坏底部は臍状粘土で接合　坏底部と坏縁部接合　整・風化摩滅不明瞭　焼・普　色・外　橙褐色　内　赤褐色　使・内外面一部剝離　残・坏縁部¼　坏底部一部
高坏	3		胎・白色粒子　成・裾部と脚部接合（内面接合痕明瞭）　脚部と坏縁部接合　整・外面　裾部ヨコナデ　脚部ヘラケズリ　一部ヘラミガキ　坏底部ハケ調整後ナデ　坏縁部ヨコナデ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ヘラケズリ後ナデ　焼・普　外面一部黒斑有　色・橙褐色　出・貯蔵穴内　残・裾部⅘　脚部　坏底部½
高坏	4		胎・白色及黒色粒子多　0.2～0.3褐鉄粒　成・裾部と脚部接合（内面接合痕明瞭）　脚部粘土紐巻上げ　整・外面　裾部ヨコナデ　脚部ヘラケズリ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ナデ　焼・普　色・橙褐色　備・粗
埦	5		胎・白色粒子　成・不明　整・風化摩滅不明瞭　焼・普　色・外　橙褐色　内　黄褐色　残・¼　（大束）

１１号住居址

遺　構（第６図）

西側半分が道路下にあり調査ができなかったが工事施工に伴い立会い調査を実施し３．５×４ｍのほぼ正方形に近い形態を持つことが判明した。壁のコーナーはゆるやかにカーブし、壁高は２２～２５㎝、壁溝が全周すると考えられる。床面は中央部に三和土がみられ、他はローム面を床とし平坦であるが多少軟弱であった。柱穴は東南隅の不整形ピットのなかに１ケ所認められたのみで深さ３０㎝である。貯蔵穴は、立会調査のおりに南西コーナーに検出されたが規模、形態等記録に至らなかった。

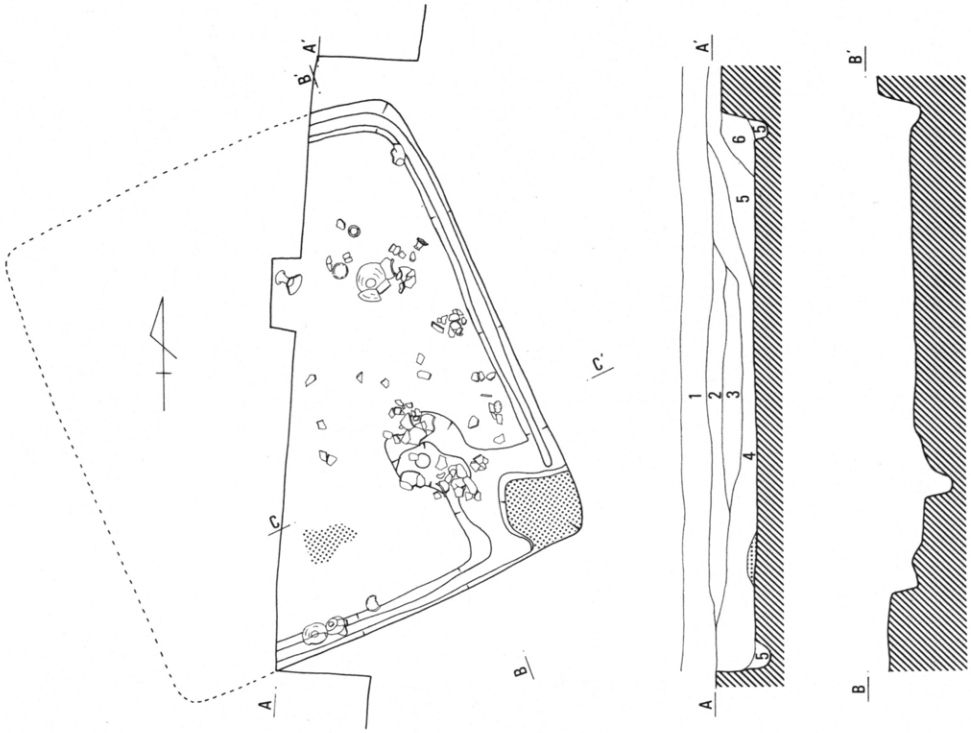
カマド、または炉と考えられる設備は認められず、東南隅の不整形ピットの東、壁コーナーに接して焼土が認められたが床面から浮いた状態にあり遺構とはならなかった。

遺物は比較的多く、住居址全面に検出されたが床面直上のものは少なく、大半が覆土中であるとはいえ床に接する下位にあった。（坩一個体　調査中に盗難）

埋没状況は、土層断面がレンズ状に近い堆積を示していることから廃棄後、自然的に埋没したものと考えられる。なおこの遺構は南と東北に接した１０号、１２号住居址と異なり基盤であるローム層、あるいは覆土に粘質はない。（石橋）

出土遺物（第７．８．９図）

器種	番号	法量（㎝）	特　　徴
甕	1	口径　16.3 器高　29.0	胎・白色微石多　0.2～0.4褐鉄粒　成・胴部粘土帯積上げ？　胴部上半と下半接合？　胴部と口縁部接合　整・外面　底部ヘラケズリ　下半風化剝離不明瞭　内面胴部風化剝離不明瞭　口縁部ヨコナデ　焼・普　外面黒斑有　色・外　橙褐色　内　黄褐色　使・内外面剝離著しい　外面炭化物付着　残・ほぼ完形
甕	2	口径（18.9）	胎・黒色粒子多　0.1～0.2褐鉄粒少　成・胴部と口縁部接合（内面接合痕明瞭）　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・黄褐色　使・外面スス付着　残・口縁部¼
甕	3	口径（18.6）	胎・微石　成・胴部と口縁部接合　整・外面胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部←ヨコナデ　内面胴部←ヘラケズリ後ナデ　口縁部→ヨコナデ　焼・良　外面黒斑有　色・黄褐色　残・口縁部½
甕	4		胎・黒色粒子多　成・胴部と口縁部接合　口縁部一部接合痕明瞭　整・外面胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部←ヨコナデ　内面胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部→ヨコナデ　焼・良　色・橙褐色　使・外面　口縁部スス付着　残・口縁部⅓
甕	5	口径　17.2 器高　33.7	胎・微石　黒色粒子　多　0.1～0.2褐鉄粒少　成・底部上り底　胴部粘土帯積上げ　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部下半↓ヘラケズリ後ナデ

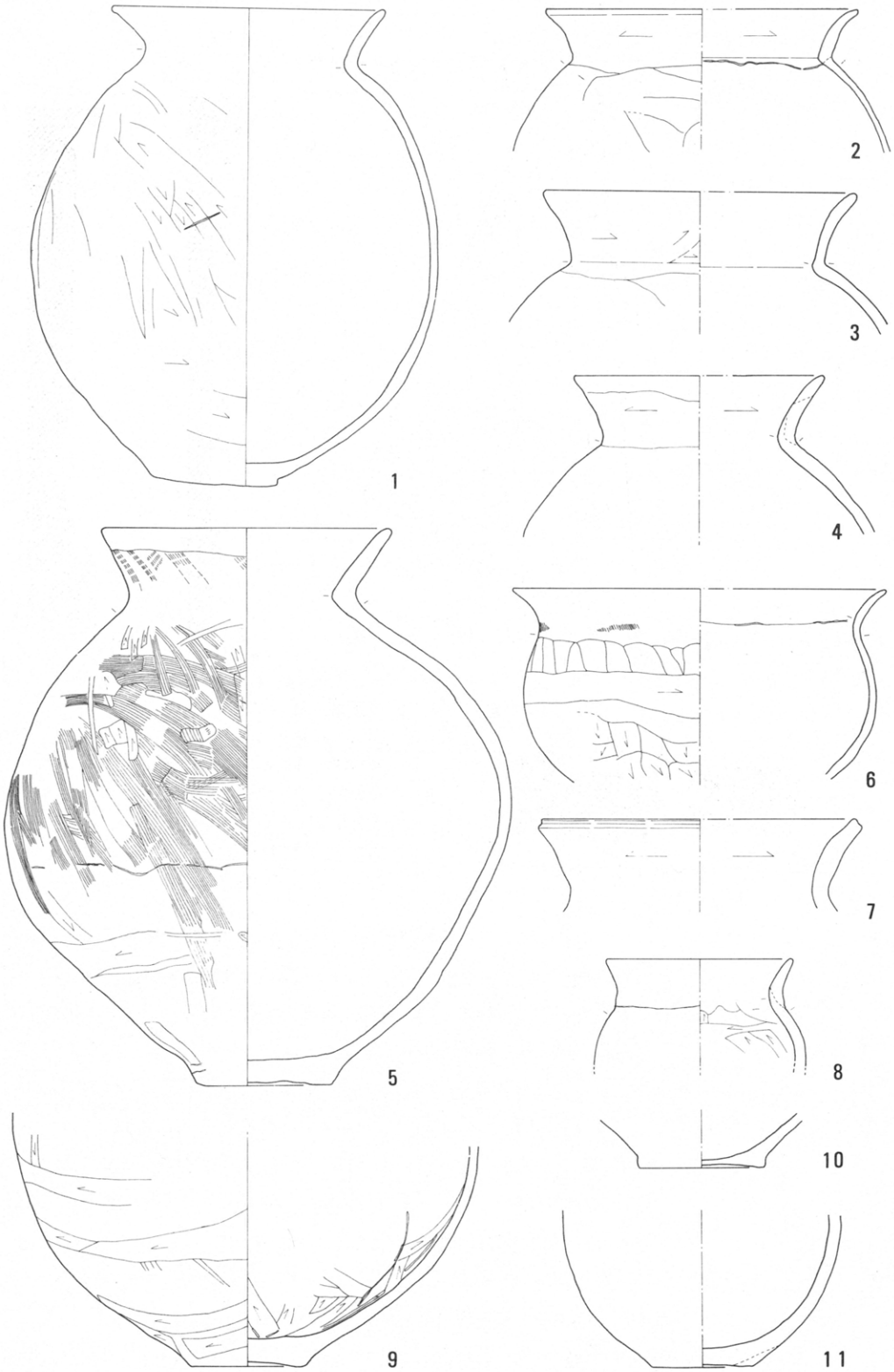


第６図　　二本松遺跡１１号住居址

１１号住居址土層　　L＝62.9M

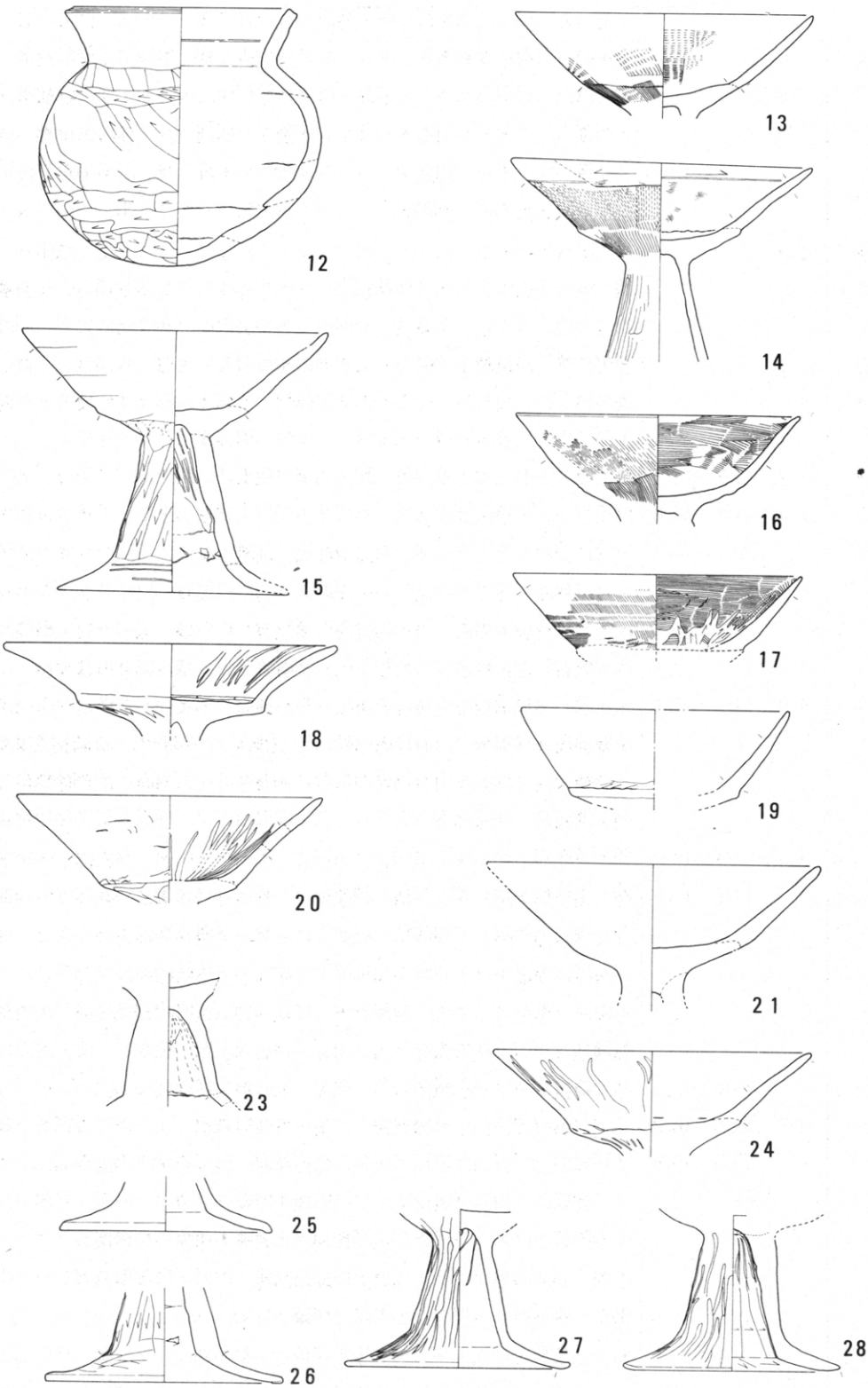
1　表土　火山灰を含む
2　灰褐色土　黒色土とローム粒子を含む
3　黒褐色土　ローム粒子を含む
4　褐色土　ロームブロックを含む
5　褐色土　ローム粒子を含む
6　褐色土　ローム粒子を含み、４層より黒色強い

			及ヘラミガキ　上半ハケ調整後↘ヘラミガキ　口縁部ハケ調整後ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ（下半　底部風化剝離不明瞭）　焼・良　外面黒斑　色・橙褐色　使・外面　胴部下半スス付着　内面　炭化物付着　剝離著しい　残・ほぼ完形
甕	6		胎・微石　白色微石多　0.1～0.2褐鉄粒　成・胴部と口縁部接合（内面　接合痕明瞭）　整・外面　胴部下半ヘラケズリ　上半↕ヘラケズリ後ナデ　胴部から口縁部一部ハケ目残る　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　胴部から口縁部ヘラケズリ？　口縁部ハケ調整後ヨコナデ　焼・良　外面黒斑有　色・橙褐色　残・⅓
甕	7		胎・黒色粒子多　0.1褐鉄粒少　成・二段に積むか？　整・内外面←ヨコナデ　焼・良　色・橙褐色　残・口縁部¼
甕	8	口径（11.4）	胎・微石少　成・胴部と口縁部接合　外面　接合痕明瞭　整・外面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　ヘラオサエ有

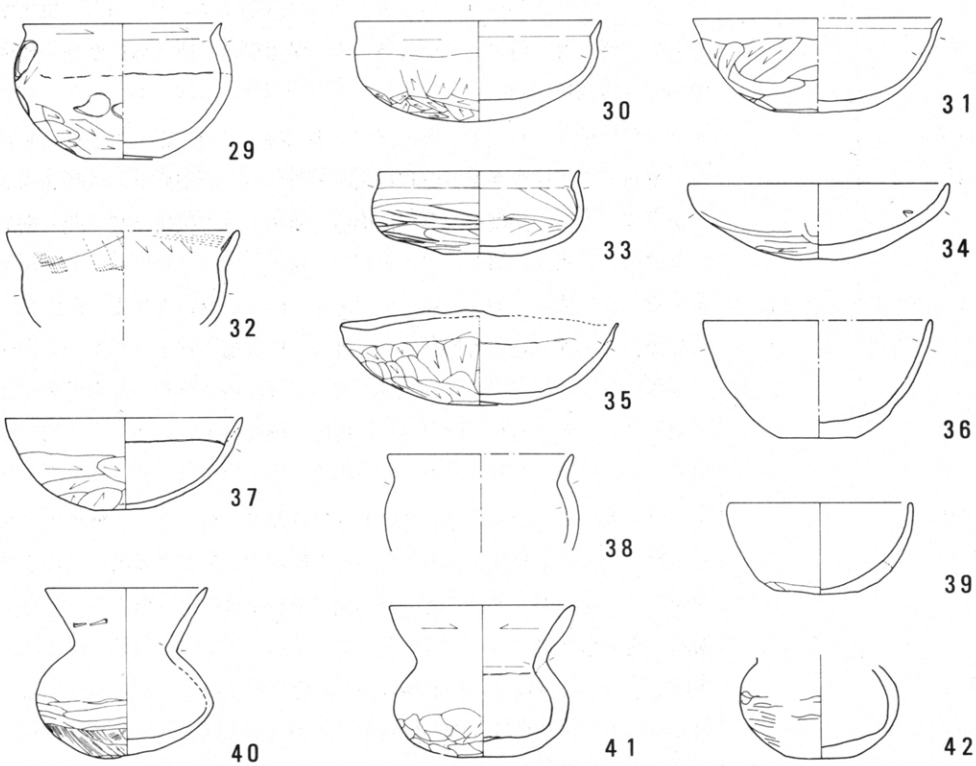


第７図　　二本松遺跡１１号住居址出土遺物（１）

			焼・普　色・暗赤褐色　使・外面スス付着　残・口縁部　胴部一部
甕	9		胎・微石　白色微石多　0.3～0.5砂粒極少　0.1～0.4褐鉄粒多　成・底部はヘラケズリのため不詳　整・外面　底部ヘラケズリ　胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面　ヘラケズリ後ナデ　焼・良　外面黒斑有　色・橙褐色　使・内面　剥離著しい　一部炭化物付着か？　出・床直　残・胴部下半　底部
甕	10		胎・微石多　0.1～0.2褐鉄粒少　成・底部↓ヘラケズリ出しで作る　整・外面　底部ヘラケズリ　胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ　内面　剥離不明瞭　焼・良　色・黄褐色　使・内面剥離著しい　残・底部½
甕	11		胎・微石　白色粒子　0.1～0.2褐鉄粒少　成・底部上り底風？　胴部粘土帯積上げ　整・外面　底部摩滅不明瞭　胴部↕ヘラケズリ後ナデ　内面ナデ　焼・悪　色・黄褐色　残・底部　胴部各一部
甕	12	口径　12.8 器高　15.5	胎・微石　黒色粒子多　成・胴部粘土帯積上げ　上半と下半接合　胴部と口縁部接合　整・外胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ　上半↕ヘラケズリ後ナデ　口縁部ミズビキか？　内面胴部風化剥離不明瞭　口縁部ヨコナデ　焼・良　外面胴部黒斑　色・外　赤褐色　内　橙褐色　使・外面　胴部及口縁部スス付着　内面　炭化物付着　剥離著しい　残・完形　備・精
高坏	13	口径　17.8	胎・微石　白色粒子少　0.1～0.5小石極少　0.1～0.2褐鉄粒多　成・坏底部と坏縁部接合（接合痕明瞭）整・外面　坏底部ハケ調整　坏縁部ハケ調整後ヨコナデ　内面坏底部指頭圧痕後ナデ　坏縁部ハケ調整後ヨコナデ　焼・良　外面及内面黒斑有　色・赤褐色　使・外面一部炭化物付着　残・坏底部　坏縁部
高坏	14	口径　17.8	胎・黒色粒子多　成・裾部と脚部接合　脚部と坏底部　坏底部と坏縁部接合（接合痕明瞭）　脚部粘土紐巻上げ　整・外面　脚部ヘラミガキ　坏底部及坏縁部下半ハケ調整　坏縁部上半ヨコナデ後坏縁部先端のみヨコナデ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ナデ　坏底部剥離不明瞭　坏縁部下半ハケ調整後ヨコナデ再び先端のみヨコナデ　焼・普　色・橙褐色　使・内面坏底部剥離著しい　残・裾部一部　脚部　坏底部　坏縁部¾
高坏	15	口径　18.2 器高　15.6	胎・白色粒子多　黒色微石多　0.1～0.3褐鉄粒　成・裾部と脚部　脚部と坏底部　坏底部と坏縁部接合　整・外面　裾部ヨコナデ　脚部ヘラケズリ　坏底部　指頭圧痕後ナデ　坏縁部4回のヨコナデ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ヘラケズリ後ナデ　坏底部風化剥離不明瞭　坏縁部ヨコナデ　焼・普　二次的熱受ける？　色・橙褐色　使・内面坏底部摩滅著しい　出・床直　残・裾部　脚部　坏底部　坏縁部½
高坏	16	口径　17.0	胎・白色粒子　成・坏底部と坏縁部接合　整・外面　坏底部　坏縁部下半ハケ調整　坏縁部上半ハケ調整後ヨコナデ　内面　坏底部ナデ　坏縁部ハ



第８図　二本松遺跡１１号住居址出土遺物（２）



第９図　　二本松遺跡１１号住居址出土遺物（３）

			ケ調整　口唇部ヨコナデ　焼・普　色・外　赤褐色及灰褐色　内　橙褐色　残・坏底部　坏縁部
高坏	１７	口径　17.2	胎・微石少　成・坏底部と坏縁部接合部で分離　整・外面　坏縁部ハケ調整後ヨコナデ　内面　坏縁部ハケ調整後暗文　焼・良　色・外　赤褐色　内　橙褐色　残・坏縁部⅔　備・精
高坏	１８	口径　19.6	胎・微石多　0.1～0.2褐鉄粒少　成・坏底部と坏縁部接合　整・外面　坏底部風化剝離不明瞭　坏縁部ヨコナデ　内面　坏底部ナデ後ヘラミガキ　坏縁部ヨコナデ後暗文　焼・普　色・橙褐色　使・外面剝離著しい　内面一部剝離　残・坏底部　坏縁部
高坏	１９		胎・微石　成・坏底部と坏縁部接合か？　整・外面　坏底部ナデ　坏縁部←ヨコナデ　接合部外面ヘラオサエ　内面　坏縁部下半ナデ　上半→ヨコナデ　焼・普　色・橙褐色　残・坏底部一部　坏縁部⅓
高坏	２０	口径（18.0）	胎・微石　0.1～0.2砂粒極少　成・坏底部と坏縁部接合　坏縁部三段積上げ　整・外面　坏底部ヘラケズリ後ナデ　坏縁部下半ナデ　上半ヨコナデ　内面　坏底部　坏縁部下半ナデ後暗文　坏縁部ヨコナデ　焼・普　色・外　淡橙褐色　内　橙褐色　残・坏縁部½
高坏	２１		胎・白色粒子少　成・脚部と坏底部臍状粘土で接合　坏底部と坏縁部接合

			整・外面　坏底部ヘラケズリ後ナデ　坏縁部ヨコナデ　内面　風化摩滅不明瞭　焼・普　色・外　橙褐色　内　明橙褐色　使・風化摩滅　残・坏底部　坏縁部¼
高坏	23		胎・白色粒子多　石英多　成・裾部と脚部接合　内面脚部上部粘土充填　整・外面　脚部風化摩滅不明瞭　内面　脚部ヘラ調整後ナデ　坏底部ナデ　焼・普　外面　黒斑有　色・橙褐色　使・外面　風化摩滅　残・裾部一部　脚部　坏底部一部
高坏	24	口径（18.9）	胎・微石少　0.2～0.3砂粒極少　0.1～0.3褐鉄粒多　成・坏底部　坏縁部接合（一部接合痕明瞭）　整・外面　坏底部ヘラケズリ後ナデ　坏縁部ミスビキ？　後暗文　内面　坏底部　坏縁部下半ナデ　上半ミズビキ？　焼・良　外面黒斑有　色・外　黄褐色　内　橙褐色　残・坏底部　坏縁部
高坏	25		胎・微石多　0.2砂粒少　0.2～0.3褐鉄粒多　整・外面　裾部風化摩滅不明瞭　内面　裾部ヨコナデ　形・外面裾部調整の際はみ出した粘土が内面に折り返り稜を成す　焼・普　色・紫色を帯びた赤褐色　使・裾部端摩滅　残・裾部½
高坏	26		胎・微石少　成・裾部と脚部接合か？　脚部粘土紐巻上げ　整・外面　裾部ヨコナデ　脚部ヘラケズリ後ナデ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ナデ　形・外面　裾部調整の際はみ出した粘土が内面に折り返り稜を成す　焼・良　色・橙褐色　残・裾部⅔　脚部
高坏	28		胎・微石少　成・裾部と脚部　脚部と坏底部　坏底部と坏縁部接合　坏縁部が　坏底部との接合部分で分離する　整・外面　裾部ヨコナデ後ヘラミガキ　脚部ヘラミガキ　坏底部ヘラケズリ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ヘラケズリ　坏底部ナデ後ミガキ　焼・良　外面黒斑有　色・黄褐色　坏底部内面橙褐色　残・裾部⅔　脚部　坏底部
高坏	27		胎・微石少　成・裾部と脚部と坏底部接合か？　整・外面　裾部ヨコナデ後ヘラミガキ　脚部ナデ後ヘラミガキ　内面　裾部→ヨコナデ　脚部ヘラケズリ　焼・良　色・橙褐色　残・裾部¾　脚部
埦	29	口径（10.5） 器高（7.2）	胎・0.1～0.2白色微石　0.1～0.2褐鉄粒多　成・底部ヘラケズリで作る　胴部下半と上半接合　胴部と口縁部接合か？　整・外面　胴部下半ヘラケズリ　上半ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　底部　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・赤褐色　使・外面　スス付着　剝離　残・⅔
埦	30	口径　13.0 器高　5.4	胎・白色粒子　成・胴部と口縁部接合か？　整・外面　胴部下半ヘラケズリ　上半指頭圧痕後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部風化剝離不明瞭　胴部上半及口縁部ヨコナデ　焼・普　色・橙褐色　使・内面剝離著しい

			残・ほぼ完形
埦	31		胎・黒色粒子少　成・胴部と口縁部接合か？　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部下半ナデ　上半及口縁部ヨコナデ　焼・普　色・赤褐色　使・内面剝離　残・½
埦	32		胎・白色微石多　0.1褐鉄粒　成・胴部と口縁部接合か？　整・外面　胴部下半ナデ　口縁部ハケ調整後胴部上半及口縁部←ヨコナデ　内面　口縁部ハケ調整後胴部上半及口縁部→ヨコナデ　焼・良　色・外　橙褐色　内　赤褐色　残・⅓
埦	33	口径　10.6 器高　4.4	胎・白色微石多　0.1～0.3褐鉄粒多　成・胴部と口縁部接合か？　整・外面　胴部ヘラミガキ状調整　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ヘラ調整後ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・赤褐色　使・内面剝離著しい　残・ほぼ完形　備・精
坏	34		胎・微石　0.1～0.3褐鉄粒多　整・外面　胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　内面　底部ヘラオサエ有　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　外面黒斑有　色・外　黄褐色　内　橙褐色　残・⅔　備・口縁部内面1.2㎝切藁痕？
埦	36		胎・0.2～0.3砂粒極少　0.1～0.2褐鉄粒少　成・底部はヘラケズリ胴部下半と上半接合か？　整・外面　胴部下半ヘラケズリ　上半ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部↕ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　外面黒斑有　色・橙褐色　残・⅓
埦	37	口径　12.6 器高　4.9	胎・黒色微石多　0.1～0.3褐鉄粒　成・胴部と口縁部接合（内面接合痕明瞭）　整・外面　胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・外　橙褐色　内　黄褐色　残・⅔
坏	35	口径　14.8 短径　12.5 器高　5.0	胎・白色粒子少　成・胴部と口縁部接合（内面接合痕明瞭）　整・外面胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ハケ調整後ナデ　口縁部ヨコナデ　形・全体の器形楕円　口縁部は水平でなくゆがむ　焼・悪　表面ザラつく　色・灰褐色　使・外面　摩滅　残・胴部　口縁部⅔
埦	38		胎・0.2砂粒極少　成・胴部と口縁部接合か？　整・外面　胴部風化摩滅不明瞭　ハケ目痕有　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・橙褐色　残・口縁部⅕　胴部一部　備・粗
埦	39	口径　9.6 器高　4.8	胎・0.1～0.3砂粒極少　0.1～0.3褐鉄粒少　成・底部ヘラケズリで作る　整・外面　胴部下部ヘラケズリ　胴部及口縁部ナデ　内面　↘ナデ　口唇部ヨコナデ　焼・普　外面黒斑有　色・外　橙褐色　内　赤褐色　残・¾
坩	40	口径　8.6 器高　9.0	胎・白色粒子少　0.1～0.5褐鉄粒多　成・胴部と口縁部接合か？　整・外面　胴部下半ハケ調整後ヘラケズリ　中央ヘラケズリ　上半ナデ　ハケ

			調整痕わずかに残る　口縁部ハケ調整後ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　外面黒斑有　色・暗赤褐色　出・床直　残・完形　備・口縁部外面2.2㎝切藁痕？
坩	41	口径　9.9 器高　8.0	胎・黒色微石多　0.1褐鉄粒　成・胴部と口縁部接合（内面接合痕明瞭）　整・外面　胴部下半ヘラケズリ後ナデ　中央及上半指頭による調整後ヨコナデ　口縁部←ミズビキ？　内面　胴部風化剝離不明瞭　口縁部→ミズビキ？　焼・良　外面黒斑有　色・黄褐色　使・内面剝離　残・ほぼ完形　備・粗
坩	42		胎・微石　0.1～0.3褐鉄粒少　成・胴部と口縁部接合　口縁部が胴部との接合部分にて分離　整・外面　胴部ヘラミガキ　内面　ナデ　焼・良　外面黒斑有　色・暗赤褐色　残・胴部　（大束）

12号住居址

遺　構（第10図）

北側部分は道路下にあり、調査ができなかった。10号住居址と同じような粘質の強い堆積土に構築されているために検出はむずかしく、床面近くになってロームが確認される状況であった。

南壁は長さ5.8m、壁高は20～30㎝で若干の傾斜をもってたちあがり、壁溝は認められない。

床面はローム面を床とした平坦なもので硬い。柱穴と考えられるピットは南コーナー近くに確認され径38㎝、深さ30㎝、貯蔵穴は東コーナーに接して径70㎝、深さ55㎝の底面平坦である。

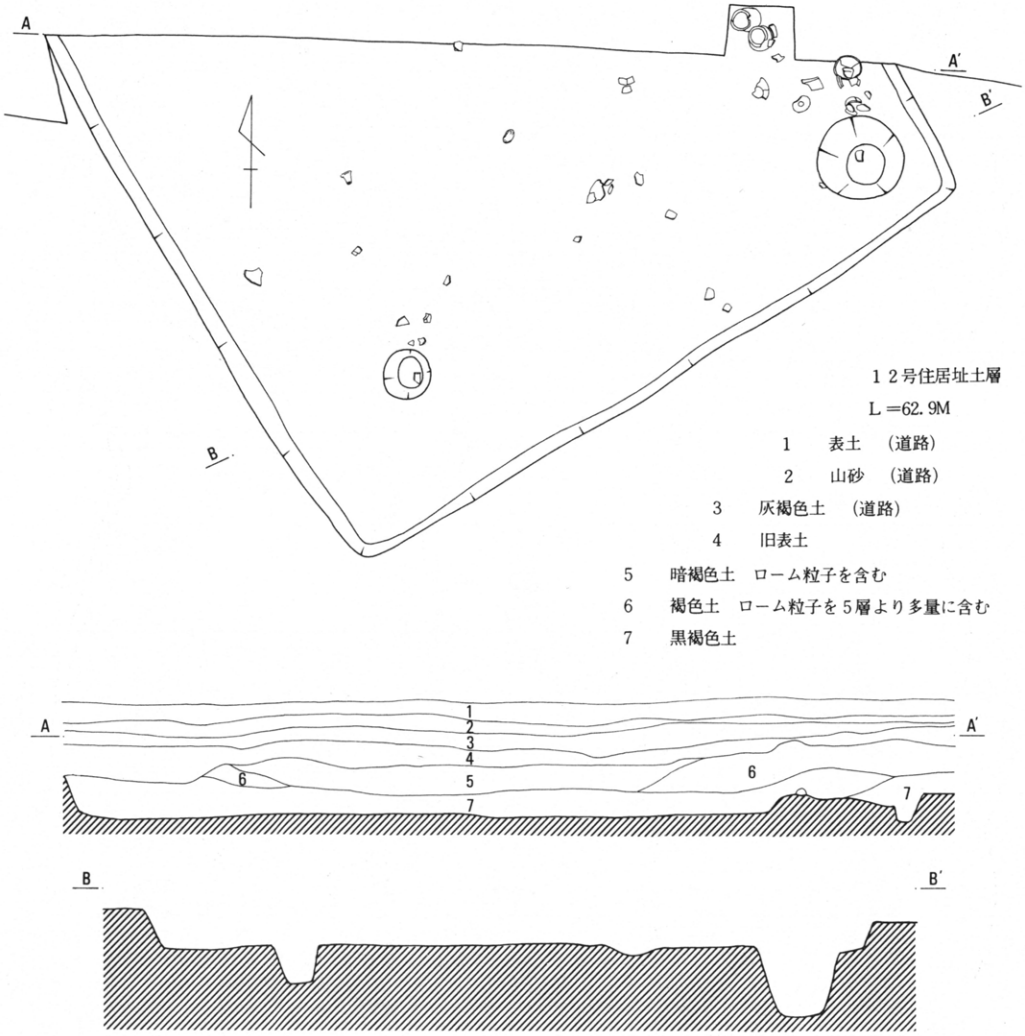
カマドは貯蔵穴の北に位置すると考えられたが道路下にあり規模、構造は不明である。実測図で甕が2個並列している部分がその中心と考えられ、その下に倒立させた高坏がそれぞれ据えられて、その下に焼土が認められた。遺物の出土状況及び焼土の存在から、この部分がカマドとみて差し支えないと考えられる。

遺物はカマドを中心として、貯蔵穴との間に甕、埦、高坏、住居中央部に坩などが検出された他は破片が散見され、床面直上の遺物は皆無であった。

埋没状況は決して自然的とは言えず短期間に埋没したように考えられる。（石橋）

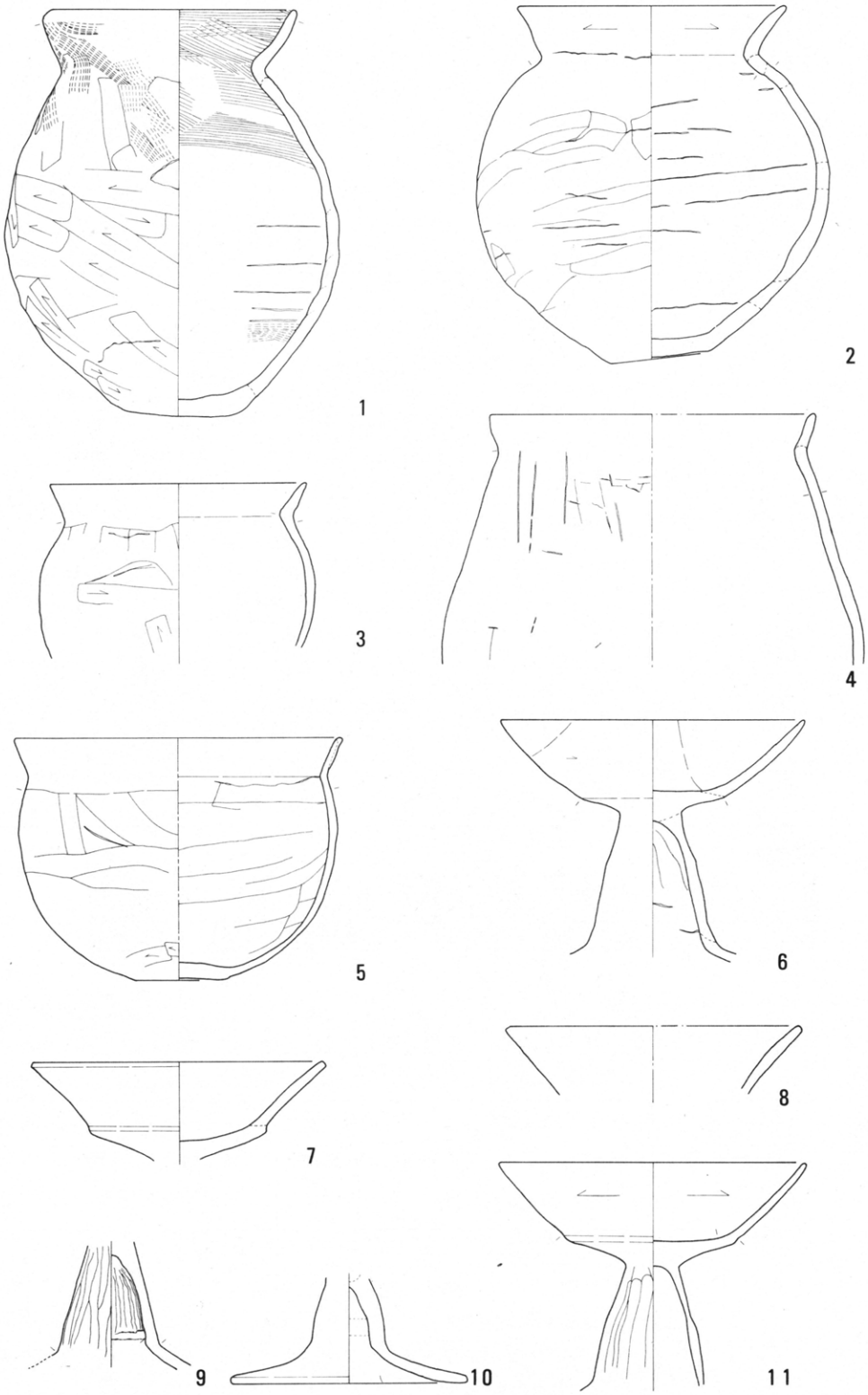
出土遺物（第11.12図）

器種	番号	法量（㎝）	特　　徴
甕	1	口径　14.3 器高　24.0	胎・白色微石　0.2～0.5小石多　0.2～0.3褐鉄粒多　成・胴部　粘土帯積上げ　底部と胴部接合　胴部下半と上半接合　胴部と口縁部接合　整・外面　底部ヘラケズリ後ナデ　胴部下半ヘラケズリ後ナデ　中央ヘラケズリ　上半ハケ調整後ナデ　口縁部ハケ調整後ナデ　口唇部ヨコナデ　内面底部ナデ　胴部下半接合部ハケ調整後ナデ　上半及び口縁部ハケ調整　焼・悪　外面黒斑有　色・赤褐色　使・内面黒ずむ　口唇部摩滅著しい　出・竈　残・ほぼ完形　備・粗
甕	2	口径　15.8	胎・微石　0.1～0.2褐鉄粒　成・胴部粘土帯積上げ（上半積上痕明瞭）

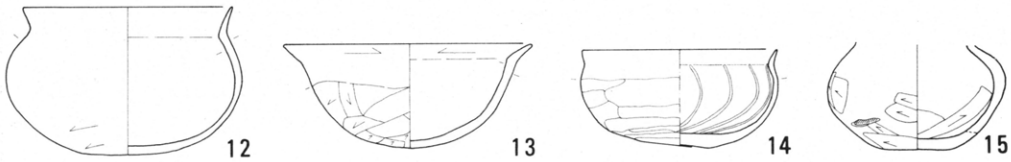


第１０図　二本松遺跡１２号住居址

甕	3	器高　20.7 口径　15.0	下半と上半接合　胴部と口縁部接合　整・外面　底部胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部←ヨコナデ　内面底部　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部→ヨコナデ　焼・普　外面黒斑有　色・赤褐色　使・外面　胴部剝離　内面　炭化物付着　残・ほぼ完形　備・粗 胎・微石　0.1～0.2褐鉄粒多　成・胴部粘土帯積上げ　胴部と口縁部接合か？　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・赤褐色　使・外面摩滅剝離（一部炭化物付着？）　出・竈　残・⅔



第１１図　　二本松遺跡１２号住居址出土遺物（１）



第１２図　二本松遺跡１２号住居址出土遺物（２）

甕	4		胎・微石　0.1～0.2褐鉄粒少　成・胴部粘土帯積上げか？　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部↘ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　外面　黒斑有　色・橙褐色　接・竈周辺　中央部南寄　西壁中央部　残・口縁部½　胴部一部
甕	5	口径　19.2 器高　14.2	胎・微石少　0.1～0.2褐鉄粒少　成・底部と胴部接合か？　口縁部外側に粘土貼付　胴部粘土帯積上げ　整・外面　胴部下半ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　外面黒斑有　色・赤褐色　使・外面一部化粧土剝離　残・⅔
高坏	6	口径　15.0	胎・白色粒子多　成・脚部と坏底部　坏底部と坏縁部接合　整・外面　脚部坏底部剝離不明瞭　坏縁部←ヨコナデ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ナデ　坏底部ナデ　坏縁部→ヨコナデ　焼・良　色・外　赤褐色及橙褐色　内　赤褐色　使・外面二次的焼成　焼土付着　内面炭化物付着　出・竈　残・脚部½　坏底部　坏縁部¾
高坏	7	口径　17.0	胎・白色粒子　0.1～0.2褐鉄粒多　成・坏底部と坏縁部接合　整・内外面風化摩滅不明瞭　焼・悪　色・橙褐色　使・内外面摩滅著しくザラつく　残・坏底部¾　坏縁部½
高坏	8		胎・白色粒子　0.1褐鉄粒多　整・内外面風化摩滅不明瞭　焼・悪　色・暗赤褐色　使・内外面摩滅　著しくザラつく　出・床直　残・坏縁部½
高坏	１１	口径　18.2	胎・白色粒子　0.1～0.2褐鉄粒少　成・脚部と坏底部　坏底部と坏縁部接合　整・外面　脚部ヘラミガキ　坏底部ヘラケズリ後ナデ　坏縁部←ヨコナデ　内面　脚部ナデ　坏底部ナデ　坏縁部→ヨコナデ　焼・二次的熱受け不明　色・内外面赤褐色　使・二次的熱受ける　外面焼土付着　剝離坏縁部内面炭化物付着　出・竈　残・脚部　坏底部　坏縁部
高坏	9		胎・白色粒子　成・脚部粘土紐巻上げ　整・外面　脚部ヘラミガキ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ナデ　焼・良　色・外　赤褐色　内　黄褐色　残・脚部
高坏	１０		胎・白色微石　0.1～0.2褐鉄粒多　成・裾部と脚部接合　脚部粘土紐巻上げ　整・内外面風化摩滅不明瞭　焼・普　内面　裾部黒斑有　色・外　橙褐色　内　赤褐色　使・内外面摩滅著しくザラつく　残・脚部　裾部¾　備・７と同一個体か？

椀	１２	口径　11.0 器高　7.8	胎・0.1～0.3砂粒多　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部下半ヘラケズリ　上半ナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・外赤褐色（胴部下半黒ずむ）　内　橙褐色　使・外面摩滅　残・口縁部　胴部（一部欠損）
椀	１３	口径　13.7 器高　5.5	胎・0.1砂粒　0.1～0.3褐鉄粒多　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部ヘラケズリ　口縁部→ヨコナデ　内面　ナデ　口縁部←ヨコナデ　焼・悪　色・外　赤褐色（胴部下半黒ずむ）内　赤褐色　使・内外摩滅　残・5/4
椀	１４	口径　10.4 器高　5.1	胎・微石少　成・胴部と口縁部接合　整・外面　底部ヘラケズリ　胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　内面　ヨコナデ後暗文（２０本）　口縁部ヨコナデ　焼・普　外面黒斑有　色・赤褐色　出・貯蔵穴内　接・貯蔵穴北　貯蔵穴内　残・½
坩	１５		胎・白色粒子　0.1～0.2褐鉄粒　成・胴部下半と上半接合　口縁部は胴部との接合部分で分離　整・外面　底部　胴部下半ヘラケズリ上半ヘラケズリ後ナデ　内面　胴部ナデ　焼・良　外面　黒斑有　色・外面　黄褐色　内面　黒色　使・胴部下半2.1×0.3の刀子（？）刺傷有（斜線部分）　出・床直　残・胴部　（大束）

１３号住居址

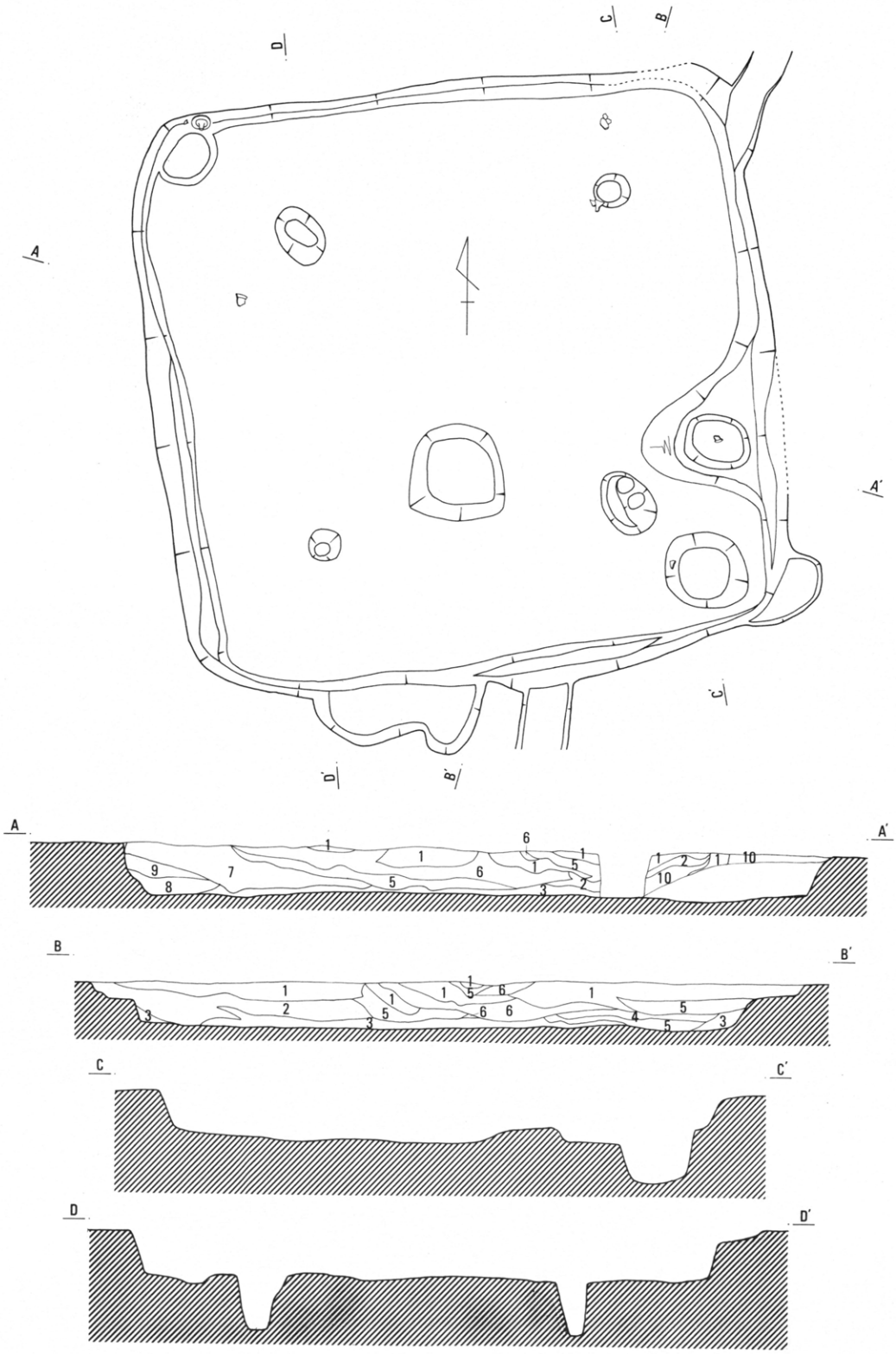
遺　構（第１３．１４図・図版２）

５．５×５．７ｍの正方形に近い平面を有するが壁上部の崩壊及び後世の攪乱が著しくプランの確認に苦慮した遺構である。住居址内外くまなく縦横に、天明３年降下の浅間火山灰を含む耕作土が、サンドパイプ状に走る。壁高は確認面から床面まで４０㎝であるが崩壊、攪乱により凸凹著しく壁中位に段をする。これは耕作土の混入により調査の不手際もあったが、床はほぼ残存し、ローム面をそのまま床面として平坦である。柱穴は４ケ所確認され、ほぼ対角線上に位置する。径はまちまちであるが深さは５０㎝で揃う。貯蔵穴は東南コーナー、カマドの向って右側にあり、径７０～８０㎝、深さ４０㎝、底面は平坦の円形である。

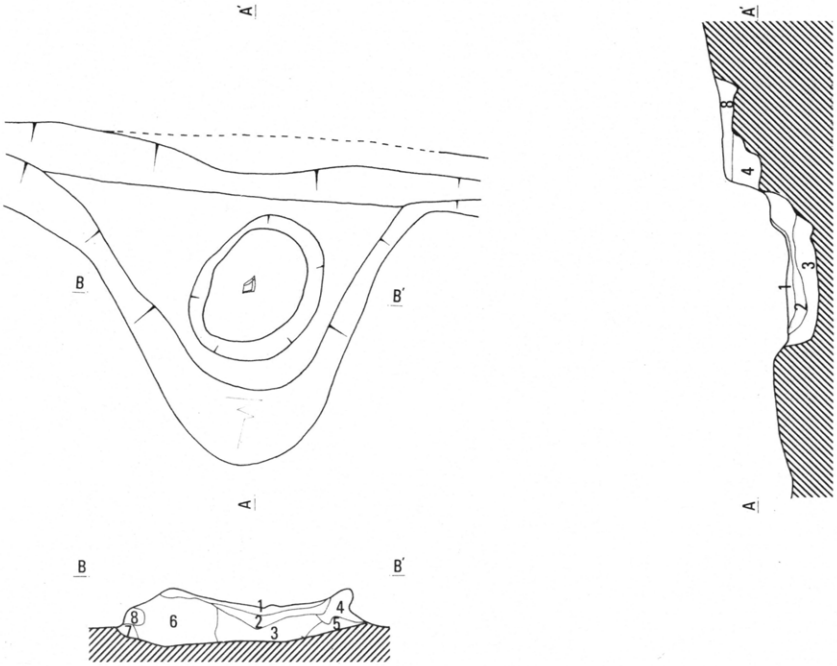
カマドは東壁の南寄りにあるがやはり耕作土の混入によって惑わされた。床面を掘りくぼめ暗褐色

１３号住居址土層　　Ｌ＝62.7M

1　表土　天明火山灰を多量に含む
2　黒色土　ロームブロックと粒子を含む
3　褐色土　ローム　黒色土を含み粘質
4　ローム
5　黒褐色土　ローム粒子を含み、２層より黒色強く、６層より明るい
6　黒色土　ローム粒子を少量含む
7　褐色土　ロームブロックと黒色土を含む
8　褐色土　ロームブロックと７層より多量の黒色土を含む
9　褐色土　ロームブロックとローム粒子を多量に含み、７、８層より明るい
１０　黒褐色土　ローム粒子、黒色土、焼土を含む



第１３図　　二本松遺跡１３号住居址



第１４図　　二本松遺跡１３号住居址・カマド

１３号住居址カマド土層　　L＝62.3M

1　焼土

2　暗褐色土　焼土を少量含む

3　暗褐色土　ローム粒子を含み、軟らかくしまり悪い

4　褐色土　ローム粒子を多量に含む

5　攪乱　天明火山灰を含み、表土が混入（木根によるものか）

6　暗褐色土　大きめのローム粒子を多量に含む

7　黒褐色土　ローム粒子を含む

8　ローム

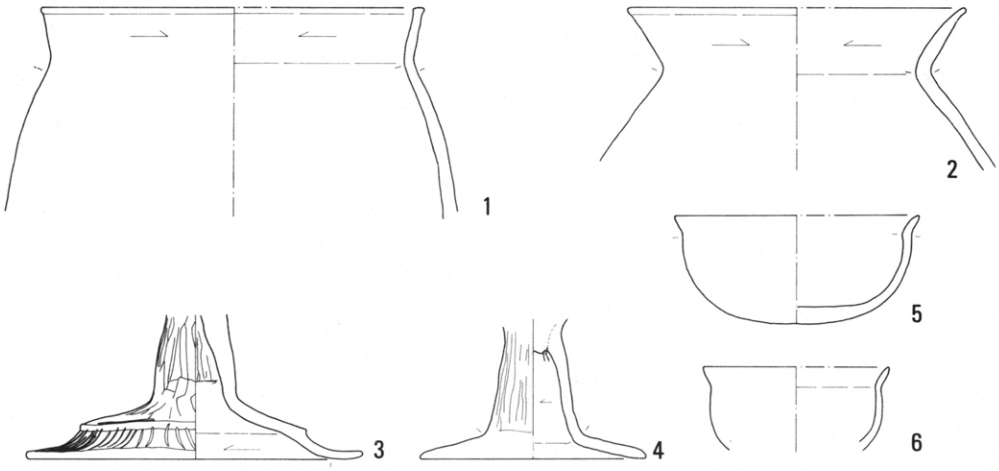
土等を埋めて床面とほぼ同レベルに構築し焼土によって幾分高くなる。火床部分は皿状となり、その周囲の焼け方が著しい。袖状の遺構は認めることができず、焚口部分は開かないでむしろ掘り残して高い。

遺物はカマドの中心部から高坏脚部破片、北西コーナに近く高坏、東北柱穴に接して高坏が検出された他は埦、甕の破片が数点検出されたにすぎない。

住居址中央南寄のピットは後世の攪乱で、東側上部を斜めに溝状遺構が切っている。（石橋）

出土遺物（第１５図）

器種	番号	法量（cm）	特　　徴
甕	1		胎・0.1～0.2砂粒　0.1～0.2褐鉄粒　成・胴部と口縁部接合　胴部粘土帯積上げ　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部→ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部←ヨコナデ　焼・良　色・橙褐色　残・口縁部及胴部一部
甕	2		胎・黒色粒子多　0.1～0.3褐鉄粒多　成・胴部と口縁部接合　胴部粘土帯積上げ　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部→ヨコナデ　内面



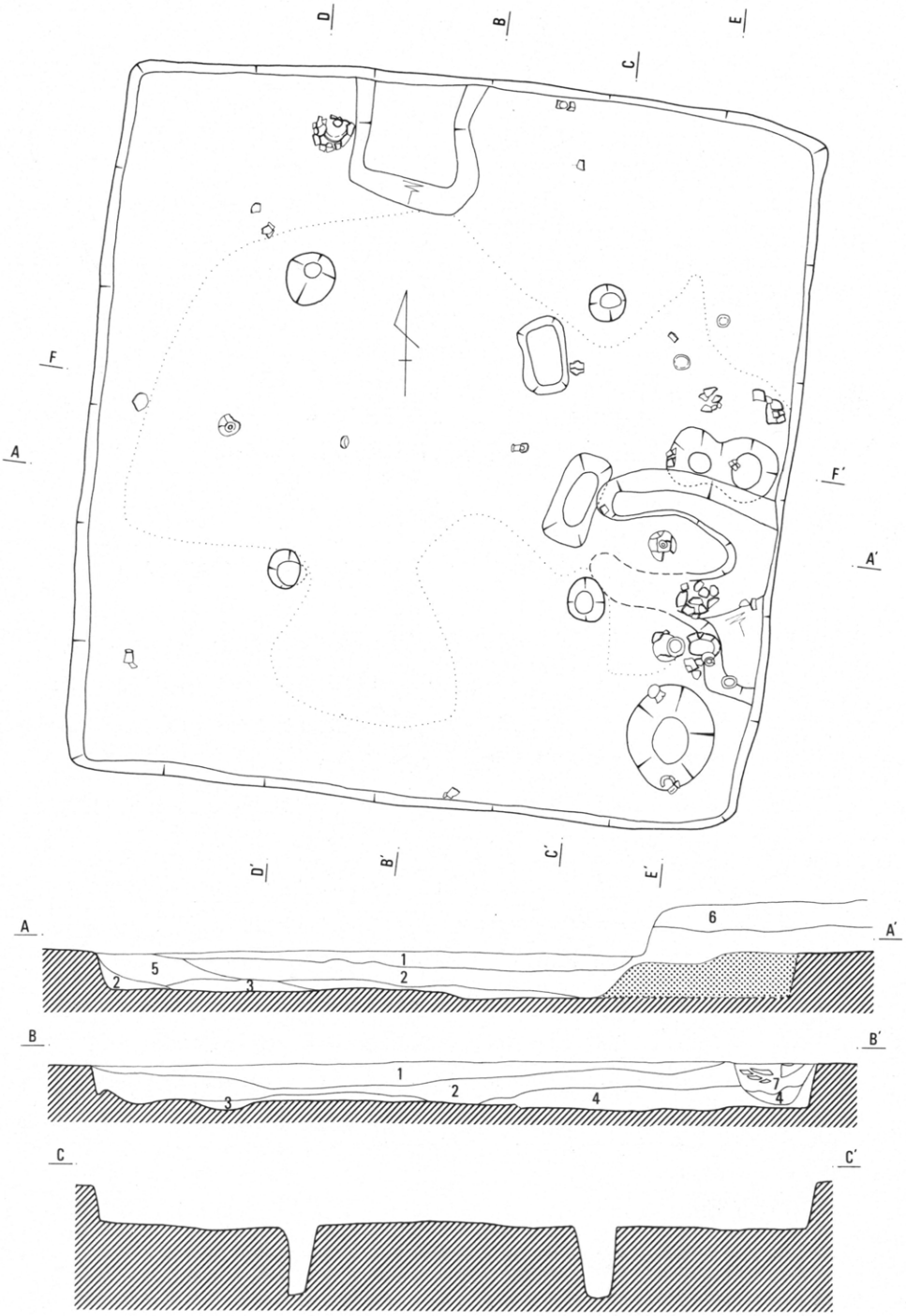
第１５図　　二本松遺跡１３号住居址出土遺物

			胴部←ナデ　口縁部←ヨコナデ　焼・良　色・赤褐色　残・口縁部½　胴部一部
高坏	3		胎・微石少　成・裾部下段と上段　裾部と脚部接合　整・外面　裾部下段ヨコナデ後↓暗文状　裾部上段　脚部ナデ後ヘラミガキ　内面　裾部先端ヘラケズリ　裾部下段←ヨコナデ　上段及脚部ナデ　焼・良　内面裾部黒斑有　色・橙褐色　残・裾部　脚部　備・精
高坏	4		胎・白色粒子多　成・裾部と脚部接合　脚部と坏底部臍状粘土で接合　整・外面　裾部ヨコナデ　脚部ヘラミガキ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ヘラケズリ　焼・良　色・赤褐色　内面脚部黒ずむ　残・裾部¼　脚部
椀	5		胎・石英　成・底部と胴部接合？　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部摩滅不明瞭　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・橙褐色　使・外面摩滅　残・⅓
椀	6		胎・白色微石　石英　0.1褐鉄粒少　成・胴部と口縁部接合　整・二次的熱受け不明瞭　焼・良　色・黒褐色　使・二次的熱を受け内外面黒ずみ煤付着　出・貯蔵穴内　残・口縁部及胴部一部　（大束）

１４号住居址

遺　構（第１６・１７図・図版２・図版３）

６ｍ×６．２ｍのほぼ正方形に近い平面形態をとり、壁高は３０～４０㎝でわずかな傾斜で立上がる。壁溝は認められず、床はローム面をそのまま床とする部分とロームを掘り下げた後、ローム（再堆積）粘土質土、褐鉄粒を含む黒色土を埋めた貼床部分がある。この貼床部分はカマド下と、ほぼ柱穴にかこまれた範囲内にあり１０～１５㎝掘り下げられている。北壁中央部に台状の１×１ｍ高さ７～８㎝の高まりが存在するが、粘土質のこの高まりは、黒色土の上に置かれた状態で検出された。



第１６図　　二本松遺跡１４号住居址

１４号住居址土層　　Ｌ＝62.6M

1　暗褐色土　ローム粒子を含む

2　暗褐色土　ローム粒子と黒色土を含む

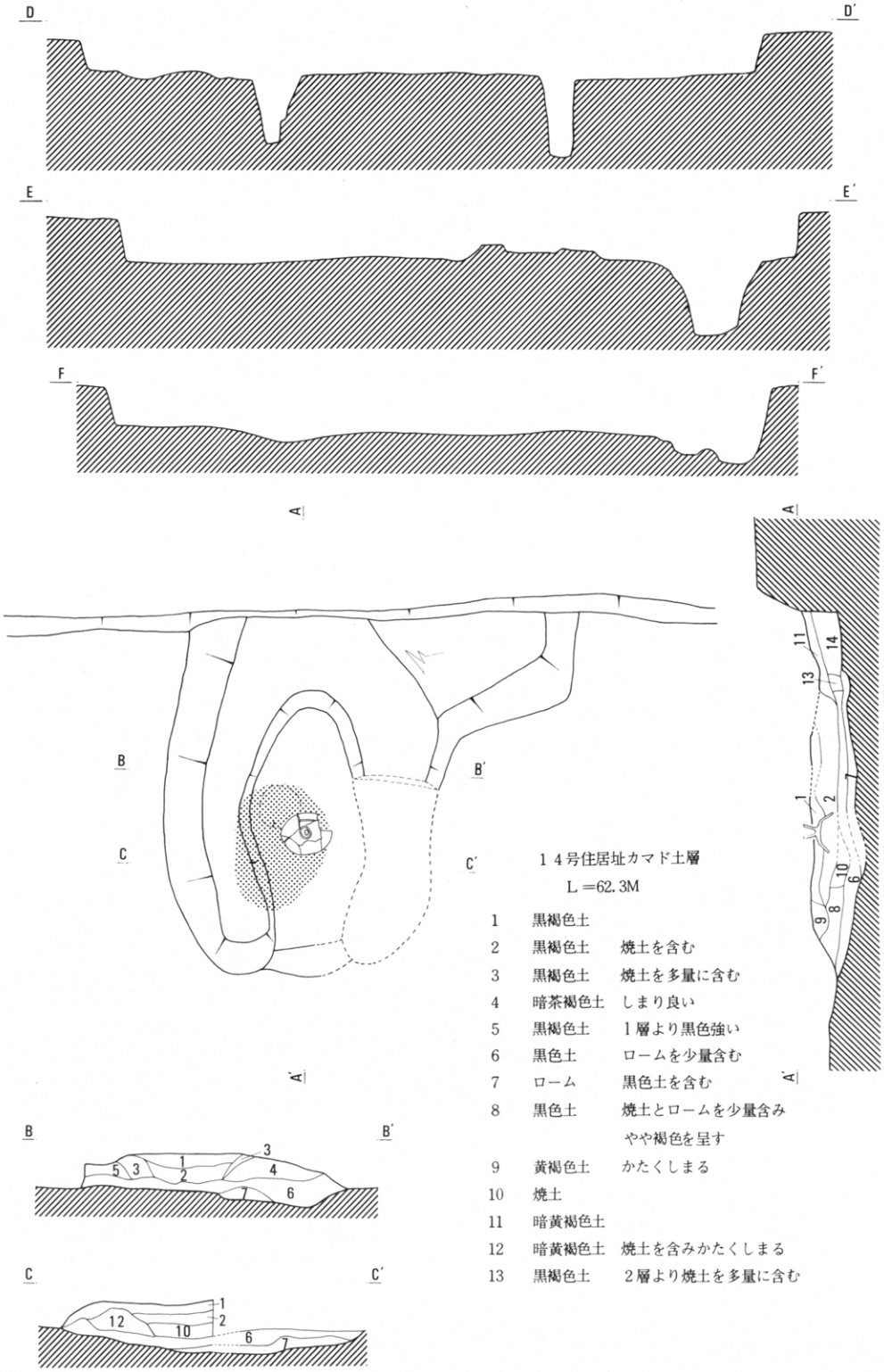
3　灰褐色土　ローム粒子を含む

4　黒色土　黒色強く、ローム粒子を含む

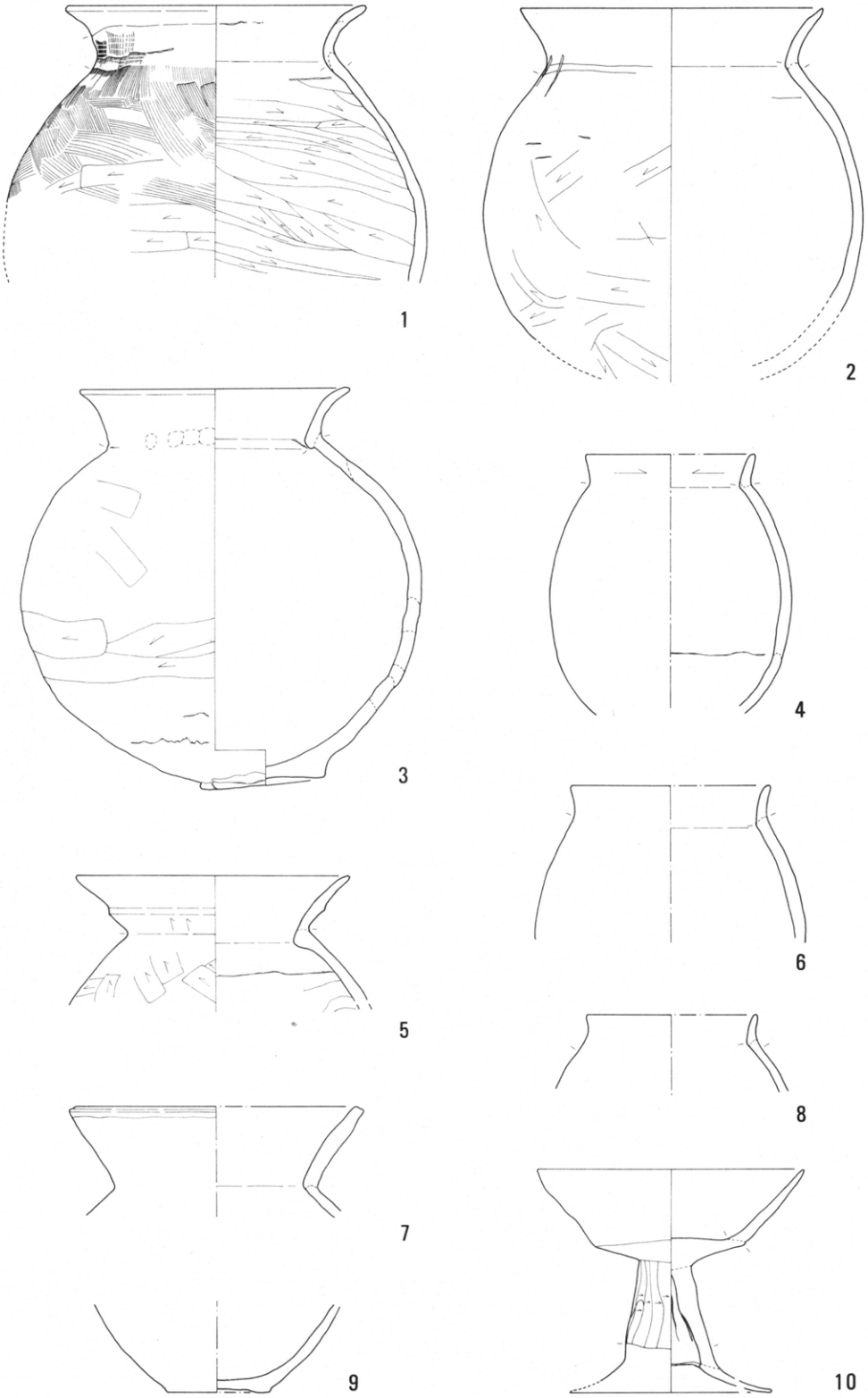
5　黒色土　ローム粒子を含む

6　耕作土

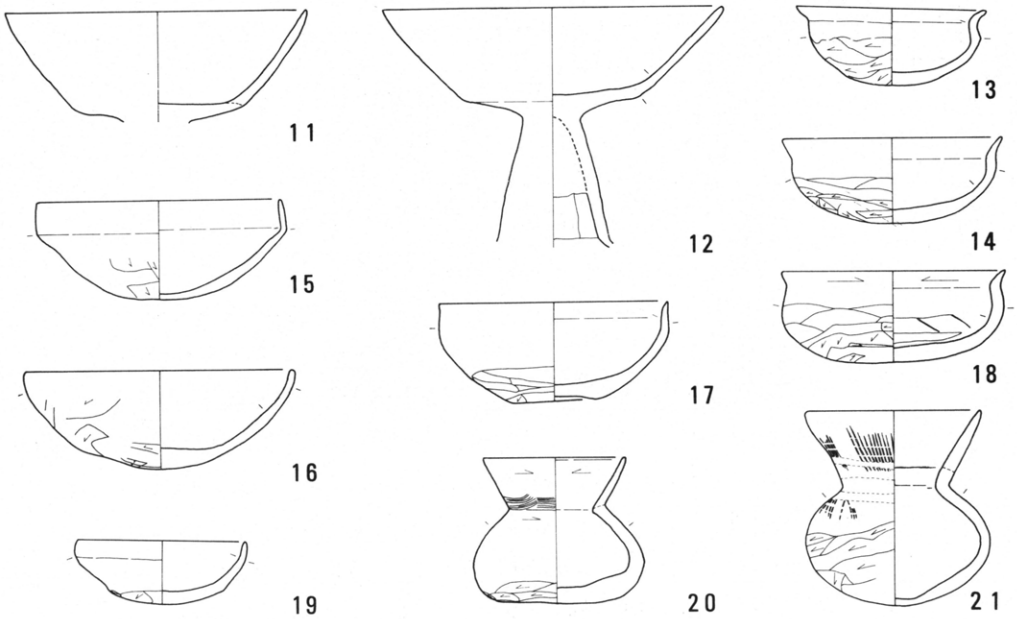
7　黒色土　天明火山灰縞状にまじる



第１７図　二本松遺跡１４号住居址・カマド



第１８図　　二本松遺跡１４号住居址出土遺物（１）



第１９図　　二本松遺跡１４号住居址出土遺物（２）

柱穴は４ケ所に確認され、対角線からわずかにずれ、深さは６０～７０㎝である。貯蔵穴は南東コーナー、カマドに向って右側に位置し７５×９０㎝の楕円状を呈し、深さ６５㎝の平坦な底である。

カマドは覆土と大差のない土で構築されているため注意して検出に努めたが右側袖の一部を削除してしまった。床面を２０㎝ほど掘りくぼめて構築しているが袖は床面から１５～２０㎝の高さで残存していたにすぎない。火床部はほぼ中央に高坏が倒立した状態で据えられており、それに接して坏縁部内面を思わせる焼土の高まりが検出され、支脚としての高坏が抜きとられたかのような状態であった。

断面実測図には表現できなかったが、調査終了後カマドの切りくずし再点検で左袖の下に現火床から続く焼土が検出されたことなどを考えあわせて改築されたものであると考えられる。抜きとられた高坏の位置を火床の中心とすれば左袖の下につづく焼土も理解できる。左袖にかかって瓢形のピットと、左袖から焚口にかけて長楕円のピットが存在する。瓢形ピットは円形ピットが連なったもので、深さ３０㎝、長楕円ピットは３５×８０㎝で非常に浅い。ともに残存していたカマド以前のものである。

遺物はカマドから倒立した高坏、右袖上から貯蔵穴にかけて甕３個体、坩、埦、貯蔵穴外周から坩・埦が検出されている。北壁に接した台状高まりの裾に甕が検出されたほか、高坏、坩、埦などがみられたが床面が構築された貼床範囲内の遺物はほとんどが床面直上であった。

南壁中央部、壁に接し、土層断面図によって天明３年降下の浅間山火山灰を含む土坑が認められたが床面には達せず、平面形態は不明である。　　（石橋）

出土遺物（第１８．１９図）

器種	番号	法量（cm）	特　　徴
甕	1	口径　17.5	胎・白色粒子　石英　0.5～1.0小石極少　褐鉄粒子多　成・胴部粘土帯積上げ　胴部と口縁部接合（接合痕部分的に明瞭）　口縁部二段積（接合痕部分的に明瞭）　整・外面　胴部下半ヘラケズリ　上半ハケ調整　口縁部下半ハケ調整後ヨコナデ　内面胴部ヘラナデ（0.7幅の工具使用　ナデとナデの間　粘土盛りあがり）　口縁部ヨコナデ　焼・普　外面黒斑有　色・赤褐色　使・内面黒ずむ　出・カマド袖　残・胴部上半　口縁部
甕	2	口径　17.8	胎・微石　0.2～0.7小石多　成・胴部粘土帯積上げ　胴部下半と上半接合　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・悪　外面黒斑有　色・黄褐色　使・外面胴部下半煤付着　黒ずむ　出・カマド　残・胴部⅔　口縁部
甕	3	口径　15.9 器高　23.9	胎・0.1～0.5小石極多　0.1～0.5褐鉄粒極少　成・底部粘土貼付してバランスをとる　胴部粘土帯積上げ　胴部と口縁部接合（接合痕一部明瞭）　整・外面　底部ヘラケズリ　胴部下半ヘラケズリ後ナデ　中央ヘラケズリ　上半ヘラケズリ後ナデ　胴部と口縁部の接合部指頭圧痕　口縁部ヨコナデ　内面　底部　胴部剝離不明瞭　口縁部ヨコナデ　焼・悪　色・外　黄褐色　内　灰褐色　使・外面　煤付着　内面　剝離著しい　残・ほぼ完形　備・粗
甕	4		胎・白色微石　0.1～0.3褐鉄粒少　成・胴部粘上帯積上げ　胴部下半と上半接合　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部風化摩滅不明瞭　口縁部→ヨコナデ　内部　胴部ナデ　口縁部←ヨコナデ　焼・悪　色・外　赤褐色　内　黒褐色　使・外面胴部風化摩滅　残・胴部⅓　口縁部一部
甕	5	口径　16.1	胎・0.1～0.3砂粒多　褐鉄粒子極少　成・胴部粘土帯積上げ　胴部と口縁部接合　口縁部二段積か？　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・悪　黒斑　色・橙褐色　使・外面風化摩滅　口縁部非常にもろく　復原困難　口唇部摩滅著しい　出・カマド裾　残・胴部上半　口縁部⅔　備・復原不良
甕	6		胎・黒色粒子　白色粒子多　0.1～0.3褐鉄粒　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部風化摩滅不明瞭　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・外　橙褐色　内　黄褐色　使・外面風化摩滅　残・胴部一部　口縁部¼
甕	7		胎・褐鉄粒子　成・胴部と口縁部接合　整・内外面風化摩滅不明瞭　焼・普　色・赤褐色　使・外面　風化摩滅著しい　内面　黒ずむ　残・口縁部一部
甕	8		胎・褐鉄粒子少　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部風化摩滅不明瞭

			口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・橙褐色　使・風化摩滅　出・カマド袖　残・胴部及口縁部一部
甕	9		胎・0.1～0.2砂粒多　0.1～0.5褐鉄粒多　成・底部ヘラケズリ後上り底か？　胴部粘土帯積上げ？　整・外面　胴部↔ヘラケズリ　内面　ナデ　焼・悪　色・外　赤褐色　内　黒褐色　使・風化摩滅　出・床直　残・底部　胴部下半⅓　備・4と同一個体か？
高坏	10	口径　15.8	胎・微石　石英　角閃石多　成・裾部と脚部（接合痕明瞭）　脚部と坏底部　坏底部と坏縁部接合　坏底部　坏縁部弧状ヘラにより成形　整・外面　裾部及脚部下半ヨコナデ　脚部及坏底部ヘラケズリ後ナデ　坏縁部ヨコナデ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ナデ　坏底部ナデ　坏縁部ヨコナデ　焼・普　外面坏縁部黒斑有　色・赤褐色　使・二次的熱受ける　外面脚部煤付着　坏縁部黒ずむ　出・カマド裾　残・ほぼ完
高坏	11	口径　16.0	胎・微石　石英　多　0.1～0.3褐鉄粒　成・坏底部と坏縁部接合　整・外面　風化摩滅不明瞭　内面　坏底部剝離不明瞭　坏縁部ヨコナデ　焼・悪　色・外　赤褐色　内　橙褐色　使・内面坏底部剝離　黒ずむ　残・坏底部　坏縁部¾
高坏	12	口径　18.0	胎・白色微石多　成・脚部と坏底部　坏底部と坏縁部接合　整・脚部及坏底部二次的熱不明瞭　内外面口縁部ヨコナデ　焼・普　外面　坏縁部黒斑有　色・外　橙褐色　内　橙褐色一部赤褐色　使・二次的熱受ける　外面摩滅　脚部内部焼土が詰まる　裾部接合部摩滅し　丸味を持つ　出・カマド内　残・脚部　坏底部　坏縁部
椀	13	口径　10.0 器高　4.1	胎・微石多　褐鉄粒子少　粘土練込　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部ヘラケズリ　胴部上半　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　外面黒斑有　色・橙褐色　残・ほぼ完形　備・粗
椀	14	口径　11.6 器高　4.5	胎・白色粒子少　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部下半同心円状ナデ　胴部上半　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・橙褐色　使・口唇部摩滅　出・カマド裾　残・ほぼ完形
椀	15	口径　12.8 器高　5.2	胎・白色粒子　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・悪　色・赤褐色　使・風化ザラつく　残・⅘
坏	16	口径　14.0 器高　5.2	胎・石英　0.1褐鉄粒多　成・底部と胴部接合か？　整・外面　胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ及ナデ後ヘラミガキ　口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ（暗文？）　焼・悪　黒斑有　色・赤褐色　残・ほぼ完形
椀	17	口径　12.2 器高　4.5	胎・0.2～0.5褐鉄粒少　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部下半ヘラケズリ後ナデ　上半ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部

			ヨコナデ　焼・良　外面底部黒斑　色・外　橙褐色　内　上半橙褐色　下半黒褐色　使・内外面口縁部一部剝離　出・床直　残・ほぼ完形
埦	１８	口径　11.8 器高　4.8	胎・白色粒子　石英　褐鉄粒子極少　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部下半ヘラケズリ後ナデ　上半及口縁部→ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ？　口縁部←ヨコナデ　焼・悪　色・赤褐色内外面一部黒ずむ　出・貯蔵穴内　残・胴部（一部欠損）　口縁部⅔
坏	１９	口径　8.8 器高　3.4	胎・0.1砂粒多　0.1～0.3褐鉄粒　成・底部はヘラケズリ　底部と胴部接合か？手捏風　整・外面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部同心円状ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・橙褐色　使・口唇部摩滅　出・床直　残・ほぼ完形　備・粗
坩	２０	口径　7.5 器高　7.7	胎・石英多　0.1～0.2褐鉄粒　成・底部と胴部接合か？　胴部と口縁部接合　整・外面　底部ヘラケズリ　胴部下半ヘラケズリ後ナデ　胴部上半ナデ　口縁部→ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部←ヨコナデ　焼・良　外面黒斑有　色・外　橙褐色　内　口縁部橙褐色　胴部黒色　出・カマド裾　残・胴部　口縁部⅔
坩	２１	口径　9.2 器高　10.3	胎・白色粒子　石英　0.2～0.3砂粒少　0.1～0.5褐鉄粒多　成・胴部と口縁部接合　口縁部二段積　整・外面　胴部下半ヘラケズリ　上半ハケ調整後ナデ　口縁部ハケ調整後ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　ヘラオサエ有　焼・普　色・外　橙褐色　内　口縁部橙褐色　胴部黄褐色　出・貯蔵穴上　残・完形　（大束）

１５号住居址

遺　構（第２０・２１図・図版３・図版４）

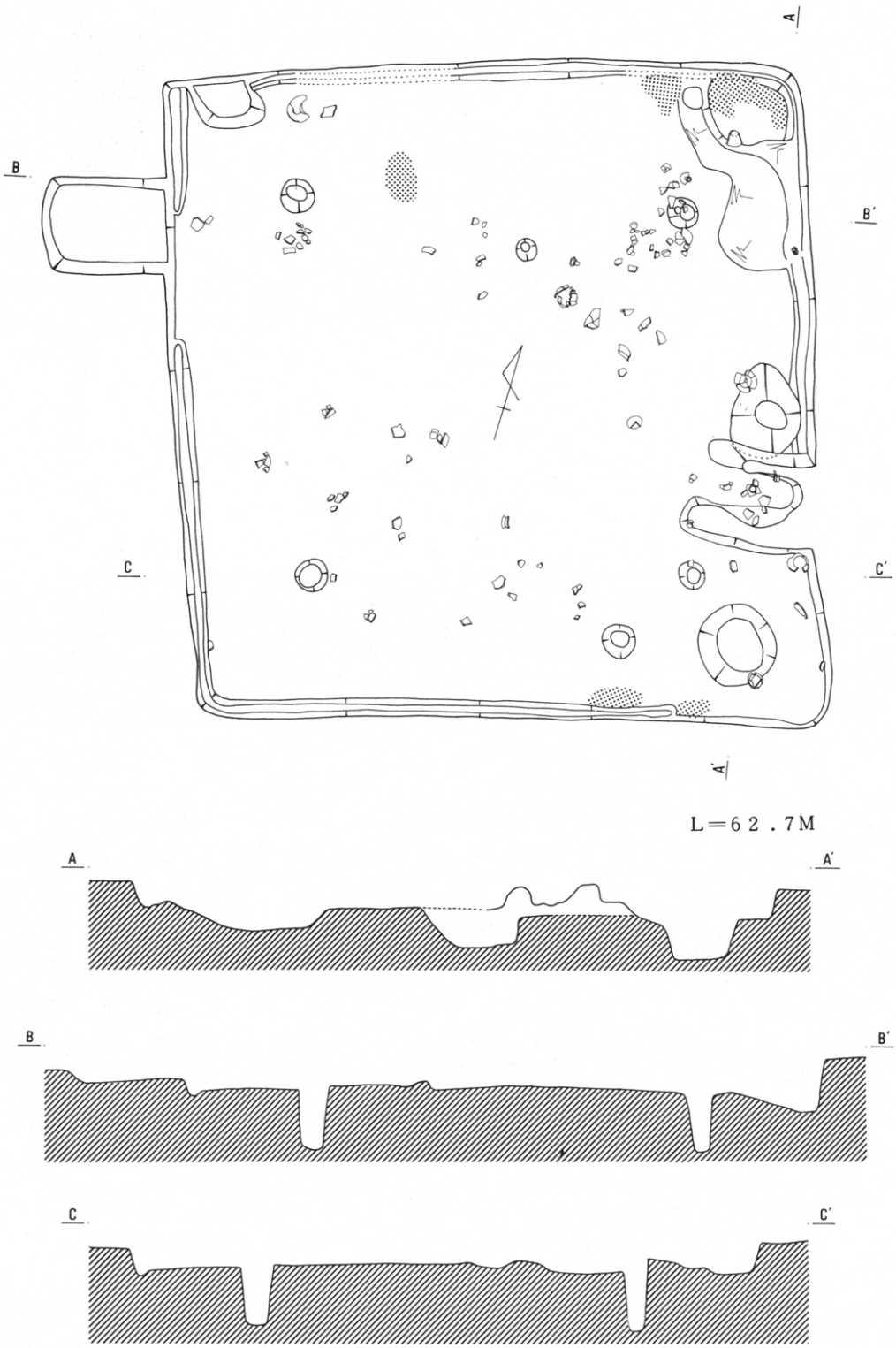
５．８×５．９ｍの南コーナーへやや張り出した正方形を呈する。壁高は２０～２５㎝、わずかな傾斜をもって立上がる。カマドと貯蔵穴の周囲、西壁の一部を除いて８～１５㎝幅の壁溝がめぐり、北壁に一部不明瞭な部分があるが、耕作による破損と考えられる。床面は、ロームをそのまま床として平坦で、やや軟弱である。柱穴は径３０㎝、深さ５０㎝のものが４箇所、ほぼ対角線上に位置する。

貯蔵穴は南東コーナー、カマドの右に位置し径７０㎝、深さ４０㎝の底面平坦の楕円形である。

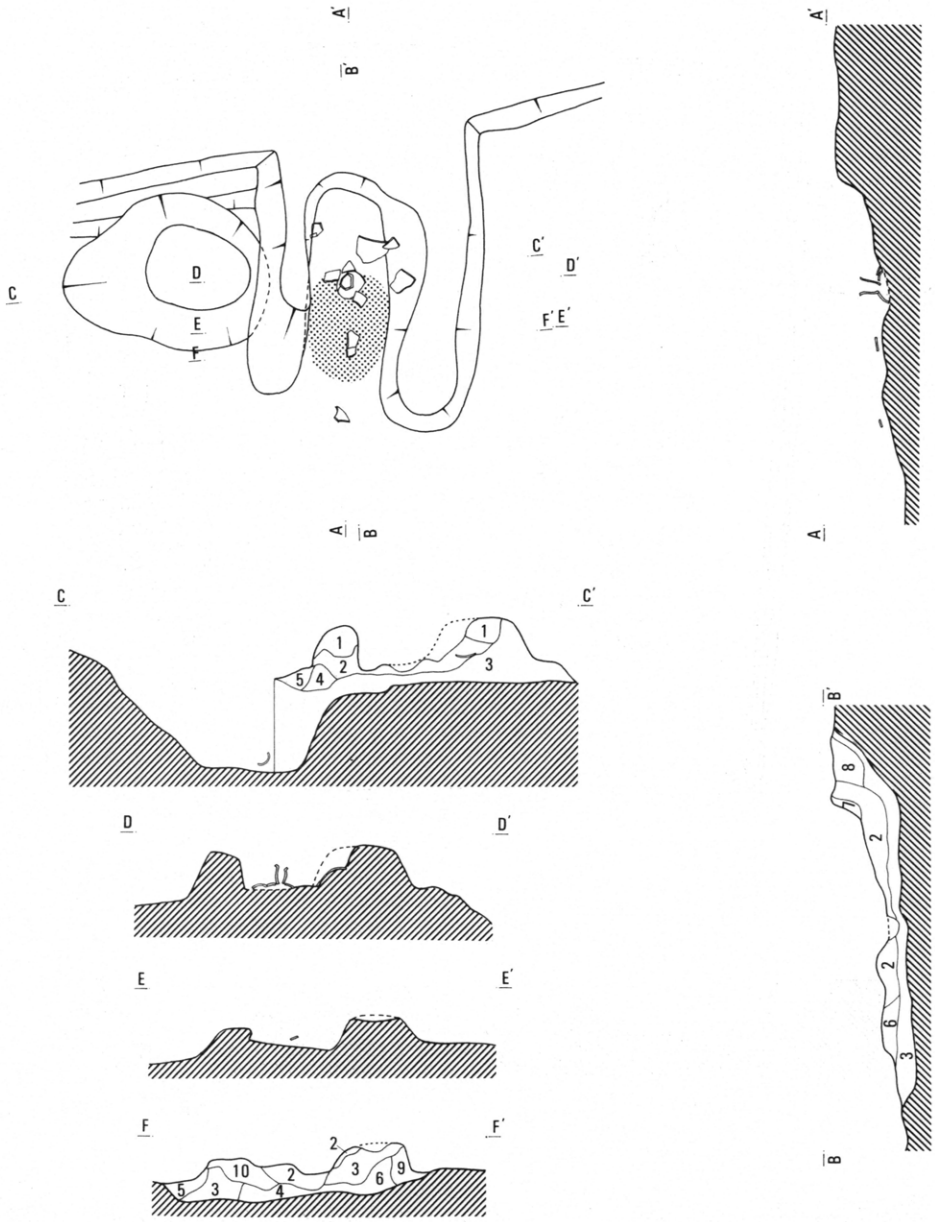
カマドの左袖下にも７０×８５㎝、深さ３５㎝、底面は平坦な不整楕円形ピットが存在する。このピット覆土中位に多量の炭火材がレンズ状に検出され、底近くでは多量の焼土が混じっていた。

北コーナーにも不整なピット状の掘り込みが検出されたが焼土ブロック、炭火材が目立っている。この他貯蔵穴西、北東柱穴西側にピットが検出されたが使途は不明、更に西壁にも近代のものと考えられる長方形の浅いピットが検出されている。

カマドは東壁南寄りに位置し遺存状況は比較的に良好で袖は床面から２５㎝の高さで残存し、ローム、暗褐色土で構築され、それぞれ焼土を含んでいる。カマド左袖にかかるピットの北に、床は一応安定してはいるものの床面ロームの不自然な部分があり、あるいは検出されたカマド以前のカマドが存



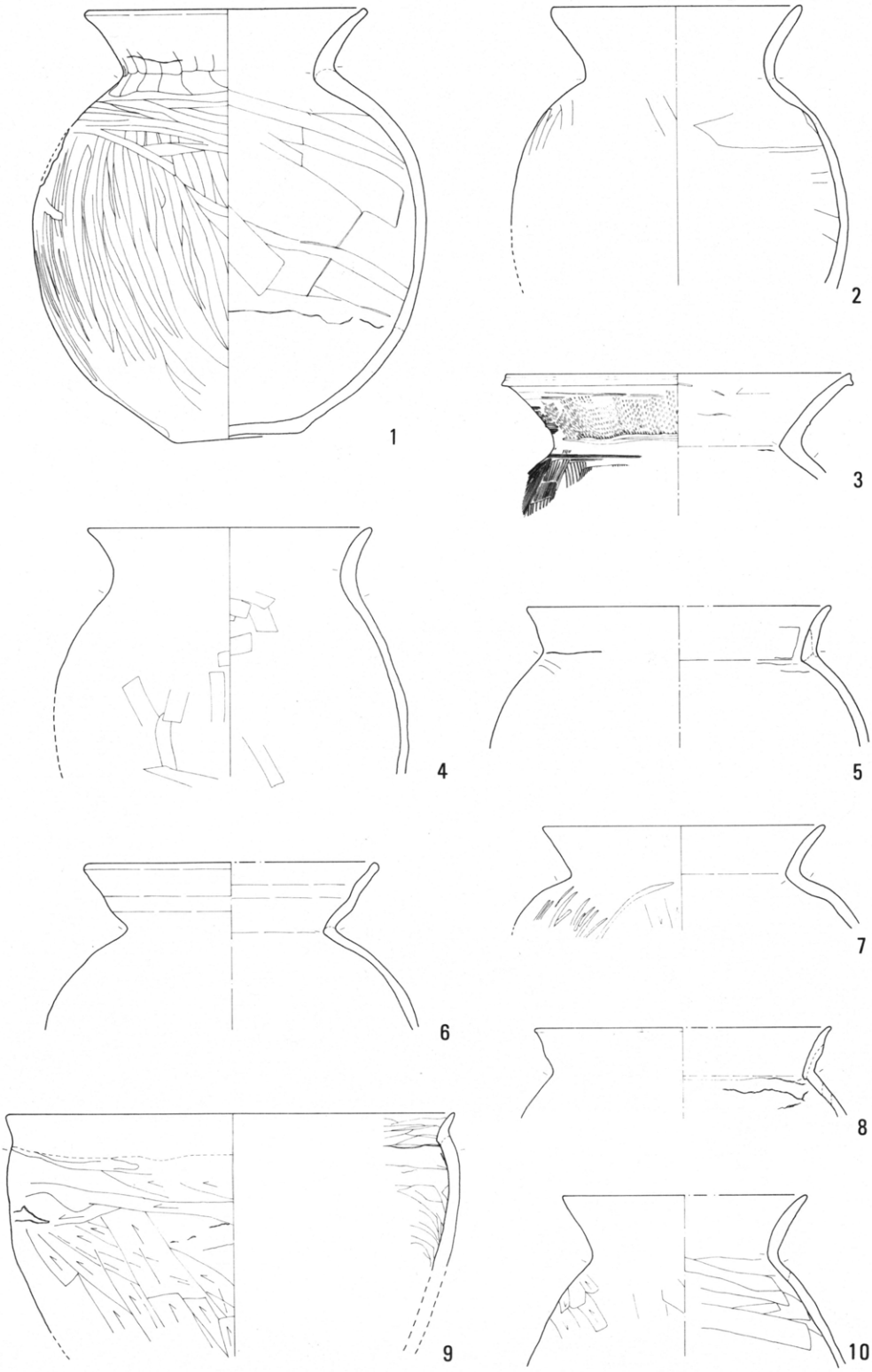
第２０図　　二本松遺跡１５号住居址



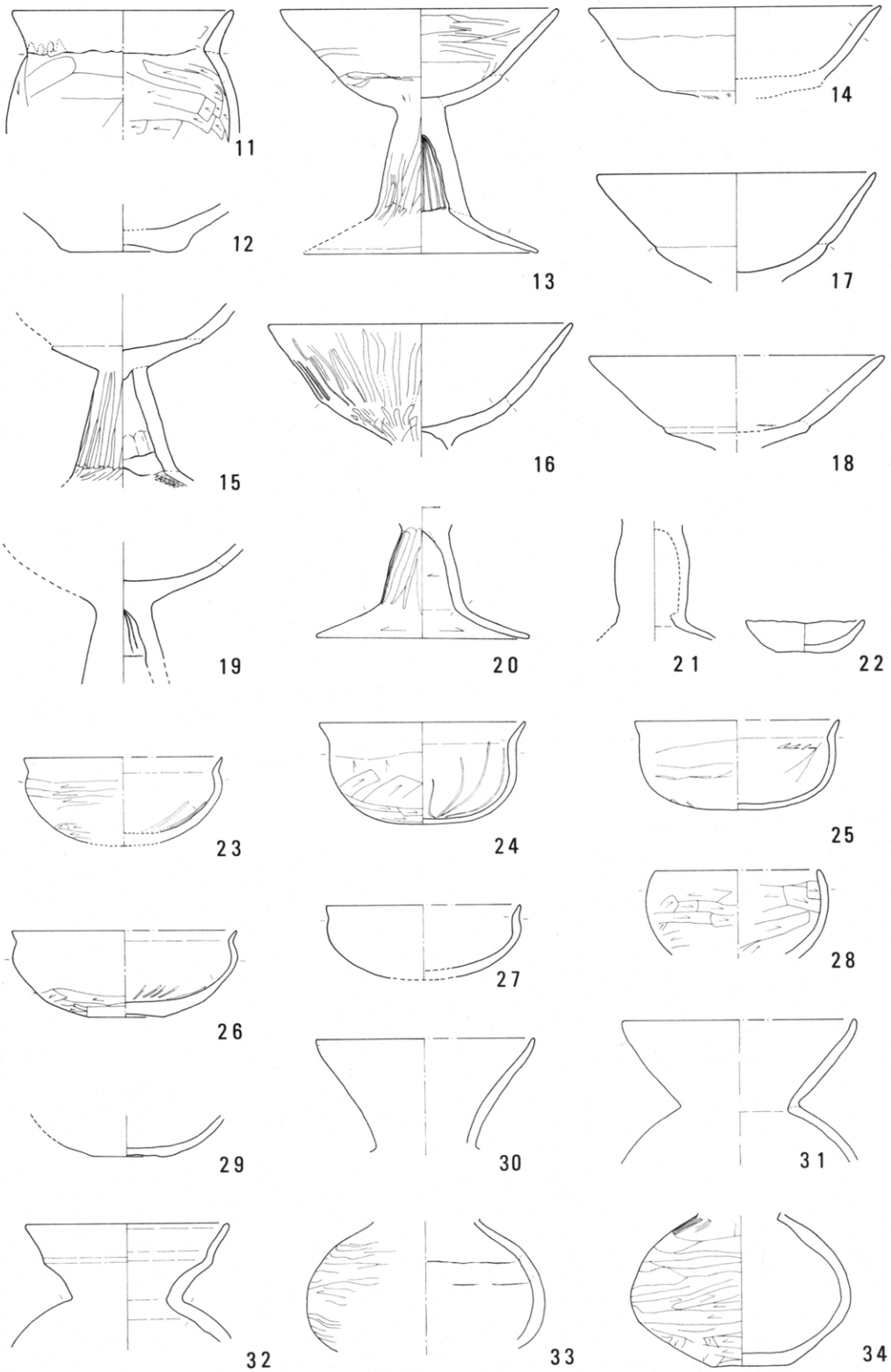
第２１図　　二本松遺跡１５号住居址・カマド

１５号住居址カマド土層　　L＝62.6M

1　褐色土　ローム的な土で白いパミスと焼土を含む
2　焼土　比較的焼けているが、かたまりではない
3　暗褐色土　少量の焼土とローム粒子を含む
4　ローム
5　暗褐色土　3層より焼土を多量に含み、赤色強い
6　褐色土　ロームと焼土を含む
7　焼土　ロームの焼けたもの
8　暗褐色土　ローム粒子を含む
9　黒褐色土　炭化材を多量に含む
10　焼土　黒褐色土と縞状に交わる



第２２図　　二本松遺跡１５号住居址出土遺物（１）



第２３図　　二本松遺跡１５号住居址出土遺物（２）

在していた位置であろうかと考えられる。左袖下のピットと考えあわせても改築されたものであろう。

遺物はカマド火床から倒立した高坏、左袖つけ根に胴部中位以下を欠いた甕、貯蔵穴の南に埦、北西コーナーの近くに甕、カマド北のピットに接して高坏坏縁部、ピット内から二次的熱を受けた径7cmほどの坏などが検出され、比較的散布した状況を示しているが、甑は西北柱穴ぎわと、カマド内のものが接合された。（大束）

出土遺物（第２２・２３図）

器種	番号	法量（cm）	特　　徴
甕	1	口径　16.6 器高　25.7	胎・白色微石多　褐鉄粒極少　成・胴部上半と下半接合（内面接合痕明瞭）　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部上半↔荒いヘラミガキ　胴部中央及下半↕荒いヘラミガキ　口縁部ヨコナデ　内面　底部指ナデ（凸凹明瞭）胴部↘ヘラナデ　口縁ヨコナデ　焼・普　色・橙褐色　使・口縁部摩滅著しい　胴部外面　炭化物付着　残・胴部⅔　口縁部（一部欠損）　備・口縁部著しい摩滅は甑使用のためか。
甕	2	口径　14.8	胎・白色微石少　0.1褐鉄粒極少　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部↕ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部↔ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　頸部指頭による調整（凸凹明瞭）　焼・良　色・赤褐色　残・胴部上半½　口縁部⅓　出・カマド内　備・精
甕	3	口径　20.6	胎・白色粒子少　0.1褐鉄粒極少　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部↓ハケ調整　口縁部↑ハケ調整後ヨコナデ　口唇部→ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部←ヨコナデ　焼・普　色・暗赤褐色　使・外面　胴部口縁部一部煤付着　残・口縁部½
甕	4	口径　17.0	胎・角閃石少　0.1～0.5褐鉄粒多　成・胴部粘土帯積上げ　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部↕↔ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部↕↔ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・暗赤褐色　使・胴部口縁部外面　一部煤付着　残・胴部上半½　口縁部（一部欠損）
甕	5	口径　18.1	胎・白色　黒色微石少　0.2～0.5褐鉄粒少　成・胴部と口縁部接合（内外面接合痕明瞭）　整・外面　胴部↔ヘラミガキ状の調整（光沢あり）口縁部ヨコナデ　内面　胴部方向不明のヘラミガキ状の調整（光沢あり）　口縁部ヘラオサエ後ヨコナデ　焼・良　色・赤褐色　使・外面一部煤付着　残・口縁部⅓　備・精
甕	6		胎・0.1～0.5白色小石　0.1～0.2褐鉄粒少　成・口縁部と胴部接合　整・外面　胴部↘ヘラケズリ後ナデ（光沢少々）　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・橙褐色　出・貯蔵穴上　残・口縁部⅓　備・精
甕	7	口径　16.9	胎・白色粒子多　0.3褐鉄粒少　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　↕暗文状沈線を付す　口縁部ヨコナデ　内面　指頭圧

			痕　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・赤褐色　使・外面煤付着　内面炭化物付着のため黒ずむ　出・カマド裾　残・胴部一部　口縁部
甕	8		胎・白色粒子　0.1～0.2褐鉄粒少　成・胴部粘土紐の積上げか？　胴部と口縁部接合（内面接合痕明瞭）　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ（光沢あり）　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・赤褐色　残・口縁部¼
甑	9	口径　26.8	胎・白色微石少　0.1～0.3褐鉄粒少　成・胴部と口縁部接合（内面接合痕明瞭）　整・外面　胴部↑ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部←ヘラケズリ後ナデ　口縁部↔ヘラミガキ　焼・良　色・外　橙褐色　内　赤褐色　使・胴部ヒビ割れ後内外面煤付着　出・カマド内及び袖接・カマド内　カマド袖　西壁北側　残・口縁部½　備・精　作り使用痕等から甑と思われる
甕	10		胎・黒色砂粒多　0.1～0.3褐鉄粒　成・胴部と口縁部接合か　整・外面　胴部↘ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部←ヘラナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・外　橙褐色　内　赤褐色　出・カマド内　残・口縁部¼　備・精
甕	11	口径　13.2	胎・白色微石　0.1～0.5褐鉄粒多　成・胴部と口縁部接合（外面接合痕明瞭）　整・外面　胴部←↓ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　指頭圧痕有　内面　胴部←↘ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・外　灰褐色　内　赤褐色　使・内面　口縁部部分的に剝離　口唇部摩滅　出・カマド内　カマド北ピット内　残・口縁部½
甕	12		胎・白色　黒色微石　成・底部外周に粘土紐貼付か　整・外面　底部凹部分ナデ　内面　底部ヘラケズリ後ナデ　焼・普　色・外　橙褐色　内　暗赤褐色　使・内面剝離著しい　残・底部¾
高坏	13	口径　16.1 器高　14.7	胎・白色粒子少　0.1褐鉄粒少　成・坏縁部　坏底部　脚部　裾部各々接合（脚部と裾部接合痕内面にて明瞭）　整・外面　裾部ヨコナデ　脚部↕ヘラミガキ　坏底部↑ヘラケズリ後ナデ　坏縁部ヨコナデ　内面　裾部ヨコナデ　脚部↕ヘラ調整　坏底部ヘラミガキ　坏縁部ヨコナデ後↔ヘラミガキ　焼・普　色・外　橙褐色　内　赤褐色　出・カマド　残・裾部½　脚部　坏底部　坏縁部¾　備・カマド内にて支脚として使用される
高坏	14	口径　17.7	胎・白色　黒色砂粒多　0.1～0.3褐鉄粒多　成・坏底部と坏縁部接合か？　整・外面　坏底部ヘラケズリ後ナデ　坏縁部上半ヨコナデ　下半ヘラミガキ　内面　坏底部ヘラミガキ　坏縁部上半ヨコナデ　下半↔ヘラミガキ　焼・普　色・赤褐色　使・坏縁部上半一部摩滅著しい　出・カマド内　残・⅔　備・カマド内にて支脚として使用か
高坏	15		胎・白色微石少　成・脚部と坏縁部を臍状粘土で接合　坏縁部が坏底部と

			の接合部分で分離する　脚部は粘土紐の積上げ（内面痕跡）　整・外面裾部↘ヘラミガキ　脚部↑ヘラミガキ　坏底部↑ヘラケズリ後ナデ　坏縁部ナデ　内面　裾部ハケ調整後ナデ　脚部ヘラケズリ及び指頭による調整坏底部ナデ　坏縁部ナデ　暗文状沈線を付す　焼・普　色・橙褐色　使・脚部外面一部煤付着　接・中央部北側（脚部）とカマド南側（坏底部）残・裾部一部　脚部　坏底部⅔　坏縁部一部
高坏	１６	口径　18.2	胎・白色　黒色粒子少　成・坏底部と坏縁部接合　整・外面　坏底部↑ヘラケズリ後↑ヘラミガキ　坏縁部ヨコナデ後暗文を付す　内面　坏底部ナデ　坏縁部ヨコナデ後↔ヘラミガキ　焼・良　外面黒斑有　色・橙褐色　使・内面一部煤付着　出・床直　残・坏底部　坏縁部　備・精
高坏	１７	口径　16.8	胎・白色　褐鉄粒子多　0.1～0.2褐鉄粒　成・坏底部と坏縁部接合　整・器面荒れていて不明（ザラつく）　焼・悪　黒斑有　色・橙褐色　出・貯蔵穴上床面と同レベル　残・坏底部　坏縁部　備・粗
高坏	１８		胎・白色粒子少　褐鉄粒子極少　成・坏底部と坏縁部接合　整・外面　器面荒れ不明　内面　坏底部ナデ　坏縁部上半ヨコナデ　下半ナデ　焼・悪　色・橙褐色　残・⅓
高坏	１９		胎・白色粒子　0.1～0.2褐鉄粒極少　成・脚部と坏底部接合　整・外面　器面荒れ不明　内面　脚部ヘラ調整痕有　下半ヘラケズリ後ナデ　坏底部ナデ　焼・普　色・橙褐色　外面黒ずむ　出・床直　残・脚部上半　坏底部½
高坏	２０		胎・白色粒子少　成・裾部と脚部接合か？　整・外面　裾部←ヨコナデ　脚部↓ヘラケズリ後暗文（ヘラミガキ？）を付す　内面　裾部→ヨコナデ　脚部←ヘラケズリ　焼・普　色・外　橙褐色　内　赤褐色　出・床直　残・脚部　裾部（一部欠損）
高坏	２１		胎・白色及び黒色粒子少　0.1褐鉄粒少　成・裾部と脚部接合（内面接合痕明瞭）　整・外面　脚部↓ヘラケズリ後ナデ　内面　不明　焼・普　色・外　赤褐色　内　裾部赤褐色　脚部橙褐色　残・脚部
坏	２２	口径　7.1 器高　2.0	胎・白色粒子少　褐鉄粒子少　成・手捏ねによる　整・器面剝離著しく不明　焼・二次的熱不明　色・橙褐色　出・カマド北ピット内　残・完形
埦	２３		胎・白色粒子少　成・不明　整・外面　胴部↔ヘラケズリ後ヘラミガキ（光沢少々）口縁部ヨコナデ　内面　胴部下半ナデ後暗文を付す　上半ヨコナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・赤褐色　残・胴部¼　口縁部⅓
埦	２４	口径　12.3 器高　6.1	胎・黒色微石多　0.1～0.3褐鉄粒多　成・不明　整・外面　胴部上半↑↘ヘラケズリ後ナデ　下半→ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　内面胴部ナデ後暗文を付す　口縁部ヨコナデ　焼・普　外面黒斑有　色・橙褐色　出・貯蔵穴上　残・ほぼ完形

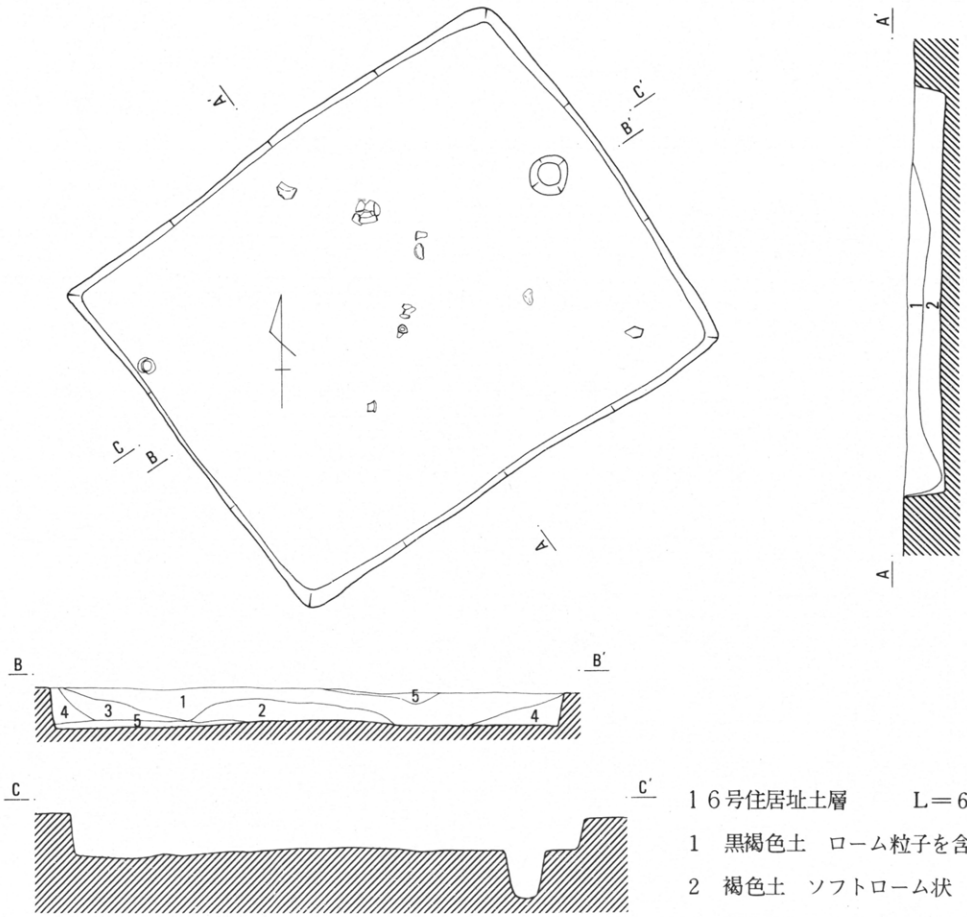
埦	25		胎・白色粒子　黒色粒子少　褐鉄粒子極少　成・不明　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　外面黒斑有　色・赤褐色　使・底部摩滅　残・口縁部⅙　胴部½　備・精
埦	26		胎・白色粒子少　成・不明　整・外面　底部ヘラケズリ後ヘラミガキ　胴部下半←ヘラケズリ後ヘラミガキ　上半ヨコナデ　口縁部ヨコナデ　内面　底部　胴部下半ナデ後暗文を付す　上半ヨコナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良（堅緻）　色・外　暗黄褐色　内　赤褐色　使・内面一部煤付着　残・口縁部⅛　胴部½　底部½　備・精
埦	27		胎・白色微石　黒色微石少　0.1～0.2褐鉄粒少　成・不明　整・口縁部内外面ヨコナデ　他は剝離著しく不明　焼・普　色・赤褐色　残・⅓
埦	28		胎・砂粒多　0.1褐鉄粒極少　成・不明　整・外面　胴部↔ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部↔ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・赤褐色　残・¼
埦	29		胎・白色粒子少　成・不明　整・外面　底部ヘラケズリ後ナデ（光沢有）　胴部ヘラケズリ後ナデ（光沢有）　内面　底部及び胴部ナデ後暗文を付す　焼・良　色・赤褐色　使・外面煤付着　残・胴部下半底部
坩	30		胎・黒色粒子多　成・胴部は口縁部との接合部分で分離　整・内外面ヨコナデ　焼・良　色・橙褐色　残・口縁部⅓
坩	31		胎・白色粒子多　黒色微石少　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部器面荒れ不明　口縁部ヘラミガキ（痕跡のみ認められる）　口縁部上端ヨコナデ　内面　胴部指頭による調整（指頭圧痕有）　口縁部↔ヘラミガキ　焼・普　色・外　赤褐色　内　口縁部赤褐色　胴部黒褐色　残・口縁部⅕
坩	32	口径　12.0	胎・黒色粒子多　0.1褐鉄粒少　成・胴部と口縁部接合か？　整・外面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部指頭による調整（指頭圧痕有）　頸部及び口縁部ヨコナデ　焼・普　色・外　橙褐色　内　赤褐色　残・胴部上半½　口縁部¾
坩	33		胎・黒色粒子多　0.1褐鉄粒極少　成・粘土紐積上げ　口縁部は胴部との接合部分で分離　整・外面　↔ヘラミガキ　内面　ナデ　焼・良外面黒斑有　色・外　橙褐色　内　赤褐色　残・胴部上半½
坩	34		胎・砂粒多　黒色粒子少　0.1～0.3褐鉄粒少　成・粘土帯の積上げ　口縁部は胴部との接合部分で分離　整・外面　底部ヘラケズリ　胴部下半↔↕ヘラケズリ　上半↔ヘラケズリ後ナデ　上端↓細かいヘラケズリ　内面　底部ヘラオサエ　焼・良　色・橙褐色　残・胴部　（石橋）

１６号住居址

遺　構（第２４図）

３．３×４．１ｍの長方形を呈する小形の住居址である。壁高は２５～３５㎝で壁溝は存在しない。床面はロームをそのまま利用し、平坦かつ軟弱である。柱穴は東北壁中央部に寄って一箇所確認されたのみで深さ３８㎝である。貯蔵穴、カマドは存在しない。

遺物は少なく大半が覆土出土であるが比較的下位にあった。南西壁に接して坩、ほぼ中央北寄りに埦、更に北寄りに甕、高坏破片がみられた程度である。　（大束）



１６号住居址土層　　L＝62.6M

1　黒褐色土　ローム粒子を含む

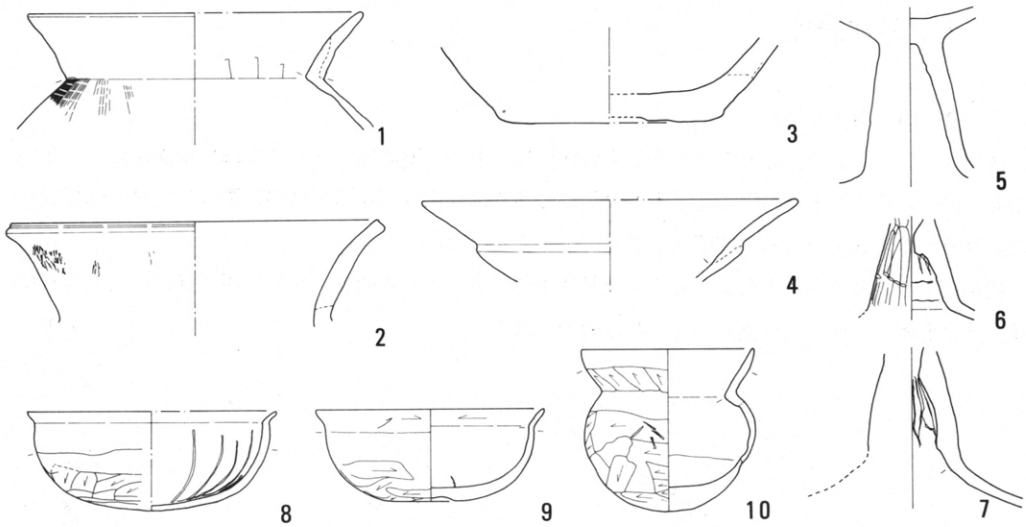
2　褐色土　ソフトローム状

3　褐色土　ロームブロックを含む

4　褐色土　黒色土を含む

5　ローム

第２４図　　二本松遺跡１６号住居址



第２５図　　二本松遺跡１６号住居址出土遺物

出土遺物（第２５図）

器種	番号	法量（cm）	特　　徴
甕	1		胎・微石極少　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部ハケ調整後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ？後ナデ　口縁部ヨコナデ　ヘラオサエ　焼・良　色・赤褐色　使・外面煤付着　残・口縁部¼　胴部一部
甕	2		胎・石英　0.5小石少　0.1～0.5褐鉄粒多　成・胴部と口縁部接合　整・外面　口縁部ヨコナデ　爪跡？　内面　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・橙褐色　使・内面炭化物付着　一部剝離　残・口縁部一部
甕	3		胎・石英　0.1～0.3砂粒多　0.1～0.4褐鉄粒　成・底部と胴部接合　整・外面　風化摩滅不明瞭　内面　ナデ　焼・良　色・橙褐色　内面底部黒ずむ　残・底部½　胴部一部
高坏	4		胎・白色粒子少　褐鉄粒子少　成・坏縁部下半と上半接合（接合痕明瞭）　整・内外面坏縁部ヨコナデ　焼・普　色・橙褐色　使・風化摩滅　残・坏縁部¼
高坏	5		胎・0.1～0.2砂粒少　0.1褐鉄粒少　成・裾部と脚部接合　脚部と坏底部接合　整・外面　風化摩滅不明瞭　内面　裾部ヨコナデ脚部ヘラケズリ　焼・良　色・橙褐色　使・内外面煤付着　残・脚部　坏底部　裾部一部
高坏	6		胎・白色粒子少　成・裾部と脚部接合　整・外面　脚部ヘラミガキ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ナデ　焼・良　色・橙褐色　出・床直　残・裾部一部　脚部
高坏	7		胎・石英少　成・裾部と脚部接合　整・外面　↕ヘラミガキ　内面　裾部ヨコナデ　脚部下半ヘラケズリ　焼・良　色・赤褐色　使・外面脚部煤付

			着　残・裾部一部　脚部
埦	8		胎・微石多　0.3褐鉄粒子少　成・胴部と口縁部接合　整・外面　底部ヘラケズリ　胴部下半↓↙ヘラケズリ　中央ナデ　上半及口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ後暗文　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・赤褐色　使・外面胴部一部煤付着　残・¼
埦	9	口径　17.1 器高　4.9	胎・微石少　0.1～0.5褐鉄粒子少　成・胴部と口縁部接合　胴部弧状ヘラ痕　底部上り底　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部→ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部←ヨコナデ　焼・良　色・橙褐色　使・ヒビ割れ後内外面黒斑　残・ほぼ完形
坩	10	口径　9.1 器高　8.6	胎・微石　0.1～0.2白色粒子少　成・胴部下半上半接合　胴部と口縁部接合　底部及胴部弧状ヘラ　口縁部二段積？　整・外面　底部→ヘラケズリ　胴部→↙ヘラケズリ後ナデ　胴部上半及口縁部下半↑ハケ調整後ナデ　条数不明瞭　口縁部上半ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　外面胴部黒斑有　色・赤褐色　残・ほぼ完形　（大束）

１７号住居址

遺　構（第２６・２７図・図版４・図版５）

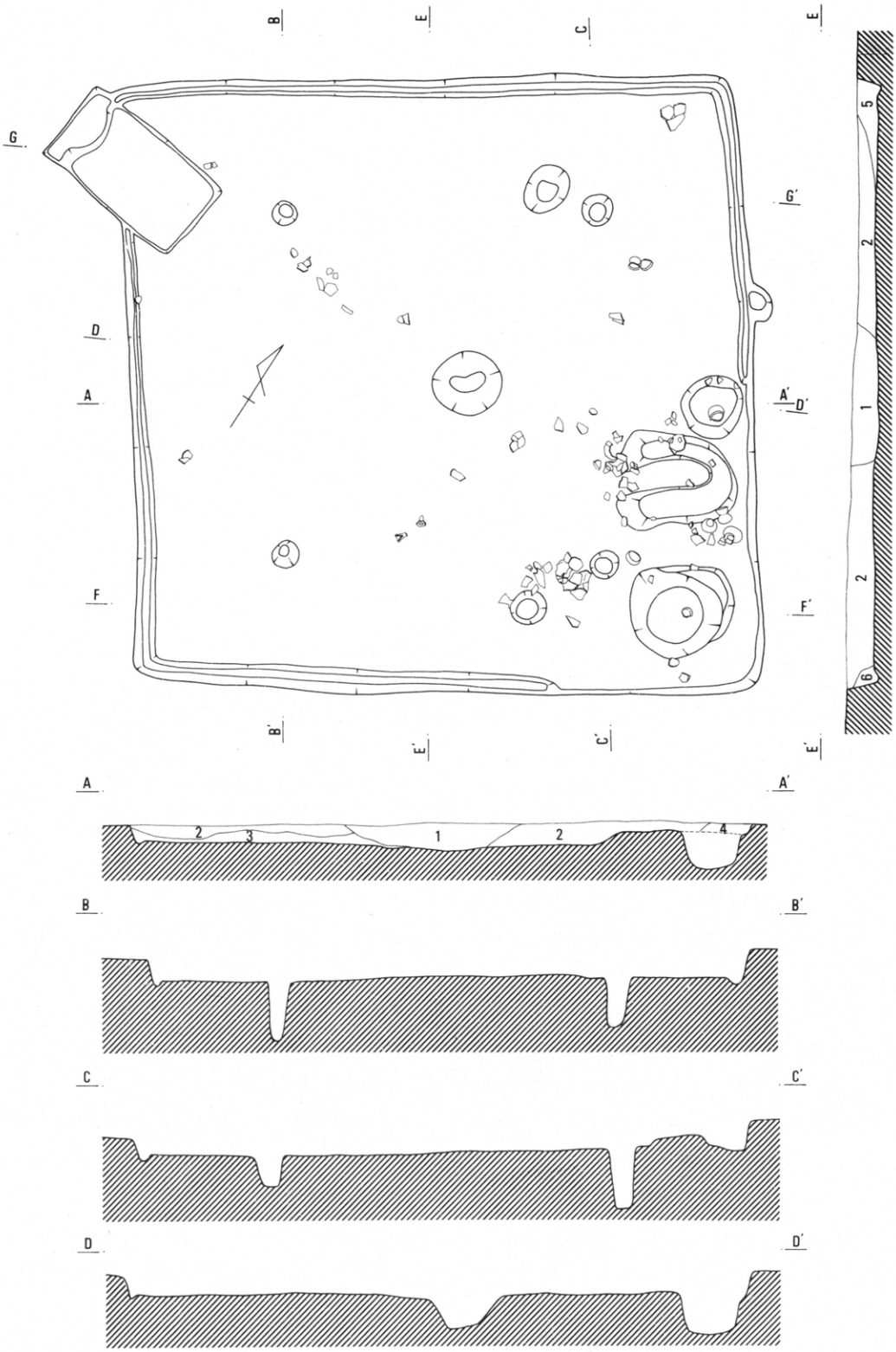
５．６×５．７ｍの正方形に近い平面形態をもつ住居址である。壁高１５～２０㎝と浅く、壁はわずかな傾斜をもってたちあがる。カマドと貯蔵穴の周囲を除き幅１５～２０㎝の壁溝がめぐる。床面はローム面を、そのまま床として平坦で、かつ軟弱である。柱穴は径２０～３０㎝、深さは３０～５５㎝のものが４箇所確認されたが対角線から外れて位置する。貯蔵穴は東コーナー、カマドに向って右側に位置し径８５×９５㎝の不整円形、深さは５５㎝、底面は平坦で、ほぼ円形を示している。

カマドは東北壁の南寄りに位置するが壁体から１０㎝離れて存在する。

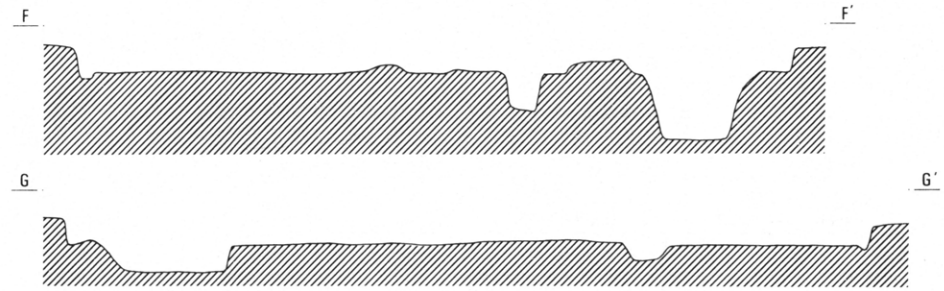
床を１０～１５㎝掘り下げ、焼土を含む黄褐色土、暗褐色土で充たしつつ高め、焼土を含んだ黒色土で袖を構築した馬蹄状の形態を示している。袖の高さは奥で１５㎝、支脚である高坏付近で１０㎝、袖先端で８㎝と減じ、支脚は坏縁部を欠いた高坏を正位に、焼土に埋もれている状態で検出された。壁高の残存は少ないが、微細な焼土をも含む部分は残して覆土を除去することによって検出されたカマドであり、袖やブリッヂが崩壊したとは認められず当初よりの形状のままであると考えられる。火床からは高坏のほか、甕底部が検出されている。カマド左手、壁に接して貯蔵穴状ピットが検出された。５５×６０㎝の円形で、深さ３０㎝、底面は必ずしも平坦ではない。カマドに接近しすぎ、同時期であるか否かは不明である。ピットの底より小型の甕が検出されている。

遺物はカマド周辺、貯蔵穴、東柱穴付近から多く検出されている。カマド焚口付近から甕、高坏、カマド右袖裾から坩２個体、坏、貯蔵穴底から坏、東柱穴付近から坏、甕などである。この他北柱穴の東から坩、埦などが検出されたが、いずれも床面直上である。

ピットは柱穴の他に、北柱穴、東柱穴に接して２ケ所、中央部に１ケ所検出されたが、中央部のピ



第２６図　　二本松遺跡１７号住居址

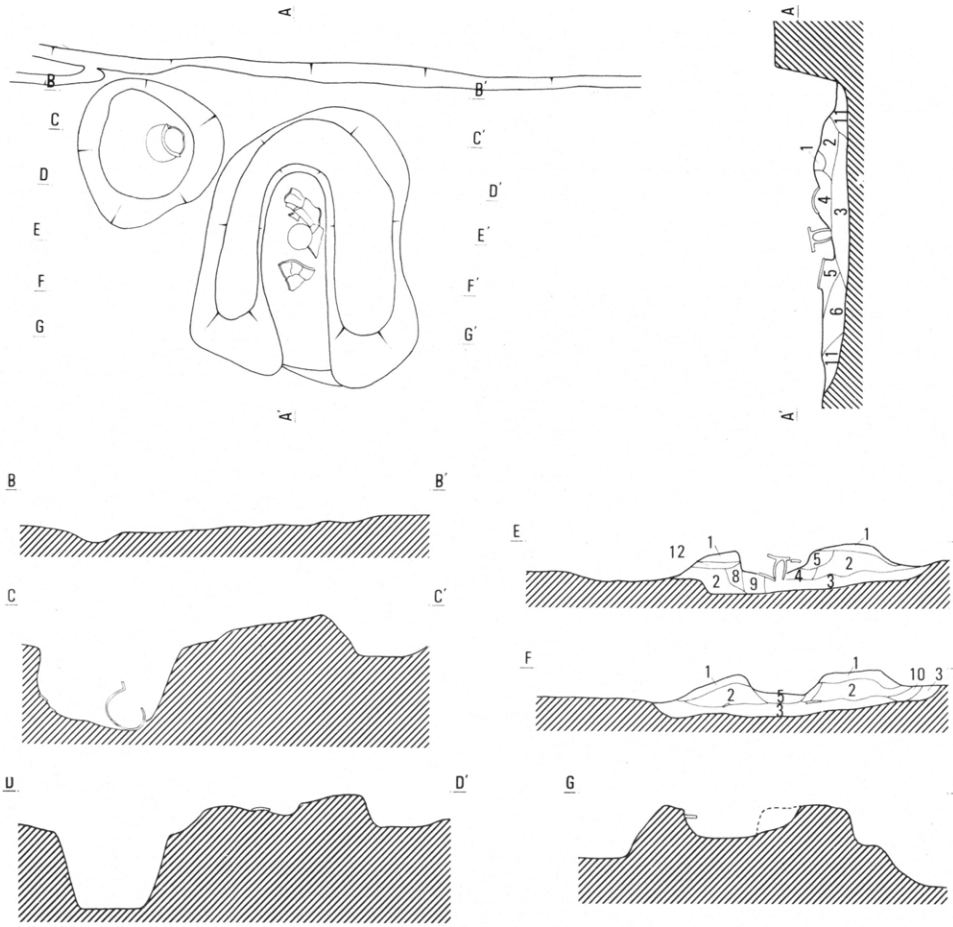


１７号住居址土層　　Ｌ＝62.6M

1　黒茶褐色土　ロームを含む
2　黒灰色土　ロームブロックとローム粒子を多量に含み、焼土を微量含む　黒色強い
3　暗褐色土　ロームを多量に含む
4　黒褐色土　ロームを多量に含む
5　暗茶褐色土
6　暗灰褐色土　ローム粒子を含む

１７号住居址カマド土層　　Ｌ＝62.3M

1　黒褐色土　かたくしまる
2　黒色土　焼土を多量含む
3　黄褐色土　黒色土を少量含む
4　黒褐色土　焼土を含む
5　焼土　褐色土を含む（混入する？）
6　暗褐色土　焼土を微量含む
7　黒色土　焼土を多量に含む
8　暗褐色土　ロームブロックを含む
9　暗褐色土　焼土を含む
10　暗褐色土　軟らかくしまり悪い
11　ローム
12　暗褐色土　焼土を含む



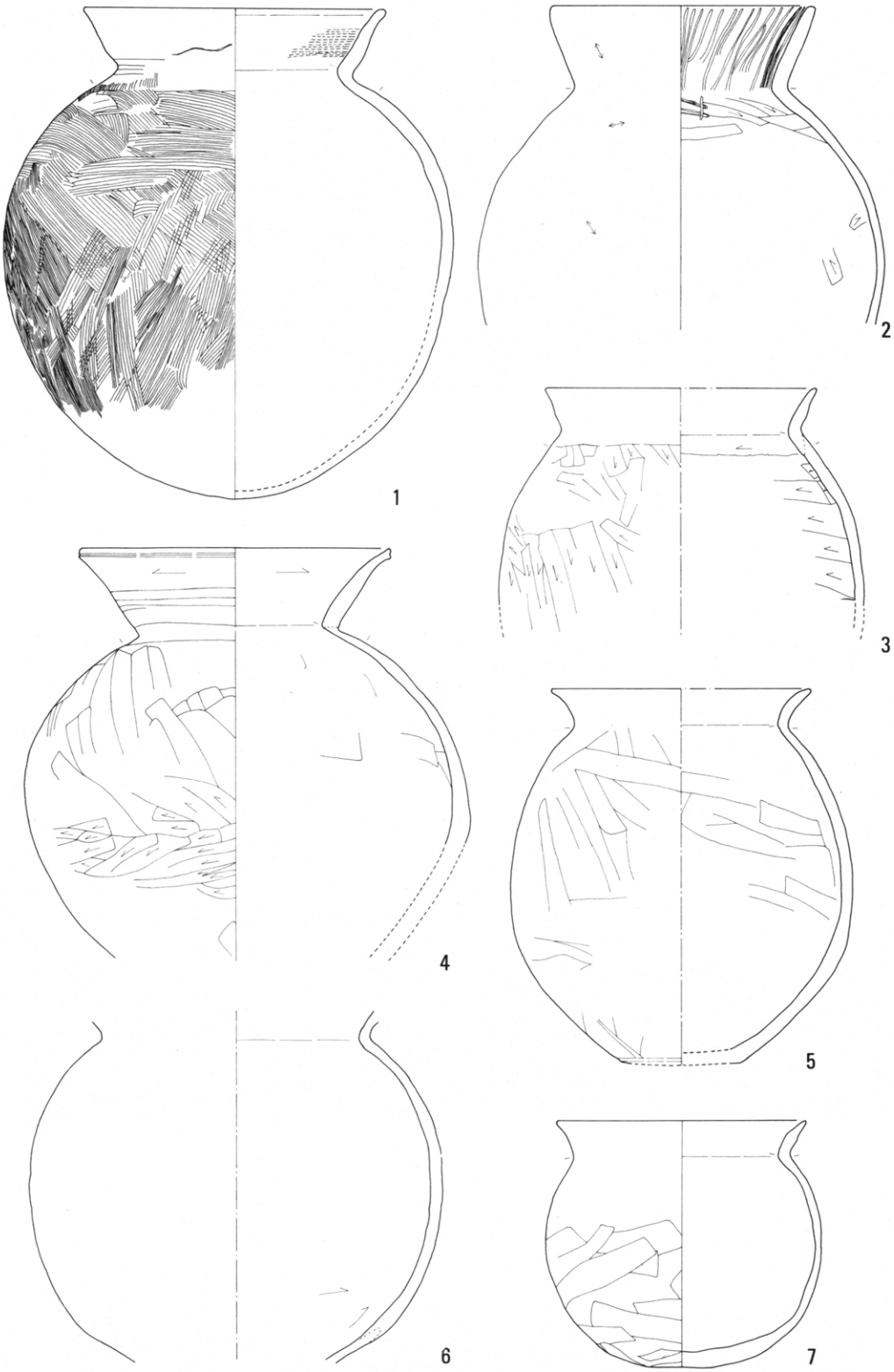
第２７図　　二本松遺跡１７号住居址・カマド

ットは断面実測図によって埋没後のもので、他に西コーナーを近代と考えられる長方形ピットが切っている。いずれも遺物は検出されていない。

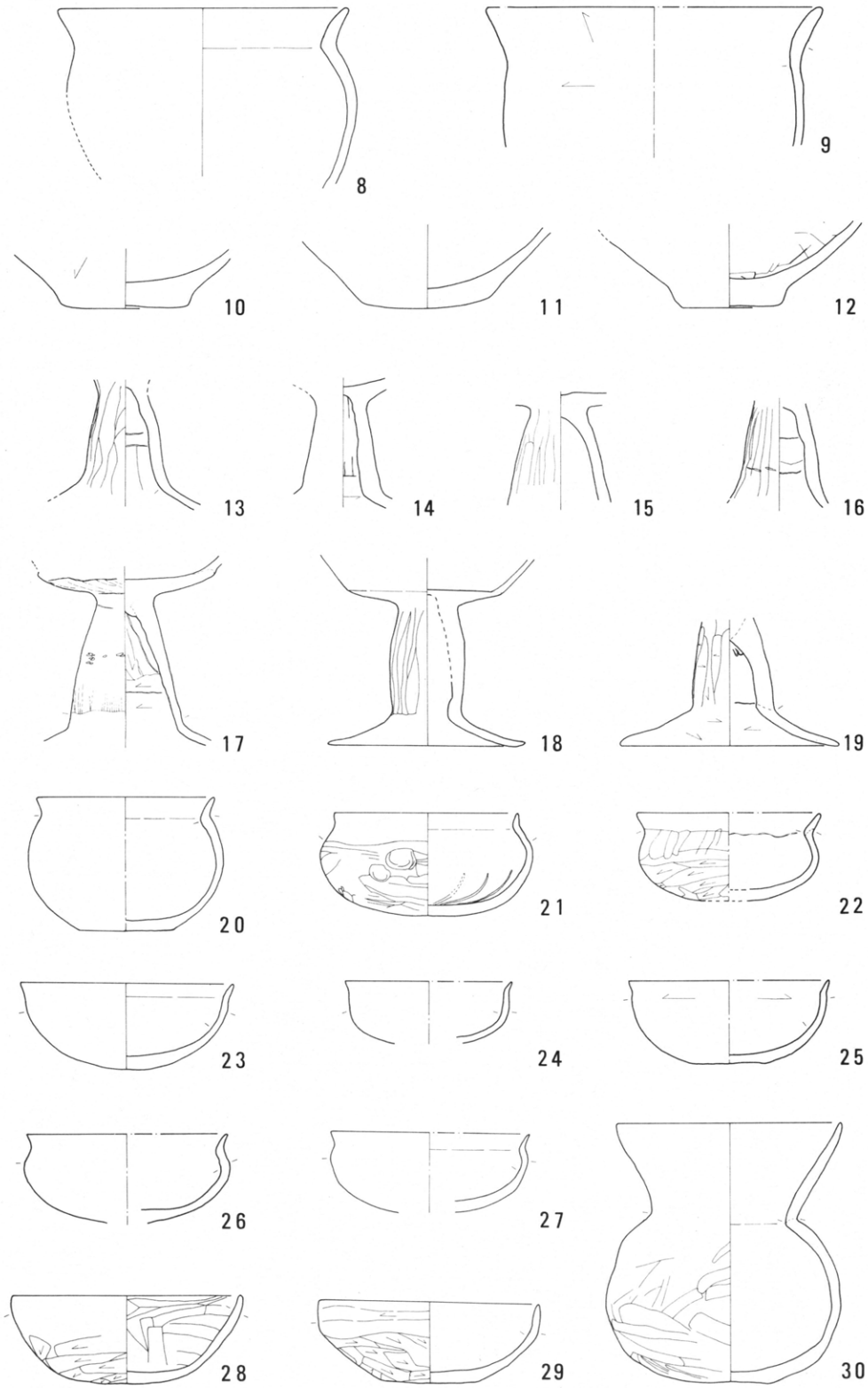
貯蔵穴南に高さ１０㎝の焼土ブロックが確認され、土器片が検出されたが炭化物を含む黒色土に乗っていた。本住居址の埋没は自然的であると推せられる。（大束）

出土遺物（第２８・２９・３０図）

器種	番号	法量（cm）	特　　徴
甕	1	口径　18.2 器高　29.5	胎・0.5～1.2小石多　成・胴部と口縁部接合　胴部粘土帯積上げ　整・外面　胴部ハケ調整　口縁部ヨコナデ　内面　胴部風化剝離不明瞭　口縁部ハケ調整後ヨコナデ　焼・普　外面黒斑有　色・外　橙褐色　内　黄褐色　使・外面　口縁部一部剝離　内面　胴部　口縁部一部剝離　口唇部摩滅　出・床直　残・胴部¾　口縁部¾
甕	2	口径　15.4	胎・0.1石英粒少　0.2～0.4褐鉄粒多　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部↘ヘラミガキ　胴部上半↔ヘラミガキ　口縁部ヨコナデ後↘ヘラミガキ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ後暗文　焼・良　色・赤褐色　使・外面煤付着　内面剝離著しい　出・床直　残・胴部⅔　口縁部　備・精
甕	3		胎・0.2～0.4小石多　0.3褐鉄粒少　成・胴部と口縁部接合（接合痕明瞭）　胴部粘土帯積上げ　整・外面　胴部↓↑ヘラケズリ後ナデ　口縁部ミズビキ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ミズビキ　焼・普　色・赤褐色　外面一部黒ずむ　残・胴部一部　口縁部¼
甕	4	口径　18.6	胎・白色粒子少　0.2～0.4褐鉄粒少　成・胴部下半と上半　胴部と口縁部接合　胴部粘土帯積上げ　整・外面　胴部下半←↗ヘラケズリ後ナデ　中央ヘラケズリ　上半ヘラケズリ後ナデ　口縁部←ミズビキ　内面　胴部ナデ　口縁部→ミズビキ　焼・普　外面一部黒斑有　色・赤褐色　使・外面煤付着　出・カマド裾　床直　残・胴部½　口縁部
甕	5		胎・0.1～0.3褐鉄粒少　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　外面黒斑有　色・赤褐色　外面黒ずむ　使・外面煤付着　出・胴部一部カマド内　残・⅓
甕	6		胎・0.1～0.2砂粒少　0.1～0.3褐鉄粒多　成・胴部下半と上半　胴部と口縁部接合　胴部粘土帯積上げ　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ（光沢有）　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　外面黒斑有　色・外　赤褐色　内　橙褐色　接・北側壁中央　北側壁北隅　残・¼
甕	7	口径　14.9 器高　14.8	胎・白色粒子　石英　0.1～0.4褐鉄粒多　成・底部はヘラケズリ　胴部下半と上半及胴部と口縁部接合　整・外面　胴部下半ヘラケズリ　上半ナ

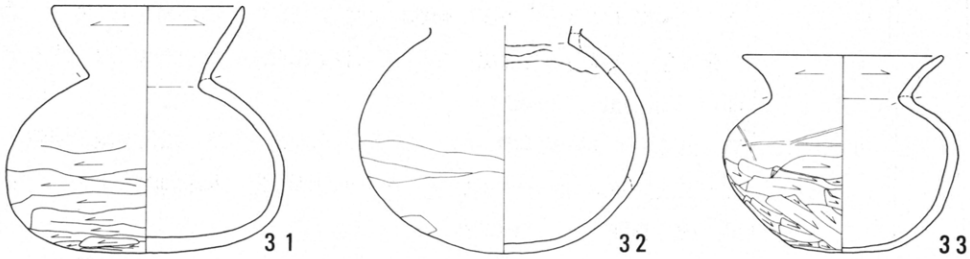


第２８図　　二本松遺跡１７号住居址出土遺物（１）



第２９図　　二本松遺跡１７号住居址出土遺物（２）

			デ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・赤褐色　外面黒ずむ　使・外面煤付着　出・貯蔵穴内　残・胴部（一部欠損）　口縁部½
甕	8	口径　17.2	胎・0.2～0.4褐鉄粒多　成・胴部と口縁部接合　整・風化摩滅不明瞭　焼・二次的熱不明　色・赤褐色　使・外面煤付着　内面剝離　出・カマド内　残・胴部一部　口縁部⅔
甕	9		胎・石英　0.1～0.2砂粒多　褐鉄粒子少　成・胴部と口縁部接合　整・外面胴部←ヘラケズリ　口縁部↑ヘラケズリ後ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　焼・良　外面黒斑有　色・赤褐色　使・外面煤付着　残・胴部一部　口縁部⅓
甕	10		胎・石英　0.2～0.4褐鉄粒多　成・底部と胴部接合　整・外面　底部ヘラケズリ　胴部↓ヘラケズリ　内面　ナデ　焼・良　色・外　赤褐色　内・橙褐色　使・外面煤付着　出・カマド内　残・底部　胴部一部
甕	11		胎・0.1～0.3砂粒多　0.1～0.3褐鉄粒少　成・底部と胴部接合　整・外面　ヘラナデ　内面　ナデ　焼・普　色・橙褐色　使・外面　煤付着　一部剝離　出・床直　残・底部　胴部一部
甕	12		胎・0.3～0.6小石　0.1～0.5褐鉄粒少　成・底部と胴部接合か？　整・外面　ヘラケズリ後ナデ　内面　1.5幅ヘラナデ　焼・良　色・外　灰褐色　内　黒灰色　出・貯蔵穴内　カマド裾床直　接・カマド北貯蔵穴　カマド西裾　残・底部　胴部一部
高坏	13		胎・微石少　成・裾部と脚部接合　脚部粘土紐巻上げ　整・外面　裾部及脚部ヘラケズリ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ヘラケズリ後ナデ　焼・良　色・外　橙褐色　内　赤褐色　使・外面煤付着　出・床直　残・裾部一部　脚部
高坏	14		胎・白色微石　褐鉄粒子少　成・裾部と脚部　脚部と坏底部接合　整・外面　風化摩滅不明瞭　内面　裾部ヨコナデ　脚部ヘラケズリ　焼・良　色・橙褐色　使・風化摩滅　ザラつく　出・床直　残・裾部一部　脚部　坏底部一部
高坏	15		胎・白色微石　0.2～0.5小石　0.2～0.4褐鉄粒少　成・脚部と坏底部接合　整・外面　脚部ヘラミガキ　内面　脚部ナデ　坏底部ナデ　焼・普　色・赤褐色　脚部内面黒ずむ　出・カマド裾　床直　残・脚部上半　坏底部一部
高坏	16		胎・白色微石　成・脚部粘土紐巻上げ　整・外面　↕ヘラケズリ　内面　ナデ　焼・良　色・橙褐色　出・貯蔵穴内　残・脚部
高坏	17		胎・微石少　成・裾部と脚部　脚部と坏底部　坏底部と坏縁部接合　坏縁部坏底部との接合部分で分離　整・外面　裾部ヨコナデ　脚部及坏底部ハ



第３０図　二本松遺跡１７号住居址出土遺物（３）

			ケ調整後ナデ　内面　裾部ヨコナデ　脚部←ヘラケズリ　坏底部ナデ　焼・良　色・赤褐色　脚部内面黒ずむ　出・床直　残・裾部一部　脚部　坏底部　坏縁部一部
高坏	18		胎・白色微石　0.1～0.2砂粒　0.2～0.4褐鉄粒多　成・裾部と脚部（接合痕明瞭）　脚部と坏底部　坏底部と坏縁部接合　坏縁部が坏底部との接合部分で分離　整・外面　脚部↕ヘラケズリ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ナデ　坏底部二次的熱不明瞭　坏縁部ナデ　焼・良　色・赤褐色　使・二次的熱受ける　出・カマド内　残・裾部½　脚部　坏底部　坏縁部一部　備・カマド内にて支脚として使用
高坏	19		胎・微石多　成・裾部下半と上半　裾部と脚部接合　裾部調整の際余った粘土が裾部内側に折り返り稜を成す　整・外面　裾部→ヨコナデ　脚部ヘラケズリ　内面　裾部←ヨコナデ　脚部↕↔ヘラケズリ後ナデ　焼・普　裾部外面黒斑有　色・外　橙褐色　内　赤褐色　使・表面ザラつく　出・カマド内　カマド裾床直　カマド北貯蔵穴内　接・カマド内　カマド裾　カマド北貯蔵穴内　残・裾部（一部欠損）　脚部
埦	20		胎・微石少　成・底部と胴部接合か？　胴部と口縁部接合　整・外面　風化剝離　内面　胴部同心円状ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・赤褐色　胴部内面上半及口縁部黒ずむ　使・二次的熱受ける？　外面剝離煤付着著しい　出・床直　残・⅔
埦	21	口径　11.0 器高　6.1	胎・微石少　0.1～0.3褐鉄粒多　成・不明　整・外面　底部及胴部粗いヘラミガキ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部同心円状ナデ後暗文　口縁部ヨコナデ　焼・良　外面黒斑有　色・外　橙褐色　内　赤褐色　使・外面剝離煤付着　出・カマド北貯蔵穴内　カマド北貯蔵穴上（床直）　接・カマド北貯蔵穴上　貯蔵穴内　残・胴部（一部欠損）　口縁部½　備・精
埦	22		胎・0.1～0.3褐鉄粒多　成・胴部と口縁部接合（内面接合痕明瞭）　整・外面　胴部下半←ヘラケズリ　上半ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部下半ヘラケズリ　上半ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・良　色・

			橙褐色　残・¼
埦	23	口径　12.6 器高　5.1	胎・白色微石　0.1～0.4褐鉄粒多　成・不明　整・外面　胴部風化不明瞭　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・外　赤褐色　内　橙褐色　使・内外面剝離著しい　残・胴部（上半一部欠損）　口縁部½　備・精
埦	24		胎・白色粒子　成・不明　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・赤褐色　残・胴部一部　口縁部一部
埦	25		胎・0.1～0.2褐鉄粒少　成・底部はヘラケズリ　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部↔ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　胴部上半及口縁部ヨコナデ　焼・普　色・赤褐色　出・カマド内　残・⅓
埦	26		胎・微石多　0.2褐鉄粒少　成・不明　整・外面胴部下半ヘラケズリ　上半ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・普　色・橙褐色　残・¼
埦	27		胎・褐鉄粒子少　成・胴部と口縁部接合　整・外面胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　内面胴部下半ナデ後ヘラミガキ？　上半及口縁部ヨコナデ　焼・良　色・橙褐色　出・カマド裾　残・⅓
坏	28	口径　13.6 器高　5.2	胎・0.1～0.2砂粒多　成・底部下半と上半接合か？　整・外面　底部及胴部下半←ヘラケズリ　上半及口縁部ヨコナデ　内面　底部ナデ　胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　炭素吸着　焼・良　色・外　橙褐色　内　黒色　残・ほぼ完形
坏	29	口径　13.1 器高　5.8	胎・微石　0.1～0.3褐鉄粒多　成・底部と口縁部接合か？　整・外面　底部→ヘラケズリ後ナデ　口縁部←ヨコナデ　内面　底部ナデ　口縁部→ヨコナデ　焼・普　色・外　橙褐色　内　赤褐色　使・内面煤付着　出・カマド裾　床直　残・ほぼ完形
坩	30	口径　13.5 器高　15.3	胎・0.2～0.6小石　0.1～0.2褐鉄粒多　成・底部はヘラケズリ　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部ヘラケズリ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・悪　外面黒斑有　色・黄褐色　使・外面口唇部摩滅　出・床直　残・ほぼ完形
坩	31	口径　10.1 器高　13.0	胎・石英　成・胴部と口縁部接合　整・外面　胴部下半←ヘラケズリ　上半←ヘラケズリ後ナデ　口縁部←ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部→ヨコナデ　焼・普　色・赤褐色　出・カマド裾床直　残・胴部　口縁部⅔　備・精
坩	32		胎・石英　0.1～0.2砂粒　0.1～0.5褐鉄粒多　整・外面　胴部↔ヘラケズリ後ナデ　内面　胴部ナデ　焼・悪　色・外　赤褐色　内　橙褐色　内面黒ずむ　使・二次的熱受けザラつく　出・カマド裾　残・胴部¾

坩	33	口径　10.6 器高　10.5	胎・石英　0.3～0.5小石多　0.1～0.2褐鉄粒少　成・底部はヘラケズリ　胴部下半と上半　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部下半ヘラケズリ　上半ナデ　口縁部←ヨコナデ　内面　底部ヘラオサエ有　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部→ヨコナデ　焼・良　外面黒斑有　色・外　黄褐色　内　赤褐色　使・内面炭化物付着　残・ほぼ完形　（大束）

１８号住居址

遺　構（第３１図・図版６）

５．３×５．４ｍのほぼ正方形を呈する平面プランを示すがこの住居址はすでに盗掘に会っており平面プランはかろうじて確認できたものの床面、壁及びカマドは破壊されて遺物が２点検出された程度である。床面は住居址断面図の凸部分と考えられ、そのレベルは遺構確認面とほとんど変わらない。

柱穴は４ケ所に確認され、対角線上に位置し、深さは推定床面から７０～８０cmである。貯蔵穴は、東南コーナーに位置し径７０cm、深さ６０cm、底面平坦である。ピットは他に４ケ所認められる。

カマドは東壁ほぼ中央から４０cm離れた位置に円形に焼土が認められた部分にあったと推定され、焼土部分は火床と考えられる。この付近から出土した破片は整理の段階で甕に接合された。（石橋）

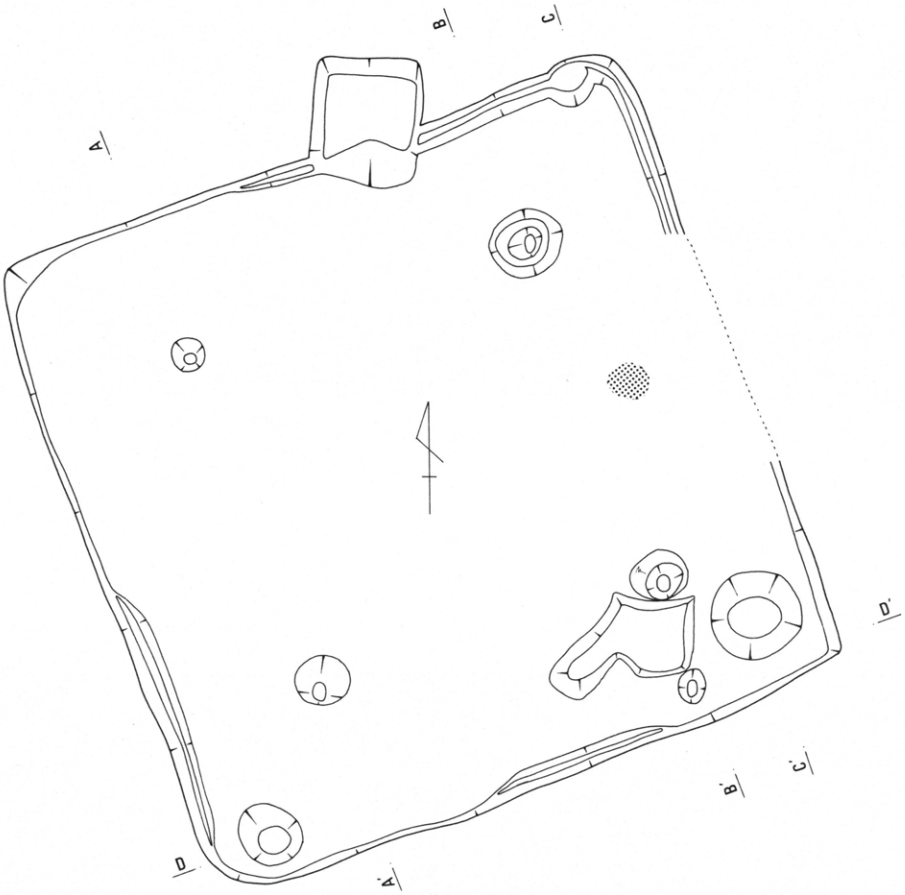
出土遺物（第３２図）

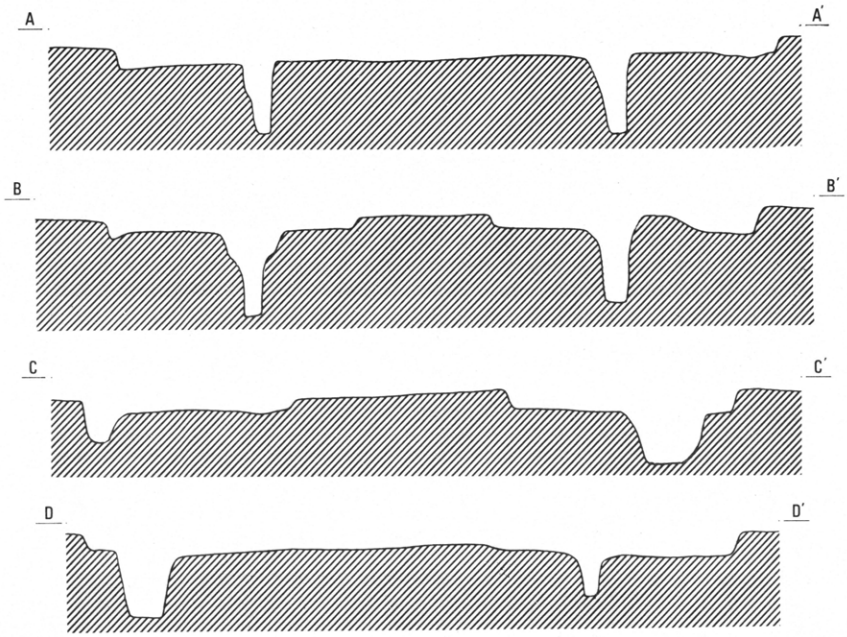
器種	番号	法量（cm）	特　　徴
甕	1		胎・微石多　0.2～0.3小石　0.2～0.3褐鉄粒多　成・底部上り底か？　胴部下半と上半　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部←ヘラケズリ　口縁部←ヨコナデ　内面　胴部下半ヘラケズリ後↗中央ヘラケズリ　上下ヘラケズリ後ナデ　口縁部→ヨコナデ　ヘラオサエ有　焼・悪　色・外　橙褐色　内　赤褐色　出・カマド　残・½
甕	2		胎・微石　成・底部上り底か？　後ヘラケズリ　整・外面ヘラケズリ後ナデ　内面ヘラケズリ　焼・良　色・外　底部橙褐色　胴部赤褐色　内　赤褐色　出・カマド　残・底部　胴部一部　（大束）

１９号址

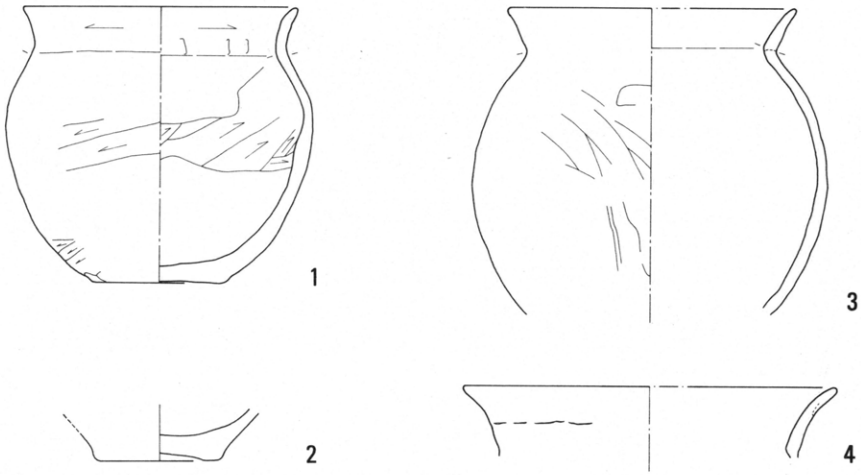
遺　構（第３３図・図版６）

耕土除去後の遺構確認時に遺物が検出されたため、何らかの遺構が存在すると考えて調査を進めたが、壁、壁溝、柱穴など何ら発見することができなかったため住居址の概念から除外して１９号址とした。付近は黒色の粘土質土に覆われていて、遺物はロームから若干離れて甕、高坏などが検出されている。（石橋）





第３１図　　二本松遺跡１８号住居址



第３２図　　二本松遺跡１８号住居址・１９号址出土遺物

出土遺物（第３２図）

器種	番号	法量（cm）	特　　徴
甕	3		胎・石英　0.1～0.5小石　0.2～0.4褐鉄粒多　成・胴部粘土帯積上げ　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・悪　色・外　赤褐色　内　橙褐色及黄褐色　残・⅔
甕	4		胎・石英　0.2～0.3褐鉄粒多　成・口縁部二段積　胴部との接合部分で分離　整・内外面ヨコナデ　焼・普　色・外　赤褐色　内　橙褐色　残・口縁部⅓　（大束）

土坑（第３４・３５・３６図）

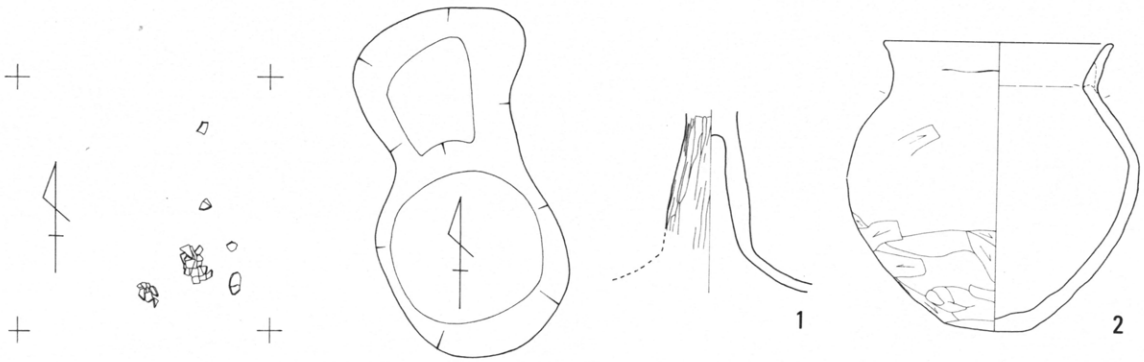
今回の調査で検出された土坑は３９基である。土坑は、ほとんどが発掘調査区中央部に集中して検出された。遺物を伴った土坑は、８号、14号土坑の２基であり、８号土坑からは高坏脚部（第３３図１）、１４号土坑からは甕（第３３図２）が出土している。１４号土坑は、土層中に天明３年（１７８３年）の浅間山噴出火山灰が含まれ、または縞状に堆積（矢印部分）しているため、近世の土坑と考えられる。甕は破片の状態で出土したため、覆土とともに埋没したものであろう。

他に時期のほぼ判明する土坑は、２、６、１６、１７、１８、２１、２２、２６、２８、３０、３１、３２号土坑及び１３、１５、３７号土坑である。２、６、１６、１７、１８、２１、２２、２６、２８、３０、３１、３２号土坑は、覆土中に１４号土坑と同時期の火山灰が含まれていることから、近世の所産であり、１３号土坑からはコンクリートスレート、１５号土坑からはコンクリート、３７号土坑からはビニール袋が出土しているため現在のものである。他の土坑も、前記の土坑と同様の時期と考えてもさしつかえないであろう。

土坑の性格は、ほとんどが不明である。

尚、土層は、全土坑を通じて、質的に大差ないため、土層番号は通し番号とした。一土坑中の同一番号は、色調が同じで、粘性等が若干異なることを示す。土坑の計数値及び土層観察は以下の通りである。（単位m）　（石橋）

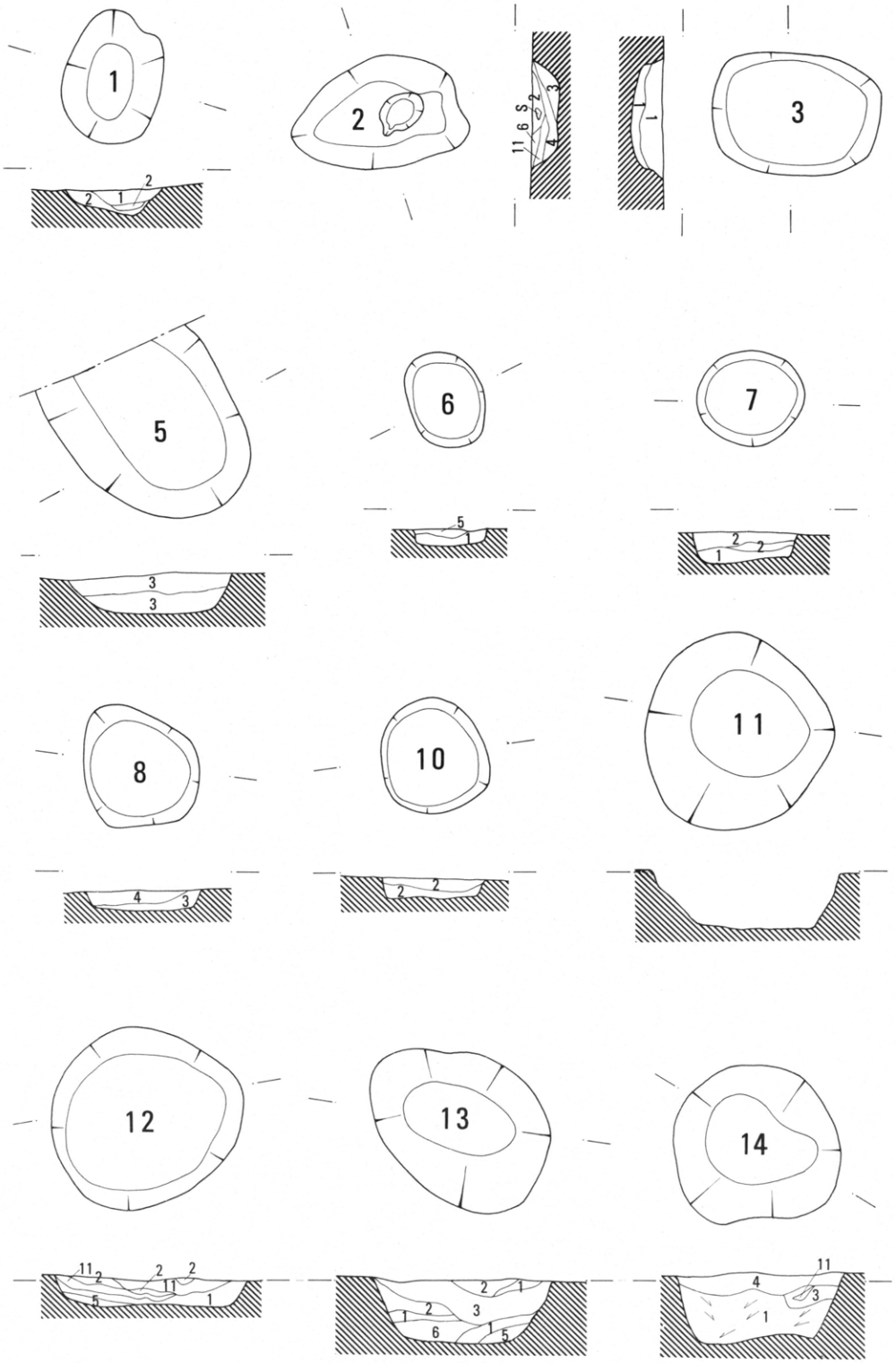
番号	長径	短径	深さ	備　考	番号	長径	短径	深さ	備　考
1	1.18	0.87	0.23		21	1.6	1.33	0.3	近世
2	1.5	1.0	0.23	近世(天明3後)	22	1.64	1.12	0.29	近世
3	1.5	1.08	0.29		23	2.06	0.99	0.28	
4	5.83	0.83	0.34	第4図参照	25	2.65	1.65	0.37	
5		1.52	0.36		26	1.65	1.45	0.15	近世？
6	0.9	0.67	0.15	近世？	27	1.0	0.81	0.11	
7	0.95	0.85	0.28		28	1.48	1.22	0.19	近世？
8	1.22	1.03	0.18	高坏	29	1.52	1.18	0.15	
10	1.02	0.94	0.18		30	2.24		0.31	近世？
11	1.7	1.63	0.5		31	1.31	1.21	0.3	近世？
12	1.72	1.57	0.25		32	1.91	0.8	0.21	近世？
13	1.72	1.28	0.56	現代	33		1.46	0.15	
14	1.52	1.52	0.6	近世　甕	34	1.11	1.0	(0.12)	
15	1.57	1.13	0.13	現代	35	1.57	1.39	0.26	
16	1.12	1.08	0.32	近世(天明3後)	36	1.3	0.65	0.25	
17	1.35	1.26	0.43	近世(　〃　)	37	3.05	1.13	0.35	現代
18	2.25	1.63	0.35	近世(　〃　)	38	2.47	1.43	0.25	
19	1.42	1.10	0.38		39	2.0	1.14	0.45	
20	1.63	1.15	0.49						



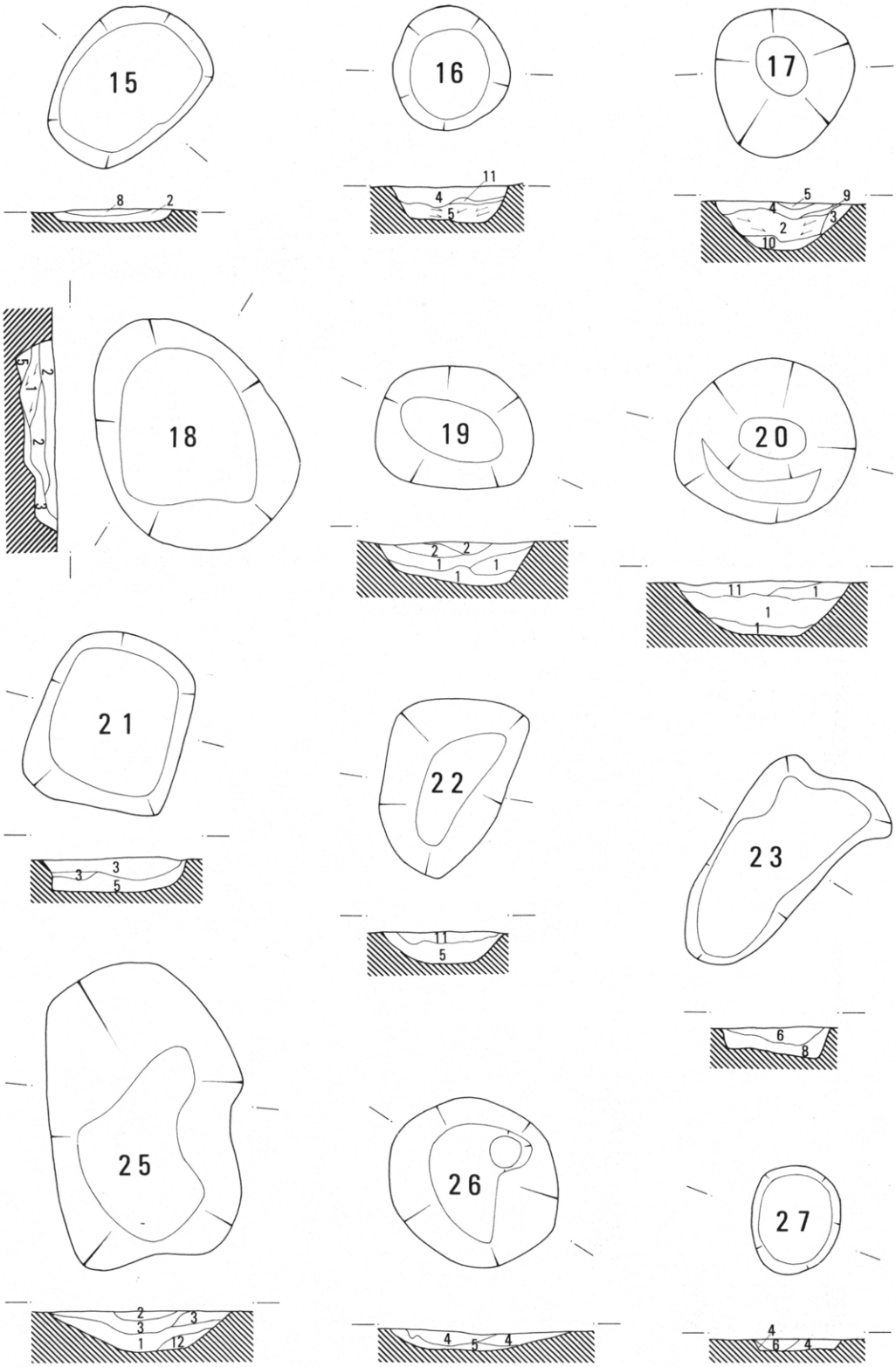
第33図　二本松遺跡19号址・井戸・土坑出土遺物

土坑　土層

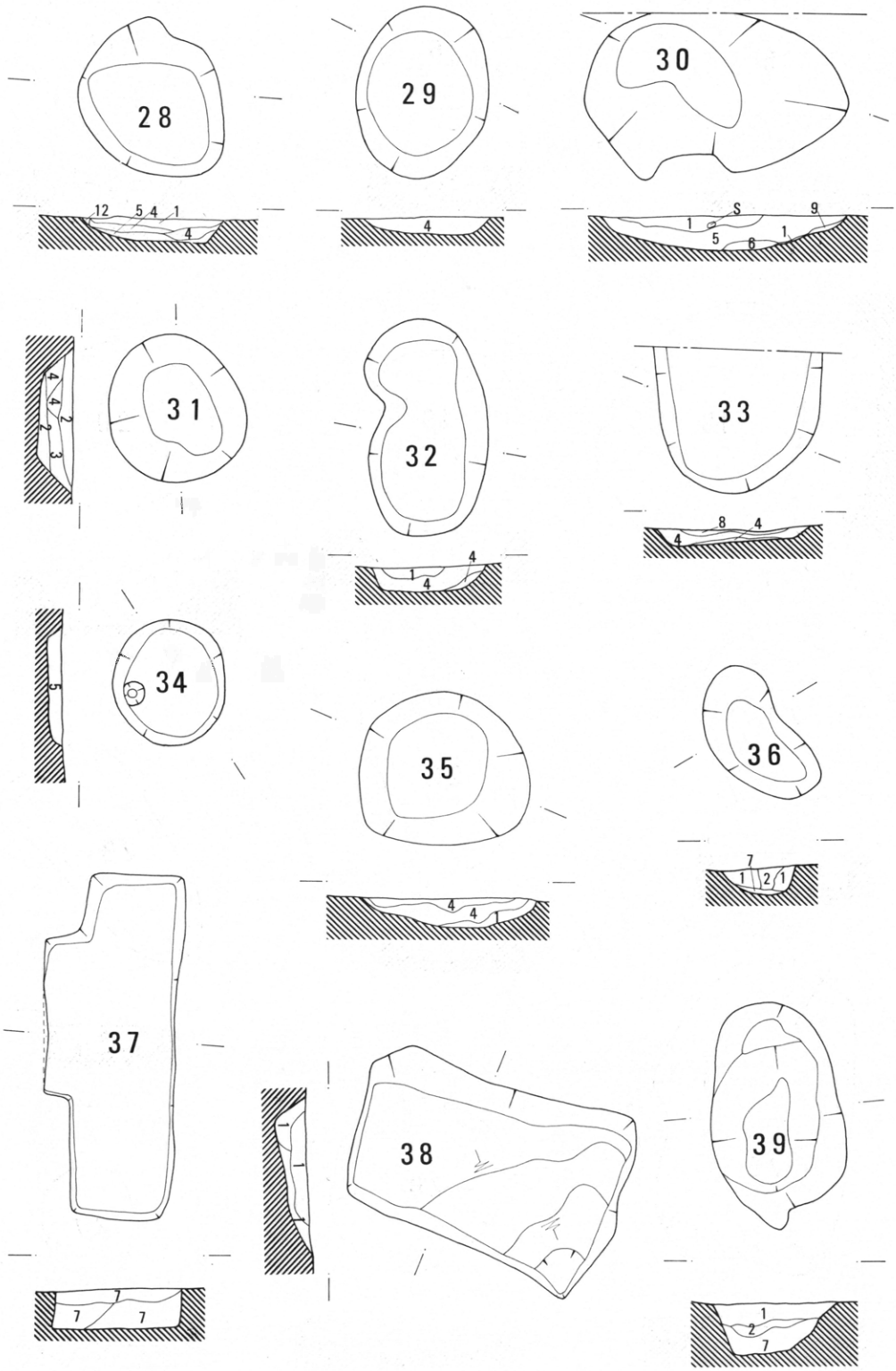
1　黒色土　　4　茶褐色土　　7　黄褐色土　　10　灰褐色土
2　暗褐色土　　5　暗茶褐色土　　8　淡褐色土　　11　火山灰
3　黒褐色土　　6　黒茶褐色土　　9　赤褐色土　　12　ローム



第３４図　　二本松遺跡土坑（１）



第３５図　　二本松遺跡土坑（２）



第３６図　　二本松遺跡土坑（３）

出土遺物（第３３図）

器種	番号	法量（cm）	特　　徴
高坏	1		胎・褐鉄粒子少　成・裾部と脚部接合　整・外面　裾部↕ヘラミガキ　脚部↕ヘラミガキ　内面　裾部ヨコナデ　脚部ヘラケズリ　焼・良　色・外　橙褐色　内　赤褐色　残・裾部一部　脚部　備・精
甕	2	口径　12.2 器高　15.3	胎・0.1～0.5小石　0.1～0.2褐鉄粒多　成・胴部下半と上半接合か？　胴部と口縁部接合　整・外面　胴部下半←↘ヘラケズリ後ナデ　口縁部ヨコナデ　内面　胴部ナデ　口縁部ヨコナデ　焼・悪　色・赤褐色　内面黒ずむ　使・口唇部摩滅　残・胴部¾　口縁部（一部欠損）　（大束）

井戸（第３３図）

井戸は１基検出され、１１号、１２号住居址間に位置する。平面形は、瓢形を呈し、南側が深く掘り込まれているが、ローム層が薄く、直ちに礫層に達するため、完掘し得なかった。

遺物は、覆土上層より防弾ガラスの破片が出土し、近年に掘削され、廃棄されたと考えられる。地主及び地域の人々の話によれば、第２次世界大戦中（昭和２０年頃）、仙台市出身者を中心に組織された「青葉隊」が、当地域を訓練用地として使用し、飲料用に掘削したとのことである。　（石橋）

３　小　　結

二本松遺跡の考察は、社具路、夏目両遺跡の調査の成果と総合検討し、第３分冊に掲載する予定であり、詳細な検討はそれに譲るとし、ここでは、発掘調査及び整理の段階における知見をまとめてみたい。

今回の調査によって検出された住居址は９軒であるが、既に調査・報告されている第１～８号住居址と時期的に大差なく、和泉期に限定され、１つの集落を形成していたものと把握される。既調査の住居址及び今回の調査における住居址も重複が認められず、和泉期に前後する時期の住居址が存在していないことなど、和泉期の集落としての特徴を持っている。

和泉期に限定された集落として、笠ケ谷戸遺跡、雌濠遺跡、西富田新田遺跡等が、市内に存在しているが、これらを合わせ、一地域における集落の変遷を、それの生産基盤としての農耕地と関連させ、考察していく必要が感じられる。

今回、検出された住居址は、調査区中央部分の黒色粘質土によって被覆された溝、及び近、現代の土壙群を境として南北の２群に分かれるようである。住居址９軒のうちカマドが付設されていたものは６軒であるが、カマドの形態を明らかにできたものは４軒である。カマドの形態は、壁から離れた位置にあり、馬蹄形状に袖が作られているもの（１７号住居址）、壁と接するが煙道をもたないもの（１４、１５号住居址）、壁に接してロームを掘り残し（あるいは盛土したものか）、中央部を窪めて焚口としたもの（１３号住居址）があるがこれらのカマドの上部構造については不明である。

住居址内におけるカマドの位置は、全て東壁側であり、カマドを構築するに当っての一定の方向性を指摘できる。このことは、既調査の二本松遺跡、西富田新田遺跡、古川端遺跡等でも、和泉期のカマドをもつ住居址例においても認められる。また、高坏を支脚として転用していることは、１３号住居址を除いて、各カマドに共通しており、該期のカマドに往々にして認められる。高坏のもつ機能から、それをカマドの支脚とすることは、単なる転用とは考えられず、何らかの事由があったように思われる。

土器は、すべて和泉式土器として包括されるもので器種は、甕、高坏、椀、坏、坩が主体を占めるが、甑と明らかに認められるものは出土していない。

甕は、球胴とやや長胴を示すものがあり、ハケ目を顕著に残すものがある。特に、１７号住居址出土の甕（図２８－１）は、胴部外面にハケ目が付され、底部は丸底で、他の甕に比して特異な存在である。

高坏は、カマドのない住居址（１１号住）では、出土数が多いが、カマドをもつ住居址では、カマドの支脚として用いられたもの以外の出土は稀である。

椀は、口縁部が、「く」字状に屈曲するものが主流であり、器種構成に占める数は、同時期の集落である、笠ケ谷戸、雌濠遺跡と比較して、多くなっている。それとは逆に、坩の出土は激減している。

当該期の土器は、現在２期に区分されているが、さらに３期区分も提唱されているようである。土器の形態、器種の構成に時間的推移は認められるものの、今なお時期区分を設定する明確な規定は、提出されていないように思われる。同一の生産基盤（水田等）をもつ集落の動向と関連させ、一地域内における土器を詳細に検討し、それに画期を求めて時期区分を行う必要が感じられる。また、この時期は当該地域において、古墳の発生が認められる時期であり（公卿塚古墳、前山二号墳）、大きな社会的変動があったことは明らかであり、社会的動向とも合わせ、土器の研究を推進させるべきであると思われる。

（石橋）

二本松遺跡空中写真

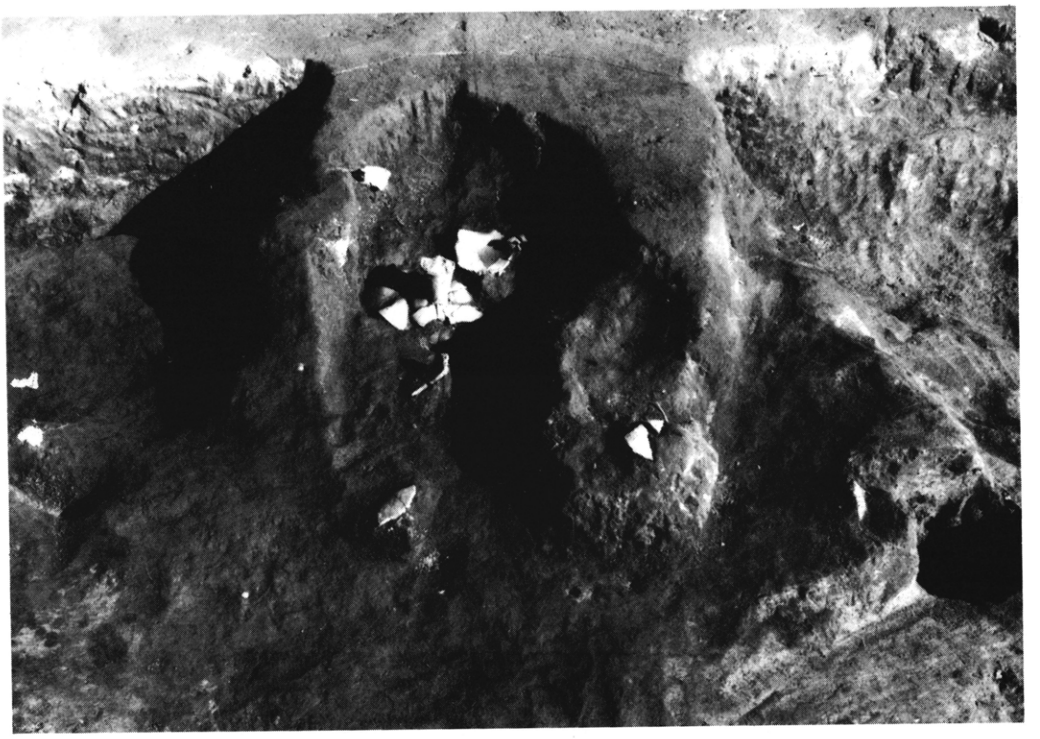
二本松遺跡調査風景

二本松遺跡１３号・１４号住居址

二本松遺跡１３号住居址カマド

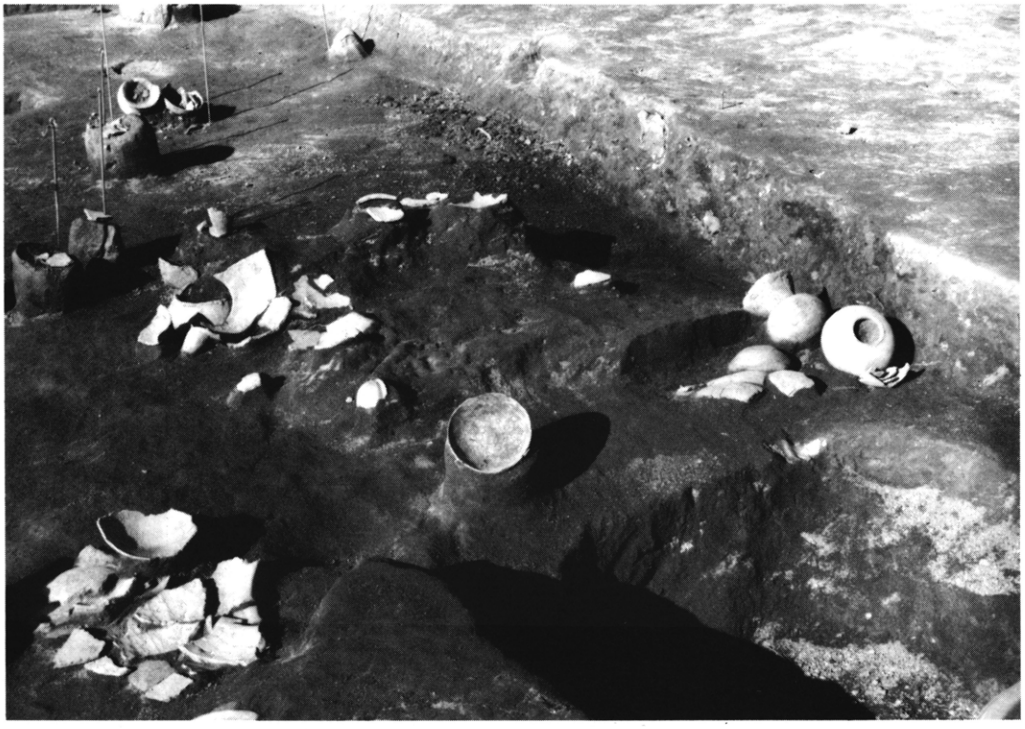
二本松遺跡１４号住居址カマド

二本松遺跡１５号住居址



二本松遺跡１５号住居址カマド

二本松遺跡１７号住居址



二本松遺跡１７号住居址遺物出土状況（カマド周辺）

二本松遺跡１７号住居址カマド

二本松遺跡１８号住居址

二本松遺跡１９号址

埼玉県本庄市
二本松遺跡発掘調査報告書
昭和５８年３月２０日印刷
昭和５８年３月２５日発行
発行　本庄市教育委員会
本庄市銀座１－１－１
印刷　本庄孔版社
本庄市朝日町３２９９